

La Renaissance inaugure la tour d'ivoire

■ 闘いの中の私 / 高橋和己

■ 日本近代の根柢 / 伊谷隆一

■ 学ぶこと、恋すること / 清岡卓行

■ 新入生特集

■ 大学へ来る人へ / 野村修

■ 主観主義的 大学案内 / 池田浩士

■ グラビア / 闘争写真集十ヶバラ写真

■ イラスト / 井上ヨースケほか

■ mesure ou, par le solution, ne peuvent

■ exprimer plus fortement certaines idées,

■ certaines intentions. La clé de Bruegel, on

■ ne doit la trouver, en fin de compte, ni dans sa

■ biographie trop incomplète, ni dans le méau

■ intellectuel qui a pu ou n'a pas d'être le

■ sien. Deux dates suffiront : 1566, l'année où il

■ premier tableau connu, et 1568, l'année où il

■ signa en 1553 et le *Misaurologio*, un traité

■ qui datent tous deux de 1555, pour la Flandre,

■ la fin d'une époque qui a duré cinquante ans,

■ et qui a commencé par un long tableau d'évolution,

■ occupant tout le linéaire, la fin de l'ère,

■ tous les peintres du pays, qui ont pu

■ rait peint des horres de l'année dans les

■ rages. Il le montre dans les traits de

■ leurs peurs dans leur visage, mais

■ espérances, qui reconnaissent la nou-

■ manière italienne, dans leur

■ Cet homme à l'air avare, le mort-

■ Bruxelles allait faire le monde de

■ mis au service de la guerre, il

■ ait mis au service d'un marchand

■ eux. Il ne se considère pas comme

■ comme un artisan, et ces ouvriers



Pays de Cocagne

52 cm x 78 cm. Munich, Alte Pinakothek (détail).  
Thème médiéval, traduction populaire du retour à l'Age  
le Pays de Cocagne appartient à la venue folklorique de  
sont pas (fig). Certes, paysans, soldats ne sont plus de  
ce monde. Le Pays de Cocagne serait-il un peu le paradis du  
Prophète ?

comparables à ceux qui ont jadis bâti les  
cathédrales et les ont décorées. Il n'est pas  
du groupe de ceux qui se plaisent au style.

Il n'en a ni le goût ni le tempérament. Il vit  
trop intensément son temps et son temps  
vit en lui.

# 招待への叛逆

# 大学大逆

今年最大の日本人への贈物！ 現代市民革命テエゼ！ ◆重版 大增刷 遂次配本中

# 羽仁五郎著

◆強い実践の要求の下に生れ、しかも理論の根本から解明され、今日のあらゆる問題に光を投げ、将来の社会をきずくための手がかりを与える、あらゆる、意味で新しい画期的な書！ 武谷三男

# 都市の論理

◆これは読者の頭の中にしまいこむような古い学問ではなく、そこから行動が生まれてくるような新しい学問である。この本は民主政権への解放の道を示している。

衆議院議員 井上 泉



◆市民の・学生の・労働者の・女性のための都市学、はじめて確立！  
◆自治体を無力にしているものはだれか？ 独占資本の永久政権がいかに都市を破壊しているか！  
◆警察機動隊が学生を襲う。独占価格の物価値上げが女性を襲う。公害が老人を襲う。暴走トラックが子どもたちを襲う。ジェット燃料タンク車が繁華街駅周辺をおびやかす。軍事条約体制が都市を包囲する。われらはなにをなすべきか！

◆読者のこえより  
◆新聞での大宣伝にうそはなかつた。  
◆宝塚市D氏27才 新聞記者  
◆現実の壁に絶望しているものにとつて、青空を仰ぐような気がする。  
◆熊本県T氏54才 病院組合

◆大学生になるにあたって本書を読むことよって今日の大学民主化の理論的、歴史的事実をつかむことができ、社会の矛盾をひとつひとつ正しいことうとする時役に立つと

思う。若者の純粋な心には、社会の悪がまざまざと映る。  
◆新潟県K氏19才 大学一年  
◆すばらしい本だ。生れて初めて本を読んだという気持！  
◆京都市K氏21才 立命学生

全国民・全大学生のバイブル！  
50万部突破！  
歴史は大きく  
転換し前進する

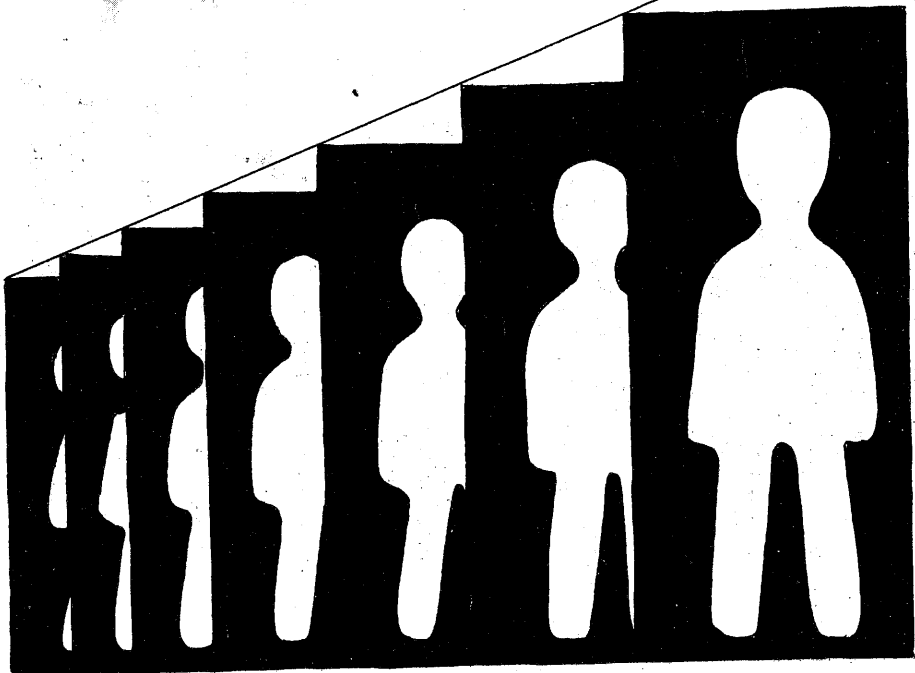
## 勁草書房

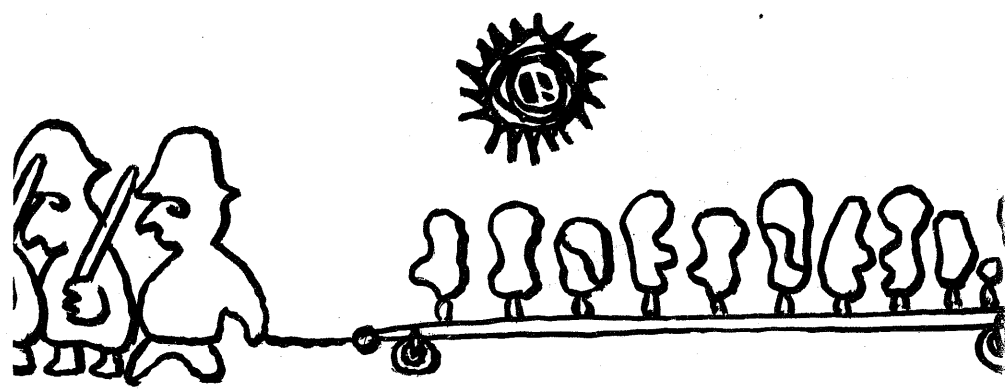
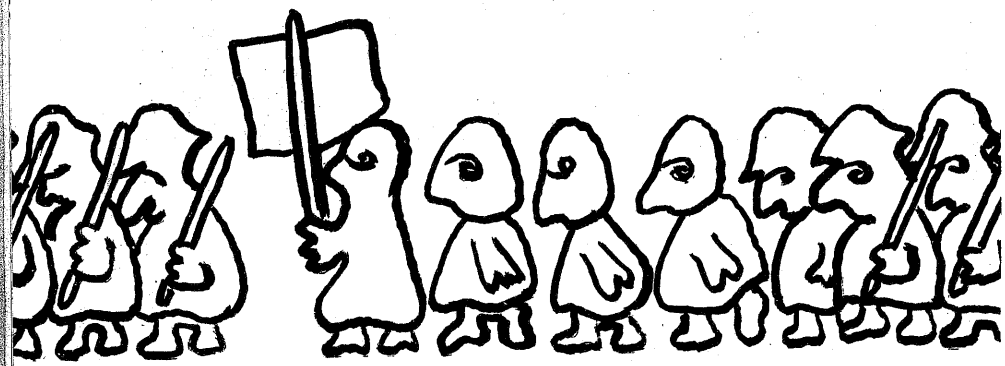
東京神田  
駿河台2

B6判 480円  
上製本 950円

何もかも求めない  
何もかも要求しない  
奪取するのだ  
占拠するのだ

「壁は語る」より





大学へ来る人に 野村 修

言葉の意味 師岡佑行

京大全共闘は訴える 小俣昌道

在学生より新入生へ 山田ゆみ  
片山須美子

■新入生を囲む座談会

大学の意味をめぐって 山田稔 ほか

学ぶこと・恋すること 清岡卓行

日和見への招待 西島 彰

闘いの中の私 高橋和己

主観主義的大学案内 池田浩士

■混迷の中の大学

立命館民主主義の崩壊 立命大

「大学」その否定と再生を 大崎 武彦

恥を知れ！ 鈴木 正穂

学園闘争の歴史 浅井 邦茂

暴力論―未知なる革命 片山 二郎

戦闘的非戦闘集団への憧憬 植村正隆

知識人犯罪者論 小針 晁宏

戦後知性とルソー学問芸術論 阪上 孝

日本近代の根拠 伊谷 隆一

三匹の唄 江波 勝夫

私的全共闘論 阿部 功

叛逆的ロマンの断章 中谷 寛章

遠隔都市とその葬り 奥野 路介

落首 反乱は混乱する

マンガ集 艶 望 井上 洋介

グラビア 炎えあがる大学

未公開写真 チェ・ゲバラ

目次・本文・イラスト ほそかわひろむ

今西中雄

# 現代の理論

5月号 4月18日発売 / 250円

東大、日大闘争を頂点とする68年度学園闘争は、70年代にむけて、さらに拡大し、全国化している。その量と質において学生層の存在をかけた“現代への挑戦”でもある。それは既存の価値・理念・体制の解体と新たな価値体系を創出せんと苦悩に激動を続けている。この学生の闘いの“現代”に突きつけるものは、単なる“大学問題”のみならず現代の科学・文化・そしてマルクス主義そのものへの問いかけをはらんでいる。本誌5月号は、この課題を真正面からとらえ、現代における科学・文化をはじめ学生運動総体の“結果と展望”を読者に贈る待望の総特集。

## ●総特集●現代への挑戦

## 学園闘争その結果と展望

現代における科学・文化論

北沢方邦・中岡哲郎・坂本賢三

大学革命の原理(下)

安藤紀典

政府・独占の文教政策批判

行田良雄

教育・大学改革の思想的拠点

田島秀実

現代革命としての大学改革

中浦和光

第一期大学革新から第二期大学革新へ

森 雅史

現代史と青年

野間宏・小田実・真継伸彦

六八年度学生運動総括と七〇年への展望

森川 徹

東大闘争の運動論的総括Ⅰ

古川 純

東大闘争の運動論的総括Ⅱ

富田 武

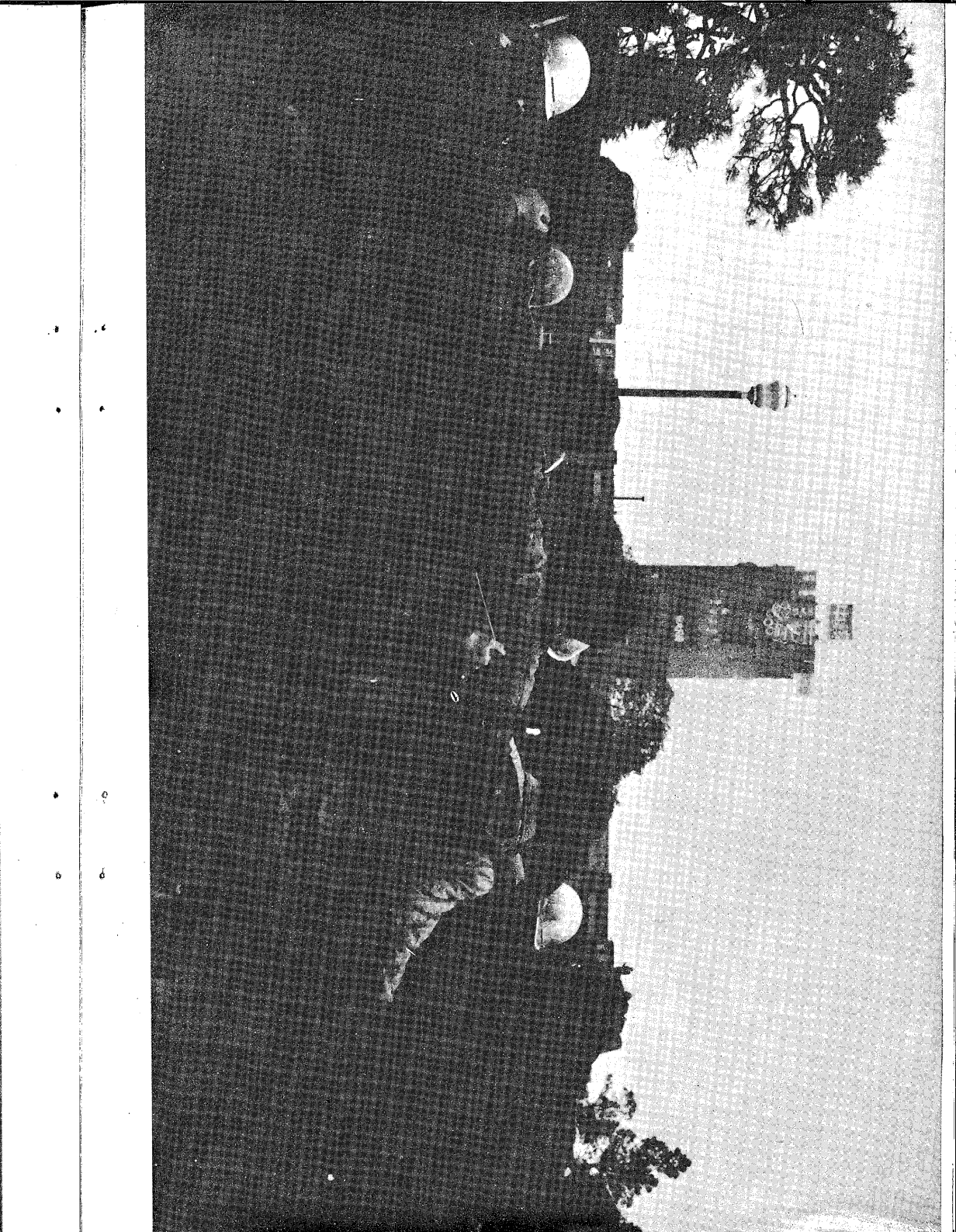
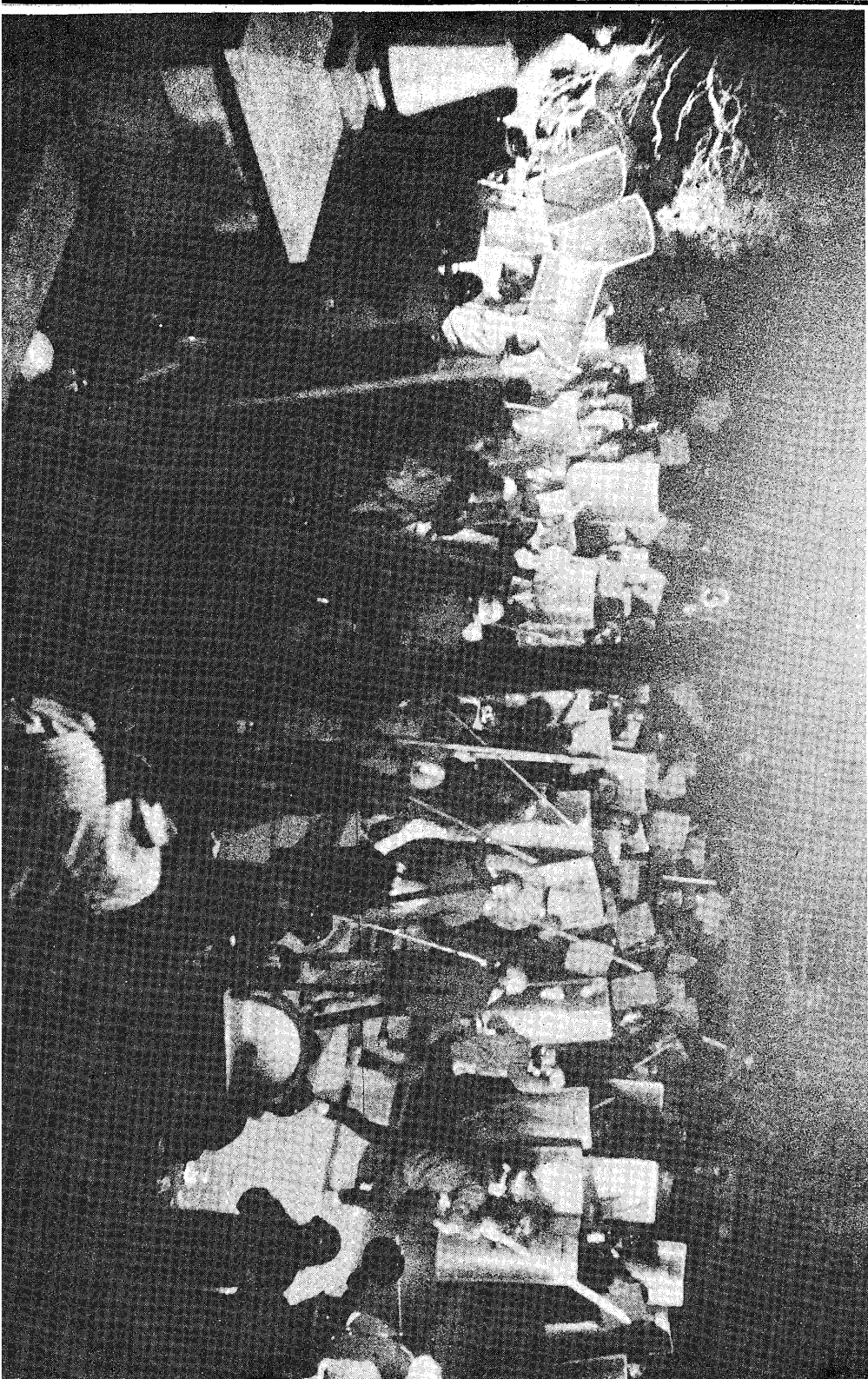
民青の学園闘争論批判

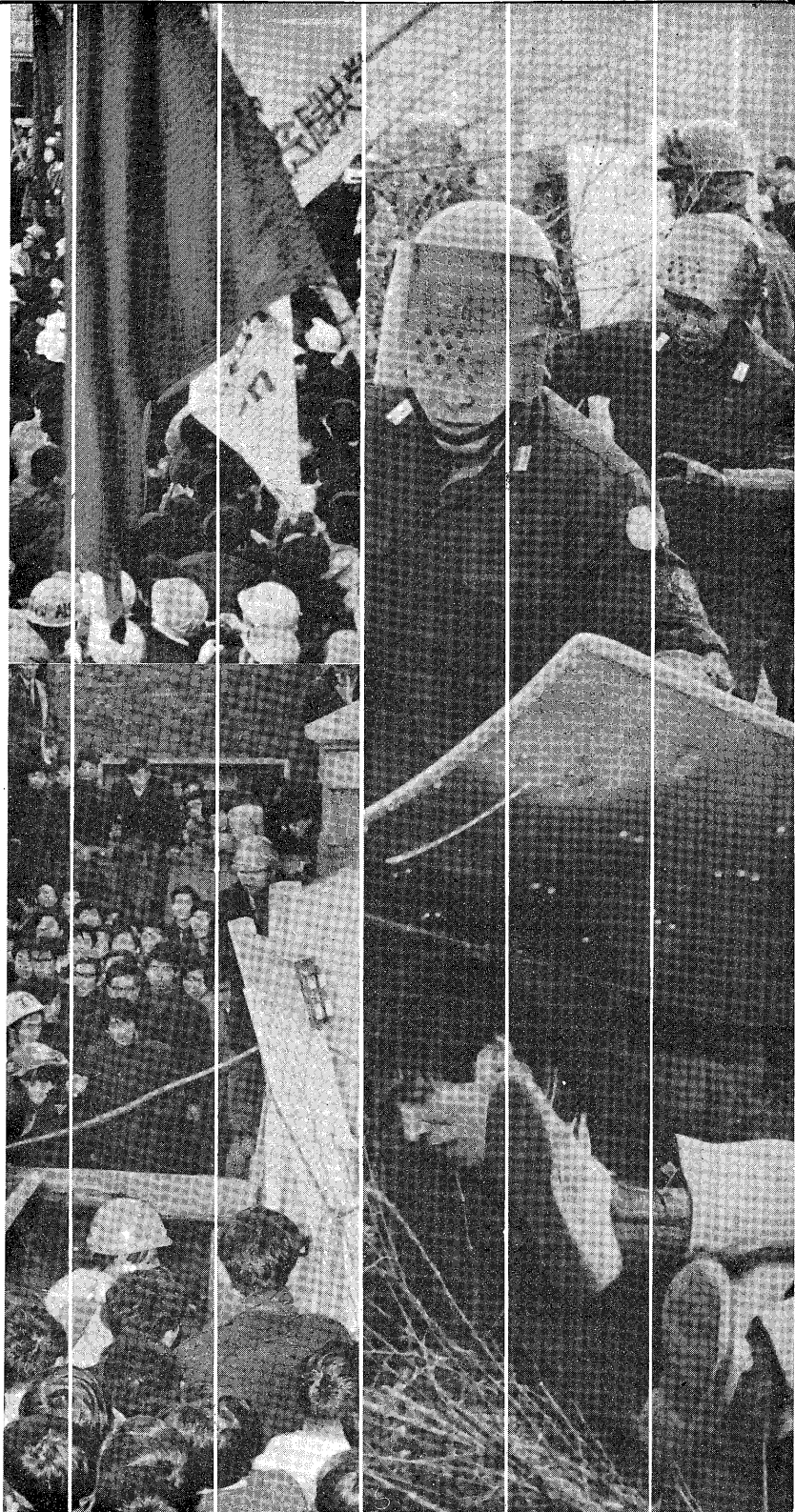
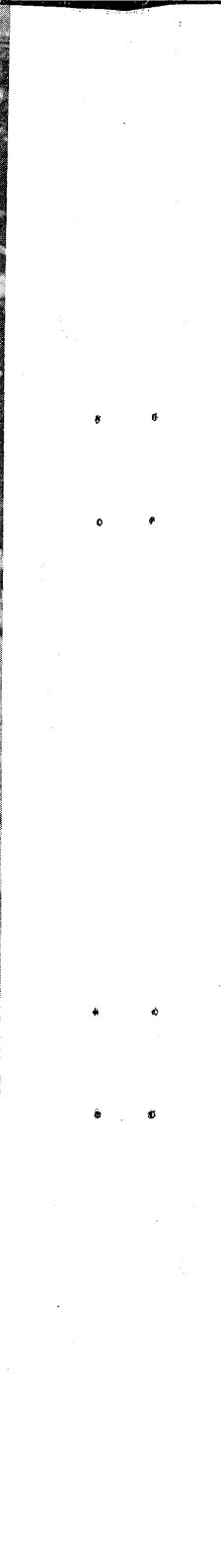
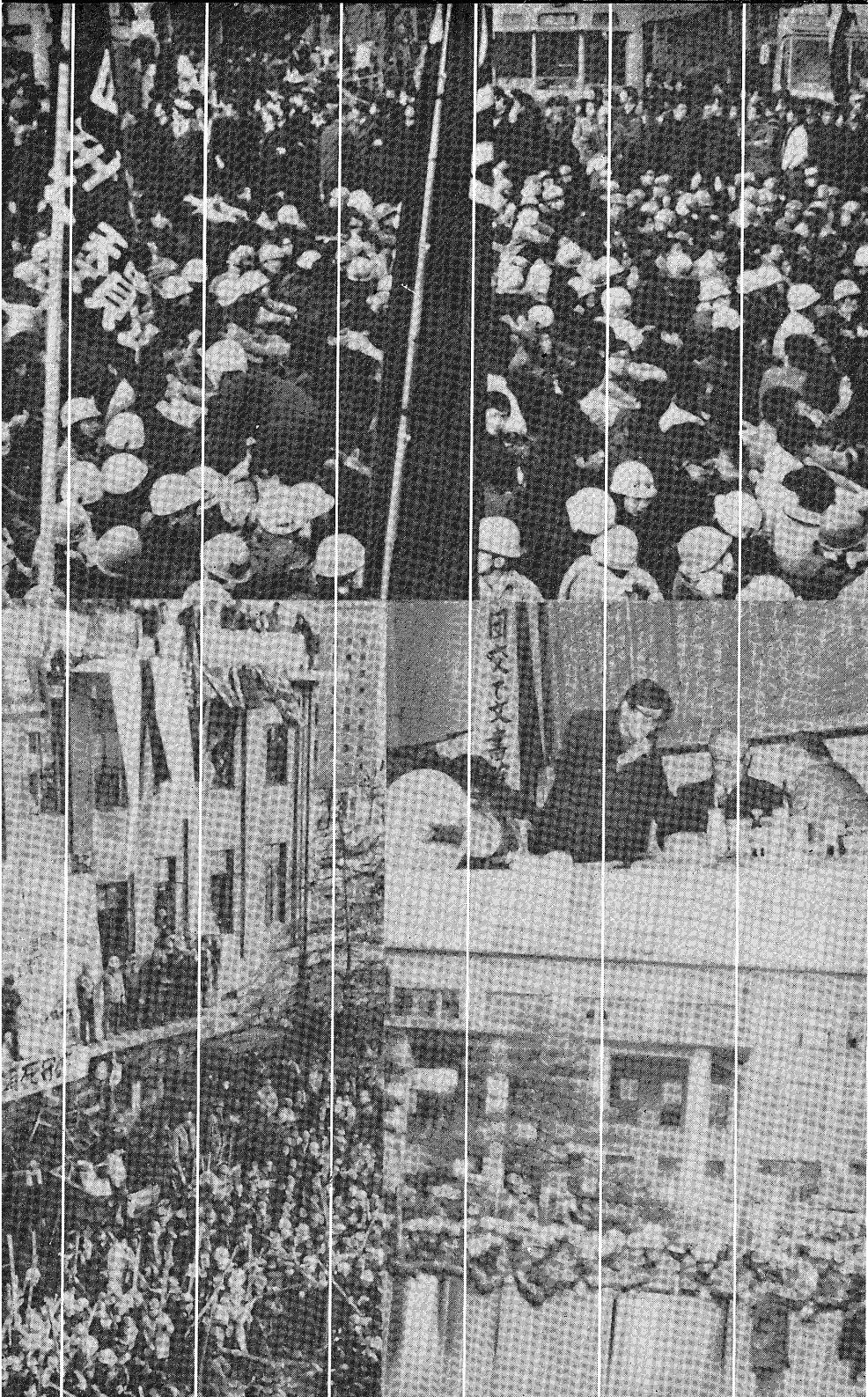
関本照夫

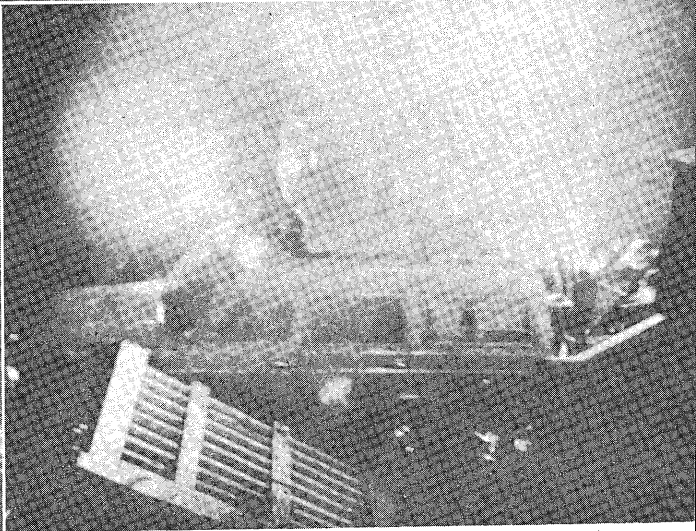
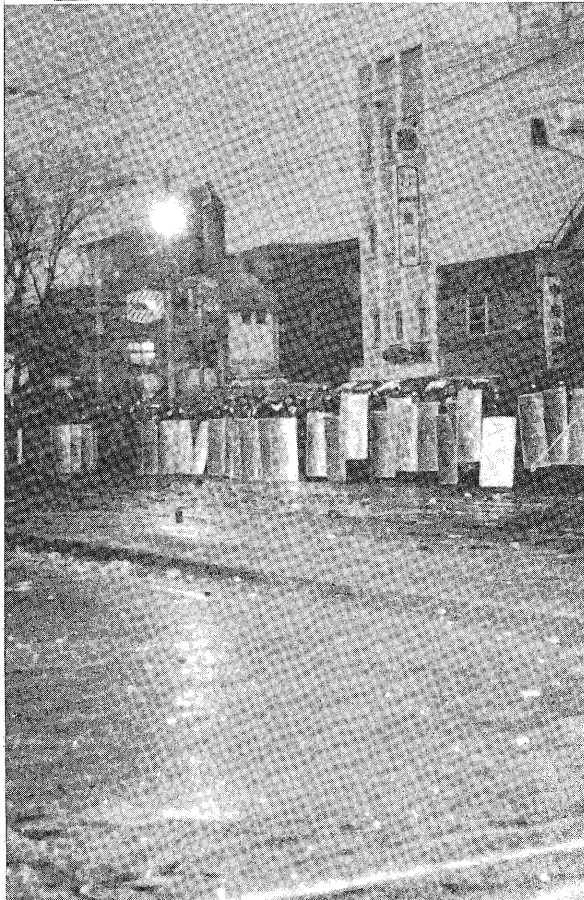
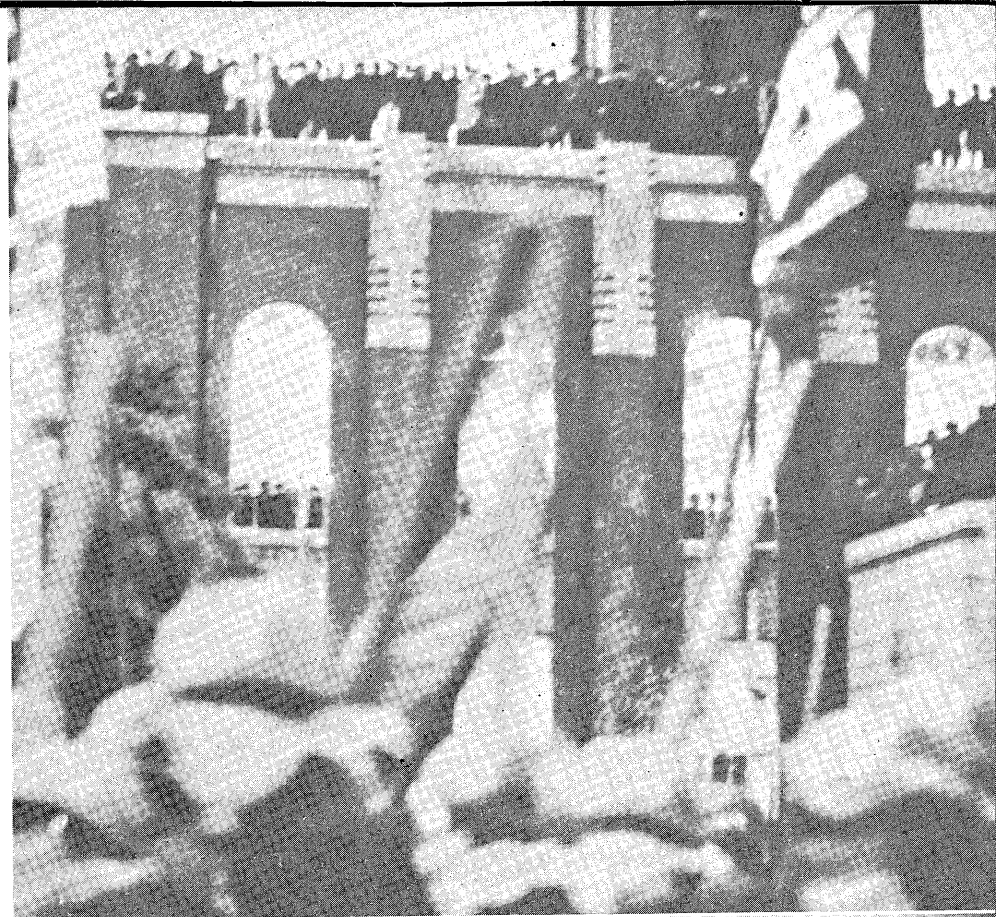
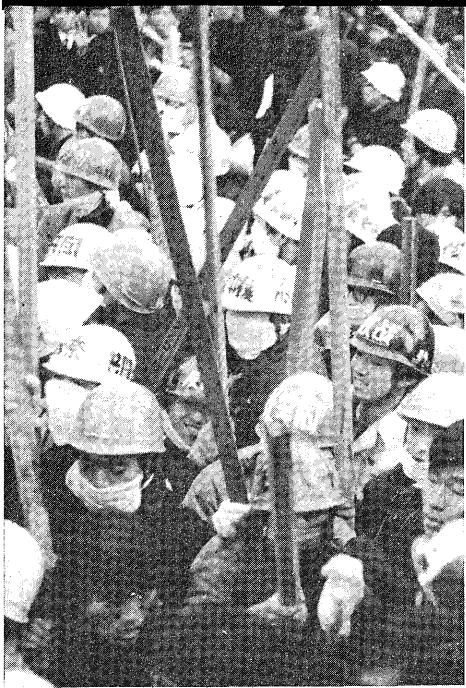
三派の学園闘争論批判

佐々木成











きみの手にきみの  
あつらえた服が届くまえに、  
帽子をのつけたきみを  
写真屋がとらえるまえに、  
大学はちゃんと取り立てている  
学費でな名で  
アッセン料を。  
大学はいつたい誰に  
きみをアッセンするのか？  
学生として生まれるまえに  
きみは、すでに裏切られ  
売り渡されている。

きみがノートをひらき  
三度あくびをするまえに、  
そして何かへの  
みだらな服従の匂いを嗅ぐまえに、  
誰かはもう舌に味わっている  
投資の結果を。計算機が  
きみを数に入れてはじいた  
答えを。すでに  
きみが送られるはずの企業では  
きみから得られる利潤が

記帳され  
確認されている。  
まだきみのお尻は  
泥沼にすわれば冷える  
まだきみの疑問符は

## 大学へ来る人に

野村  
修

寝そべらずに突っ立てる  
が、そんなきみも  
権威に免疫性はない、  
適当に罹患して  
トサカも尾骨もあつたまる。  
知らぬまに、いつか

きみの親指は盗まれている  
そしてその指が  
契約書に指紋を押ししている。  
もうゆめみられたのだ  
きみの夢は。きみの頭蓋には  
遠隔操作で行く先が記され、  
ルートのとおり  
きみはずぼりと落ちる  
指定されたきみの未来へ、  
くそがくそだめに落ちるように  
特権的に、ふうわりと、  
先着したほうが証人だ。  
きみが  
首を横に振ろうとしても  
膝がさつさとうなづいてしまう。

これは六年まえの京都大学新聞の新生  
歓迎号に出した詩なのだけれども、六年  
たって、大学も、学生も、教師である  
らしいけども、あまり進歩がないようだ。  
ということ、そのまま再録させてもら  
うことにする。



# 言葉の意味

師岡佑行



いまほど言葉のあやふやな時はない。いや言葉の持つ意味内容が何であるかが、いまようやく問いただされていくといった方がより正しい。そして、この問いは決して深遠な哲学上の学理として発せられたものでもなく、また当代の賢人たちによって大学の講壇において見出されたものでもなかった。

ただ大学の構内を世界から区切るバリケードの力だけがこの問いをつきつけた。そしてそれは、たんに言葉に向けられたばかりでなく、むしろ言葉と事物の乖離に向けられ、さらに己れ自身に向けられていることをわれわれ自身、はつきりと認めなければならなかった。日本社会のもっとも根深いところで、すでに半世紀にわたって闘っている被差別部落民の運動体である部落解放同盟は大学について「差別者と支配者を養成することに熱中してきた事実」に目をおおうことはできないと今年の方針書のなかで端的に指摘している。みじかいが、これほどはつきりと大学の本質を示す言葉はあるまい。バリケードのなかではじめて、われわれは痛苦をもってこの指摘を受けいれることができるのだ。あいまい極まる言葉の渦のなかで肺腑を貫ぬく言葉が、いかに稀少な価値をもつかを知った。連帯を求めるとすれば、友はそこには存在しない。われわれは美辞麗句に飾られた言葉による自己欺瞞をもちや許すことはできない。さらに闘いのなかで己れを問いつめ、大学なる存在を問いただしてゆかねばならない。しかもこの闘いのなかで右のような言葉を見出すことができたなかからわれわれが決して孤立していないことを知る。そしてそれはまた、われわれ自身が真に依拠しうるし、また依拠してゆかねばならないところなのだ。だが闘いはやと開始されたばかりである。

(前立命館大学講師)

# 京大全共闘は訴える

小俣昌道

(京大全共闘代表)

## ★新入生諸君!!

入試地獄の試練に耐えぬき、入試斗争を斗い抜いて大学への入学許可証を手に入れるのに成功した新入生諸君!もし君たちがバラ色の大学生活を夢みているのなら心からのお悔みを申し上げたい。

入学・授業・試験・研究・論文・卒業——大学と学問の世界——この新たな地獄におちてきた君たちに、同志として心からの喜びを表明したい。

大学の内部が、「自由な学問」のために封建的支配構造に支えられていること、そして大学自体が全社会的支配秩序を支えていることは、東大、日大斗争以来、だれの目にもはつきりとしたこととなっている。そして「大学の自治を守れ」というきまり文句が「全大人」によって叫ばれているが、それも現存の支配秩序を守り、あるいは合理化するものに他ならないことも明らかである。私達にとつ

ては、「守るべき何が」あるのが問題となっている。

「十年間変ることのない黄ばんだノート」といった無能老教授はジャーナリズムの大学批判の枕言葉であるが、批判されるべき苦痛の学問とは、「政治的中立」を標榜しつつ、資本の利益にのみ奉仕している山氏学問である。「新しい学問」「真の学問」とは進歩的文化人の口にするところであるが、それは日本共産党に奉仕することであろうか、あるいはまた、ブルジョア的ではない「別の」学問・研究に没頭することだろうか。

より高く身売りするための、商品価値としての自己の生産のための、屈従の、忍耐の四年間がただ平穩に流れ去ることを願う——そのような学生生活はスポーツによって、サークル活動によって、そして新しくは教師と学生との、「対話」によって克服され、有意義なものになるだろうとは、先輩のよくある忠告である。だが、そのような代償行

為によってにげの手をうつには、大学という重圧はあまりに大きい。

大学という地獄は、君たちに実存のアリバイを要求し、君の過去への報復と、未来への、計算されつくされた未来への拒絶をおしつける。「学生の反乱」は、つきつけられた決断への僕たちの返答である。東大―日大―京大―立命の燃え広がる炎。全国のすべての学園で火はくすぶりはじめている。爆発物はどこにでもころがっている。

この地獄から抜け出すのではなく、この地獄をおのれのものとする、それは「闘い」である。「何に對して」「何のために」――その答は自らの闘いの中にある。研究室というタコソボから身をのり出すとき、大学というぬくもりを拒否するとき、そこに戦場がある。

### ★新入生諸君！

講義と試験、研究とレジャー――諸君が大学生活を真面目にすごせばそれだけ一層、諸君の手を血で汚すことになるのだ。大学で教授され研究されているすべての「学問」は、戦争の学問であり、侵略と抑圧の道具をつくり出そうというものなのだ。理学部では米軍資金で研究し、工学部では戦争会社の委託研究がすべてであり、哲学は屈従を教え、社会学は労務管理を考えている。すべての学科で、どのようにしたらより合理的に、よりよく支配し、抑圧し、

自己と他者の解放を、全人類の解放を闘い抜く、そのような大学生活こそ全共斗の「反大学」である。

諸君が学び研究すべきは、抑圧された人民との、抑圧された歴史との連帯の上にある。今アメリカのすべての大学高校で黒人解放を闘う仲間が、ブラック・ヒストリー、ブラック・カルチャーの講座開設を要求し、建物を占拠している。民族解放闘争を闘い、部落解放を闘い、三里塚で闘う人々を知り、彼らに学ぶこと、フランス五月の「革命」を私達の教訓とすること、これが「解放し、解放される学問」の第一歩である。

私達が大学に学び、大学を卒業することによって支配者、抑圧者となることを拒否することとは、私達がブルジョアの大学秩序の中にある「学生」であることを拒否することであり、教授―学生、大学人―学外者という関係を拒否することである。すなわち、「反大学」はすべての人民に解放されており、バリケードは、占拠された建物はすべての闘う人民に解放されている。

「自己否定」は私達の解放闘争の第一歩にすぎない。私達にとって重要なのは「解放する」闘いであり、「解放し、解放される学問」の社会的実践である。「自己否定」は大学権力そして国家権力の否定へ、そして更にプロレタリア権力の獲得へと飛躍しなければならぬ。すなわち、「反大学」は、バリケードは日本―世界革命の、解放戦争の根

搾取することができるかを研究、教育している。

日本帝国主義が朝鮮・インドネシアを足がかりに東南アジアにその支配の魔手をのぼそうとしている時、大学には「帝国主義大学」としての役割が期待されている。つまり大学とは、帝国主義的支配のイデオロギーを生産し、帝国主義的経済に奉仕する労働力商品を再生産し、そしてエリート序列をつくり出すことによって資本制身分秩序を維持する場となっている。

日本帝国主義の七十年安保・沖縄を軸とした軍事・外交路線を推進すべく、その侵略と抑圧の政策を担うべく大学を帝国主義的に再編し、その中にいる私達、そして新入生諸君を帝国主義者の尖兵へと錬えなおそうとする政府ブルジョアジーの中教審答申、それを内部から推進している東大十項目派Ⅱ加藤体制、京大奥田体制など国大協自主規制路線、そして、「学問の非政治性・中立性」の名の下に帝国主義に奉仕あるいは屈服している御用学者、進歩的知識人、日本共産党の公認マルクス主義者等々、これらの密集した反革命勢力と闘い、大学を抑圧された人民の側にとり返し、大胆に学問を政治化しなければならぬ。

### ★新入生諸君！抑圧と闘うすべての諸君！！

自己の真の解放は、すべての被抑圧者の解放ぬきにはありえない。抑圧することをやめ、抑圧されることを拒否し、

坵地であり、解放区であるのだ。私達全共斗は、新入生諸君を解放区の住民としてむかえ入れたい。

### 新入生諸君！！新たな同志諸君！！

ベトナム解放闘争をはじめとして、全世界の至る所で被抑圧人民が解放の闘いに立ちあがっている。ロシア革命五十年の新たな階級闘争の高揚の波が、世界革命の第四の波がおしよせている。世界中至るところで学園が占拠され、第二第三のベトナムが、第二第三のパリが生まれている。

四・二十六・二十八の七十年安保粉砕、沖縄闘争はそのような国際階級闘争の一翼としてあり、「NATO、安保粉砕」「自国帝国主義打倒！」は四・二十六・二十八闘争を闘うすべての勢力の、アメリカSDS、SNCC、BPP、ドイツSDS、フランスJCR等の共通のスローガンとなっている。

七十年安保闘争はすでに開始されている。全共斗は、学園のバリケードは安保、沖縄、中教審答申粉砕闘争の皆としてある。全共斗の闘いは、工場に、地域に、街頭に進出し、すべての被抑圧人民の闘いと結合する。「反大学」の実践は、実習は、労働運動、高校生、部落解放運動、農民の闘いの中にある。

帝国主義的支配機構としての「帝大」を解体し、ブルジョア学問を解体し、「解放し、解放される」反大学運動の

形成は、まさにそのような全人民的斗争と結合し、それを学園に実践することであって、決してブルジョア大学制度を合理的なものに「民主化」し近代化することでもなく、帝国主義的再編の分け前にあずかれるよう「参加」することでもない。

全共斗は大学の枠を拒否し、学生という身分を拒否する。全共斗は「大学人」というナショナリズムを、京大の「狂気の三日間」が示した、大学当局と民青が一体となった、「京大ナショナリズム、排外主義」を拒否する。「解放し、開放される」学園は本来的に「インターナショナル」なものである。全国的全共斗は結合し、全共斗は反戦青年委の労働者・高校生・農民・市民との全人民的反帝統一戦線の一翼を担う。そしてまた、ベトナムーアメリカーヨーロッパー日本の国際的反帝統一戦線の実現をめざす。

新入生諸君！すべての同志諸君！

諸君は次の二者択一をせまられている。すなわち、バリケードの内側の、解放区の住民となるのか、それとも大学

# ●闘争の記録と教育の未来像

## 東大医学部

東大闘争の発火点となった医学部の闘争を軸に、東大の封建性・閉鎖性・権威主義を徹底的にあばく！また、他大学闘争との関連、世界的規模で爆発するスチューデント・パワー問題をふまえて、東大闘争解決の方向と、日本の医療制度のあるべき姿を示唆する！

徳間書店  
東京・港橋4-10  
振替東京44392

## 在學生より新入生へ

同志社女子大学三回生

山田ゆみ

今から京都の一隅でおこっている小さな出来事を聞いていただきたいと思えます。

一般的に社会認識が薄いとされている女子大学において、昨年十一月より一教授の辞任をめぐり、ささやかな運動が展開されています。これは、全国の大学でおこなわれている学園斗争の諸問題と同質のものであり、私達同志社女子大学においての七十年安保粉砕斗争の出発点になるうとしていきます。

研究教育の理念に基き学生教育をおこなって来た教授は、大学側当局の方針（教育研究は必ずしも必要ではない）とあわなくなり辞表を提出しました。この教授への学生の信頼はあつく、「辞任の反対署名」と言う運動形態で出発した斗争は短期間で拡大し、数度にわたる民主的な学生集会により、(1)教授の辞任白紙撤回要求（教授の研究時間の保障等）、(2)私達も学園に参加しよう！すなわち学園民主化要求（教授会の民主化要求、学生拒否権の要求）の

当局ー民青ー機動隊の側に立つのか、あるいはまた、帝国主義大学に入学するのか、それとも反大学に入学するのか、あるいはまた、民青の自治会執行部に従うのか、それとも私達といっしょに全共斗運動を創り出し、担っていくのか、そして最後に抑圧し支配する側に立つのか、それとも抑圧されたすべての人民と共に解放斗争を闘うのかの二者択一の前に立っている。

すべての学園をバリケードで封鎖しよう！すべての学園に「反大学」を建設しよう！全大学自治権を全共斗の手にうばいとうろ！反戦・高校生・農民の先頭に立とう！  
四・二十六・二十八沖繩・安保斗争の先頭に立とう！

新入生諸君！

新たな戦士の誕生を、全共斗の新しい仲間誕生を、私はすべての全共斗を代表して、京大のバリケードの中から誇りをもって宣言したい。

闘いの戦列に、固いスクラムをもって、  
全世界の解放の日まで！

東大病院元無給医員 園田隆也 490円下70  
二大スローガンを決議し、再度にわたる学生抗議集会、及び教授会と学生による二者協議会に団交により辞表白紙撤回声明を勝ちとることが出来ました。当時私は一年間の市民としての反戦運動より、学生として今取りくまなければならぬ問題は学内に存在している」と言う結論をえたため、同女反戦において学園民主化、及びヴェトナム反戦運動等をおこなっていましたが、学園民主化要求についてまったくのべられていない当局の回答に接し、これは学生の白紙撤回要求の強さに当局が一時的にじょうほし、根本的問題に学園民主化を学生の目よりそらそうとする姿にすぎないと思えました。この問題は当局の経営主義すなわち帝国主義的再編に基くものであり、七十年安保斗争を闘いぬくための女子大学においてのワンポイントとして存在するため勝ち取らねばならず、そのためには二大スローガンに「教授会の自己批判」を付加すべきであろうと思えます。

辞任事件の意味するものが学生にとって大学理念の崩壊を意味するものであり、当局にとって独占資本に対する従属大学の生命維持のための唯一の道であるため、当局も、又私達もゆずれざるが無く、斗争は困難をきわめると思えます。が、二大スローガンは共に勝ちとらなければならぬものであり、七十年安保粉砕、ヴェトナム革命勝利、三里塚闘争を闘いぬかなければ真の大学民主化が訪れないため、今後私の小さな闘いを続けていくつもりです。

## 京大法学部二回生

片山須美子

この一年をふりかえるとき、私にとってまさに激動の一年であったという感慨が強い。私自身が大きく変わったように思える。

盲目的に受験勉強をしていた私にとって、羽田斗争はひとつの暗い衝撃であった。佐世保・成田と続く中で、自分は何をするのかという問いに答えることができず、それ故大学の意義も学生たることの意義も私の中で急速に崩壊していく、そういった暗い矛盾の中で私は受験し、合格し、入学したのだった。

入学後春から夏にかけての期間は、今かえりみると、何かぼんやりした白々しい空虚さとして映る。まじめに休まずに出席した講義、自治会や民青のもよおし、きちんと流れていく時間……その中であって、依然としてあの暗さをもって私に問いかけながらも、私から離れたところに存在し、それ故にやはりその白々しさに吸いこまれていくように見えた反日共系の学生諸君のラディカルな行動……あのころ私は何をしていたのか？いや、はたして私は存在していたのだろうか？

秋になり、10・21斗争などでデモやストに積極的に参加するようになって、その白々しさはまだ残っていた。11

・22斗争で上京し、日大の学生と夜遅くまで話し合った思いは、その中でぼつんと明るく輝いている。東大・日大斗争はいつから私の心を占めるようになったのだろうか。

今年に入り学生部封鎖があつて民青の武装行動隊がおしよせてきた時、見物人の中から飛び出していった私の心の中には、寮三項目よりもむしろ東大・日大の姿があつたのだ。

現在、無期限バリケードストのただ中であつて、状況の困難さや理論の確立の困難さにもかかわらず、私は生き生きとしたものの動きを感じずにはいられない。私が存在する、生きていく、ということを感じさせるものがあるからだ。私をずっと支配してきたあの白々しさを打ち破り、暗さと直接に結びつきながらも一瞬にしてそれを輝く明るさに変えてしまふ可能性を秘めたもの、それはバリケードではないだろうか。その中であつてこそあらゆる斗争—改良斗争さえもが可能な学生の「権力」、安保斗争そして革命の「拠点」、自分とは何か、何をなすべきかを根底的に問いつめざるをえない真の意味での「現実」……バリケード。

やや心情的に述べすぎたかもしれない。しかしマルクスもレーニンもこのようなバリケードの中で初めて私にとつて生きたものに見えてきたことを付け加えておこう。これからの一年はより大きな激動の時代となるだろう。私は、自分自身を発見しつつある私は、その内と外との斗争をさらにすすめていきたい。

## 新入生を囲む座談会

# 大学の意味をめぐって

桃井泰道 (京大文学部新入生)  
中川行雄 (同大文学部新入生)  
気谷順造 (同大文学部新入生)  
太田俊明 (京大文学部三回生)  
中村香次 (同大法学部四回生)

天野 博 (立命大法学部三回生)  
駒上雅彦 (京大経済学部院生)  
小針晁宏 (京大教養部助教授)  
山田 稔 (京大教養部助教授)  
司会者 (編集部)

司会 本日はどうもお忙しいところ、特に新入生の方の中には今日合格発表を見て来たばかりの人もいて、その喜びをもっと別な形で発散させたいと考えておられたかも知れません。本日の座談会はそのように大学生になったということをお百パーセント肯定的に問いつめて行こうとされているのであろう新入生、大学の現実にふれて否定的ならざるを得ない在学生、そして学生側から或いは大学側の攻撃の矢面に立ち自からも教育者と研究者との「二律背反」に立ち

向っておられる先生方この三者にお集まりいただきました。具体的な立命大、京大の入試粉砕斗争などについて話すのでなく自分はどういうような形で大学を、学問をとらえそれを何が疎外しようとしているのか。そのようにお話を進めて行く上で教育、在学生、新入生の意識のギャップを明らかにし、なお誰が告発するべきなのか、何をなすべきかという問題に考えを進めて行きたいと思えます。

まず、高校時代の受験勉強をふり返りながら「大学」とは何であるか又どのような「学生」になりたいと考えていた

かその辺から……………。

**気谷** 僕は同大二部文学部に入るわけです。普通とは違って、同志社商業高校から推薦入学されたわけです。入試一本で入ってくる人ならば試験地獄の中で一生懸命になってきたのだから、僕もノイローゼになるくらい、必死に大学に何の為に入るのか、大学って何だろうと考え続けてきました。僕の場合、高校時代から、反戦会議を結成し、その議長をやって反戦デモや京大斗争にも参加してきましたが、僕達、入る者から見て今の大学は、一応良識の府だとか、学問の府だとかいわれていますが、はたして本当にその名に値するものであろうか。もしそうなら、はっきりと国家権力に対してその態度を明らかにすべきだと思えます。大学の機構が全く形骸化してしまっただけ、どうにもならなくなっているのです。現在、70年安保や沖縄問題があるわけですが、大学自体がその課題を解決していく意欲がない限り、大学とは言えないのではないかと、そういう観点から僕は東大、立命館の斗争を支持しています。

僕としては、大学は学問をさせてくれるだけで、勉強は社会に出てからするものだと思うんです。一応入ったわけですが、大学で教えてくれるものは、哲学でいえば、単なる三千年の歴史の体系しかない。問題は何を創造してゆくかで、それがなければ大学生として失格だと思えます。大学に入りながら、大学紛争に無関係であろうとするのは、

んでしまったので、今後どうしたらいいか困っているのが現状です。

**桃井** 僕は別に高校時代、政治なんて考えたこともなく、成績もある程度とれたから、京大に入った訳で、特に京大に入りたかったわけでもありません。大学ではやはり勉強したい、高校時代の勉強は、いくら難しい数学の問題を解いても先生の所へ持っていけば、○×をつけられてしまう。そうではなくて大学では、一般的に正しい、誤っているという以上のことを学んでゆきたい。できれば大学院に残りたいと思います。

**駒上** 皆さんは専攻でどんなことをやるつもりですか？特に気谷君は学校側からおしつけられた講義をうけるのではなくて、自らやるもののみつけていかなければならないと言われたと思うのだが――

**気谷** 国文というのは、日本の文化を対象とするわけだから、日本人のもっている性質、性質を学びだしていききたい。そうした日本人の歩みが、現代の状況と非常に結びついていっているのです。例えば、日本の風土の中で、マルクスも可能かどうかということを考えるわけです。

**中川** 僕は社会学科ですが、実は心理学をやったのです。今の心理学は、聞くところによると、工場管理などに就職するそうですが、そうした心理学をこちらに取り返すということ、立命の心理学を受けたのですが、見事に落ち

誤りだと思えます。僕はまず、自己の意志を確立し、自己変革をとげた上で、学問をしてゆこう――国文学に入ったのですが70年代の思想と自己をその中に投じてゆきたいと思っています。

**中川** 僕は、同大二部文学部に今年入ったわけですが、僕の場合、中学校から6ヶ年一貫制の受験校で、大学に入ることが前提とされてきました。高校三年になってから、ベ平連的な反戦運動からはじまって、おさだまりのコースをたどって過激派となりました。僕が考えたのは、大学は一応学問する所らしいが、学問とは一体何の為にするのか、学者といわれる人が、書齋でやるものではなく、学問とは人民の為にするものだと思うんです。学者といわれる人達が、自分達の興味だけで密教的な集団をつくって学問を追求し、自分らにだけしかわからない言葉で、自分らの間で発表し、互いに称讃しあうというような為に、巨額の金を集めて大学をつくるというようなことでは絶対になく、学問は人民に還元しなければならぬものだと思うが、現在の大学はそうなっていない。それだからこそ全国で大学斗争が起っているんだが、それでもなおかつ、そうした大学に点数をとる為にせつせと問題集を読んで入るのか、むしろ、大学以外の場で研究した方がいいのではないかと考えたが結局大学に入ればやはりなんらかの学問ができるのであって、論理的には割り切れないながらも受験して、ボンとどびこ

てしまいました。それで社会学というものの内容は今はわからないのです。

**桃井** 僕は東洋の哲学をやりたい。やはり東洋の思想というものは日本人に大きな影響を与えているでしょうから、そうした影響を自分で考えていきたいと思っています。

### 大学の理念と入試粉砕斗争

**駒上** まるで聞き手になるのですが、先日の入学試験の際に、入試粉砕が叫ばれましたが、入試を行なう側に立たされた先生方は、どういう受け取り方をされたかがいたいのですが――

**小針** 僕が入試粉砕に賛成なのは、人間にレッテルをはる社会をやめたいという点からです。入試を通して、コレは京大、アレはちがうという把え方をする社会をなくすということですね。レッテルがあっても、例えば100%ウールと書かれていて、まがい物があることもあるんだし(笑)――何でもレッテルで見ようとする安易さというのをつぶしていくことです。

又、卒業免状や単位なんてものがあるからややこしくなるので、ちゃんとした図書館や談話室やサロンがあって、興味がある者が、身分なんてなくディスカスする所として大学があればいいと思っていますが――。

入試から卒業、そして学歴偏重が出てくるものを根底から崩すことが望ましいし、それが文化の在り方だ。入試なんてせず、誰でも聞きに来いということでもいいと思うんです。中村 入試に合格したり、単位をとれてはじめて勉強したという実感になる、入試や単位などいわずゆるゆるの制度的保障としてあるのでしょうか。

僕の場合、制度的には通過している訳ですが、その制度的保障が身についたものになっていくかどうか疑問だと思いますけれど――

司会 入試粉砕というスローガンがあがったのですが、いわば被害者の立場にあった新入生の方達はどういう風に受け取られましたか？

中川 僕は入試粉砕のスローガンは正しいと思ったし、それを支持する立場から行動しようとしたのですが、立命館を受けた時、やはりジレンマに陥入るんですね。思考停止みたいな状態で受験が済んでしまったんですが、後で思うと自己欺瞞のなんです。

桃井 僕はやはり入試をやってほしかったですね。入試阻止を言っている人々は大学の封建性をどうかしようと言っているのだろうけれど、僕達受験生には、そういう主張も新聞、ラジオでしか知ることができないから正しい判断なんてできないと思います。とにかく入試だけはやってほしかった。マア政府がなんとかやってくれると思ってました

けどね(笑)――  
それより今年は試験が難しいということに頭を奪われて、とにかく勉強することでせい一杯でした。

司会 感情的な反発があつたと思うんですが――

桃井 たしかにありました。時計台の屋上にあがって旗を振っているのを見ると、何か幼稚なヒロイズムに酔っているような感じがありました。理論的なことより、そういうことばかり目について、馬鹿げたことやってるなど思っています。

司会 ここで入試粉砕というスローガンの出てきた過程をC斗委の一員として京大斗争を担っている太田君に説明して頂きたい。

太田 入試斗争に関して言えば、一つには帝国主義的制度を支える入試という把握から、教育体系に対する攻撃という意味、更に一つは、斗争破壊としての入試という把握――それは3月1日の機動隊乱入にも現われているが――から入試粉砕斗争が出てきた、それが全国的視点から全国入試粉砕というスローガンとなった訳です。入試粉砕は、教育体系に対する全面的な否定としてありながら、それが思想的に貫徹できなかったこと、更に、現に大学にいる自分達が自己の存在に対する自己否定を必要とされながらも、それが出てこなかったこと、以上の2点の故に単にゲバルトの問題へと展開される傾向があり、結果として教養部斗争

委員会キャンペーン斗争となつてしまった。やはり総括は自己批判的にされねばならないと考えています。

それと幼稚なヒロイズムといわれましたが、時計台で旗をふるのは長年の怨念みたくなっています(笑)、なにか処女峰を征服したような気がしたのが実感ですね。

桃井 入試粉砕には「帝国主義大学解体」なんてスローガンがあつたんですが、それをやっている人達は、京大をやる覚悟が出来てるかどうか知りたいですね。もしそうなら、少しぐらい同情したかもしれないですけど(笑)――でもやっぱりイヤですね。僕ら予備校で話してたんですけど、もし入試が行われなかったら、それこそ皆で、ゲバ棒もってなぐりこみかけようなんて(笑)――

気谷 問題の捉え方が、少し違うと思うんです。全共斗の人達にやめるか、やめないのかと質問するのではなく、自分が提起された問題にどう関わっていくかが一番大切なことではないでしょうか。

駒上 僕の場合、大学院という位置、いってみれば研究者の卵という位置にあるわけですが、現在の大学に対して、どうしても留まりたいというほどの執着をもっていないので、辞める辞めないということについて余り深刻に考えていない。しかし、今辞めて出ていくということが、戦線離脱にしかならないのではないか。つまり、僕が関わってきた斗争の中で自分自身に課した課題を解決することなしに

辞めていくことになりはしないか、今までやってきたことの意味を問いつけることができなくなるという気がします。司会 桃井君のやめるかどうかという問いは、同時に先生方にも投げかけられると考えますが、

小針 京大の存在に反対だからと言って、すぐさま辞めるということにはならない。それよりも、自分は京大の獅子身中の虫になるのだ、内部から変えていくのだということであり、そういう意味では辞める必要などまるでないと思えますよ

山田 私は入試という問題以前から、大学解体をやらねばならないと考えていました。だから大学を辞める覚悟もしてきました。だけど、簡単に辞めてしまうのではなく、徹底的にやるところまでやって、弾圧にも最後までたたかっただけから辞めるということ、ハンストに入る前に既に、そういう覚悟はしていました。

入試阻止斗争については、小針さんには賛成ですが、さつき太田君が触れたように、力で押してゆくだけで、思想的に熟してゆくというようなものではないように感じてました。

### 大学解体の意味

天野 中川君ね、立命の場合、京大よりもっとドロ臭く、

教師が居なくなった。だからもう心理学は先生が居ないんですよ。それでもなお心理学を受けたというのは？

**中川** 教授がいなくても、その故により自分達で何かやっていけるんじゃないかと思って——その中で自分もそれに加わって、何かをつくっていいこうという気があったのです。

**駒上** 立命館大学を解体する為に、立命を受けたんですね。

(笑)

**天野** 僕の高校時代は、当時、日韓問題など僕の精神的な成長にみあっていろいろな問題意識を刺激するものがあって幸いしたんですが、立命の民主的な状態を見て、私学だったら立命と決断したわけです。今はそれを否定する側にまわっている訳ですが、その高校と大学での自己の逆転を話したいと思います。今年、文学部は解体状況にあるのに、逆に受験者数は増えたんですね。立命の場合、京大と違いマスプロだし、学問をするというイメージとはかけ離れているんですよ、京大の場合、卒業してからの出世コースなんか見ても、まさに帝國主義大学そのものですが立命は入ると、高校の時より後退するんです。大教室ばかりだし専門課程もひどい。だからこんな大学ならつぶしてしまってもいいと思うているし、反大学といっても本来の大学が見当たらないという現状です。大学とは本来、統一の価値や理念の追及の為にあったが、今、例えば立命や日大斗争の地平では、大学が学問をするという考え自体が崩壊して

てきて、中で幻想に気づくというか、否定的に働くというんだったら解るんですが——。最初から魅力を感じていない者が、どうして大学に入ってきたのか。例えば、大学以外の所でも斗おうと思えば斗える訳でしょう。

**気谷** 僕自身、どう言っているか、昔なら大学に入る時点で誰に学ぶかという点で、非常に大きな希望があったと思うんですが僕にはない、現在問題は、価値を創り出さねばならないという使命感で、僕もそれで入ってきたのです。しかし、学生自身の主体性の喪失ということは言えると思います。

**山田** 新しい価値の創造は、君が大学に入って、国文学なら国文学で現状を否定し、創り出す訳でしょう。先程から話ではそうでもないでしょう。桃井君のような形で大学に入ってくる人は沢山あると思う。それは一つの幻想かもしれないし、それが大学という現実にあつかって否定され、それを契機として自分をもう一度見直していく形を進む方向というものが必ずあると思うのです。そういうものを最初からナンセンスと切ってしまうのは、非常にせまい見方となるのではないでしょう。

**中川** もうひとつ僕自身はつきりしないのです。結局6ヶ年の受験勉強の延長上に大学に入ることがあって、自分で入試粉砕とか、大学なんてナンセンスだといいながらも、自分の前に大学に入るというルールがひかれてしま

いる、その中で僕達をつき動かすものは、一体何なのでしようか？

**駒上** それは結論が出るものでもなし、結論の出る時は斗争の終わった時だという気がしますね。

**司会** 今の天野君の言われた事は、東大、京大の斗争が反体制エリートであるという批判も含んでいると思いますが。

**小針** 立命はマスプロだが、京大はましだという発言がありました。必ずしもそうとも言えないんじゃないか？

例えば、ある年代、優秀な数学者がゴソツと出て来たんですが、それは教師が居なかったからで、要するに悪しき影響を受けなかった(笑)

### 大学のネガティブな把握からの脱却

**山田** 皆、大学に関係している訳ですが、誰一人として大学はいいところだと言う人が居ない、まあ、既に卒業した人の懐古談は別として、大学とはいいいという人がやはり居ないというのは不思議ですね。又、大学は何の為にあるのかなんて自分に問わない大学の先生がずい分居るのですよ。自分と大学との関わりがネガティブにしか見ていないというの、いろんな問題をやらんでいると思います。よく解らないのは、新入生諸君は桃井君以外、大学に対してネガティブな把握方をしている。最初に一つの夢を持って入っ

っていてそこからとび出すことができなかった。しかし自分を合理化するためでしかないかもしれないけれど、まだ大学に何かあるのではないかという期待を持つてるんです。**山田** 皆まだ本心が出てないのではないでしょう。大学なんてつまらないところだと思って入ってきて、そのとおりつまらなかったという風にすつと通り抜けてしまうのではね。

**小針** 大学という所は、肯定できるようなすばらしい所ではないが、入らねばバスに乗り遅れる。だからポジティブでなく、ナンセンスだと思いつながら入っている。入らなければもつとひどい、そういう所が多分にあると思うんです。**司会** 私自身の場合にしても、今のように入学問題は生じてなかったけれど、大学に入ることと社会に出ることを、一応自分なりに考えてみました。結局、効率ということでは終わってしまったんですが、そうした点、既に大学に入っている方からの発言があると思います。

**太田** 僕の場合も大学に入って何かをつくっていいこうということではあったのですが。実は学生運動をやる為に入ってきたようなものです。京大はアカデミックだとよく言われるんですが、未だ一度も実感として味わったことがない。大学の4年間という時間が特権的なものであることは否定できないが、それをどう有効に使っていくかが問題ではないでしょう。

## 教えること、教えられること

**駒上** 桃井君が大学に入って何よりも学問をやりたい、勉強をやりたいと言われるのですが、今の大学においていったい学問とは何か、結局小針先生が云われたように四年間、単位、合格点をとって、卒業証書をもってそれで「学問」したという気になるにすぎない。理科系の場合、それは技術であり、文科系の場合、高校時代の延長の「知識」を与えられるにすぎない。それによって学生が手に入れるのは、京大なら京大という他との差別でしかないというのが現状ではないでしょうか。結局僕なんか、自分の興味のむくままに講義とは関係のない本を読んだりして八年間をすごす時間を与えてくれたのが大学であるということになっていきます。

**桃井** 僕が言っているのはそんな意味ではなく、大学での講義というのにも必要ではないか、学問というのは先人が積みあげてきた体系を知らなければできないのではないかと、ということなんです。そうした体系の先を自分がやるというのが学問ではないでしょうか。

**駒上** そういうことだったら、家や下宿で寝ながら本を読むということではないのですか。

君が学問したいという気持はわかるのですけれど、現代の

「学問」のあり方を問題にしなければならぬということなんです。

**桃井** でも、それでは無駄が多いのではないですか。専門の学問など知らない今の僕が、今まで体系的にやってきた教授に教えてもらうことは必要ではないでしょうか。僕は自分でやるとしてもまだ先端までいっていないでしょう。1+1=2というのを、自分で発見するまで待ってれば、何も発展はないじゃないですか。文化の発展は、先人の跡を辿って自分がその先に幾らか進むってもんじゃないですか。

**駒上** 自分が全てやるってことじゃない。吸収するのはいいんですが、一方的に知る制度としてあるのが、今の大学であるし、それでいいんでしょうか、と言っているんです。貴方が例えば、小針先生なら、小針先生に友人として訪ねて、そこでの緊張関係を造りあげてゆく、先程、小針先生の言われたサロンのイメージもそうだと思うんです。一方通行じゃいけないことだし、貴方の言われる高校時代の勉強を乗り越える勉強というものだと思うんです。

**桃井** 僕に今すぐ、あなたの言われる緊張関係に立てと言われても無理でしょう。

**駒上** 何かを質問していくってことじゃないですか？今、貴方がこうして発言するってことが一つの緊張関係なんですよ。

**気谷** 数学で1+1=2と教えられたとして、テストで1+1=2と問題が出れば、必ず、2と答えねばならないということ自体、一つの妥協になってしまふんじゃないですか。

**桃井** 1+1=2という定義は規定であるけど、その社会的な様々な規定を知らない限りそれをくつがえすこともできない。例えば、湯川さんの中間子理論にしても、それを知らなければ、批判できないでしょう。そのような今までわかっていることを教えてもらおう、即ち、知ることが大学の大きな役目ではないでしょうか。

**小針** そりゃあ、幻想だよ。何かを教えてもらおうなんて大学に入るのには、そういう点では、何も教えてもらおうことがないし、僕にしても教えるつもりもない(笑)。教師の言うことが、いつも正しいとは限らないんですよ。皆と同じくらいいいかげんなことも言うし、嘘もつく。それを考えておかないと、悪しき影響を受けるといふことですね。全く対等と思ってもらわねば、こちら何も言えなくなってしまう。僕は教えるつもりは毛頭ないんでそんな犯罪に手を貸すようなことは(笑)。

さっきも言ったように、面白ければ来ればいいし、そうでなければ来なければいい。

**司会** さっき桃井君が云われたように、教授の知識の総量が相対的に学生よりも多いということがあり、一定の教育方法に従って我々を教えるということがある以上、最終的

にも教えられるものとしての学生が、教えるものとしての教官を乗り越えられないということがあるのではないのでしょうか。

**桃井** 全てを吸収してしまつて、それから先に進めばいいでしょう。それが学問だと思います。僕は、自分の能力を信じてますし、それでやっていけると思ってます。

**司会** 私達は知識の全てを否定しているのではなくて、今の大学では知識の一方的供給としてあるものを否定する、そこで先生と学生との新しい緊張関係をつくり出してゆくということなのだと思ふのですけれど――

**駒上** 現在の大学では、私自身の経験から言つて講義に出ても何ひとつ、私の知識欲を湧きたたせるようなものはないのですよ。だから、多少とも知識の豊富な者から、自らが奪い取っていくという作業がどうしても必要になるといふことがあるのです。

**桃井** だから僕の「知る」といふのはそういうことなのですよ。

**小針** 例えばね、デマかもしれないけどこういう話があるのです。毛沢東は「資本論」を読んではいなかったふしがあるという話です。だから、革命の理論をつくる為には、なにも資本論を全部知ってなければならぬということはないでしょう。

**山田** 今の大学の単位とか卒業証書のあり方には学生諸君



も大きな不満をもっているのですが、教える側にとっても、そういう形で教えねばならないことがとつてもいやなこと、教える者、教えられる者両方を墮落させるような要素を沢山持っていると思う。一つには単位をやる、やらぬいそれから卒業証書を与える、与えないという形でいつのまにか芽ばえてくる小さな権力意識ですね。つまり教官と学生という形で支配し、支配されるという意識が身についてくるとい気がします。

僕の入ったのは、昭和24年で、生活が切迫していたせいか、割りと教授と学生が生活の場で接触できたというか、文学は何の為かなんて、論じたことを覚えていきますね。この頃は外国文学の研究もアカデミックになって、新刊の洋書を誰が最初に買って読むかということ、文学を通じての自分の研究の意味の自己批判、自己反省は全くないですね。

**駒上** 私は経済学で、ゼミナールは大体10人ぐらいですが、イデオロギー的にも白紙で入ってきた者も、いつの間にか指導教官と同じことを同じ口調で言うようになる。全く批判能力を失ってしまうんですね。

**小針** だから、経共斗がなぜゼミナール廃止を叫ばないのか、まさにそれは封建的の全人支配ですよ。

**駒上** 逆に言えば、山田先生が生活の場のコンタクトがあったと言われたんですが、生活まで支配されてしまうとい

うことがある訳ですよ。抜け出ようとすれば、人間関係までも失われてしまう訳です。それも教える者と教えられる者という関係が持続していることに、根本的に問題があると思うのです。

### まとめ

**司会** それでは、新入生の皆さんに四月からの抱負をうかがいましょう。

**中川** 社会学というものがどういうものなのかを早く知りたいですし、できるだけ沢山の本を読みあさりたと思っています。漠然とはしていますが、思いきりあばれてみたいと考えています。

**桃井** 僕は学問的にも、政治的、思想的にも自己を大切にしたいと思っています。付和雷同というか、誰かにアジられてついてゆくというようなことにだけは、なりたくないと思います。どんな時にも反対の意見を聞いて、納得のゆくまで考えてから行動してゆくようにしたいと考えています。具体的なことはわかりませんが、そういう考え方であれば、誤らないと思うんです。

**気谷** 四月から教養課程ということで、哲学とか心理学とか高校では部分的にしか知らなかったものを学べるということに喜びといったようなものを持っています。学生運動

は大学に入れば、直接的に体験する訳なんです。現象面だけでなく、内から主体性を失わないように把えてゆきたい。何よりも大切なのは大学に入って何か教えてもらえるというような甘い考えを捨てるといふことでしょう。自ら求めるものを求めていくという主体性が、必要なのだと思います。

**小針** そういう考えを持って大学に入ってこられるのなら良いのですが、大学が学問の府であるとかいう幻想をもつて入ってくると、よく言われるような「五月危機」にぶつかって何もかもおもしろくなくなるといふことが生じてくることがあるわけですよ。

**駒上** 大学のまわりの麻雀屋とか、パチンコ屋が繁盛してくる季節ですね。

**気谷** 先輩の方も、そうした五月危機を味わったのですか？

**太田** いや、僕はデモに明け暮れして五月危機どころではなかったですよ。

**司会** ある意味では、デモに明け暮れるというのも五月危機なのではないですか(笑)――

先輩の方々、先生方の方で新入生に対して希望、注文があれば――

**小針** 所謂、勉強という意味じゃなく勉強してほしい。いろいろの本を読み、教師を批判するという形態ですけど。

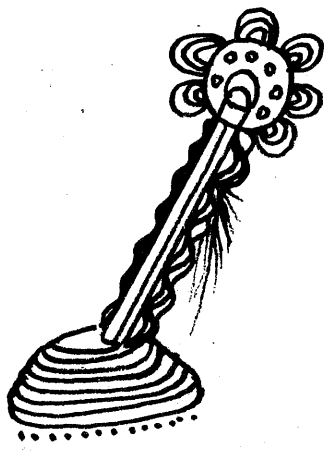
**太田** 教えられる存在をやめるところから始まると思うんです。そして誤るところから創造が始まるんじゃないだろうか。自分の頭を規格品にはめ込むような生き方はしないでほしいですね。

**司会** 大学というものにさまざまな不満があり、否定されるべき点が多い。けれども、自らを教えられる立場「学生」として規定するならばやはり旧来の教育秩序の中で教授によって体系づけられた知識を切り売りされ、それを買うといふことにしかならない。旧い秩序を破壊して行く者にこそ創造的秩序を荷う栄光が与えられると思います。「反体制エリート」の問題も「学生」を否定し「学生」から越境してその時学問とは何か大学とは何か或いは社会はどうあるべきかと考えることによって新しい意味を持つのではないかと思います。

**駒上** 合格通知を受け取ったばかりで楽しい気分ですがここに来られた新入生の方々は、こうして大学というところは嫌なところだという話ばかり聞かされて、いい加減うんざりしておられると思いますが、四月以降、いつ授業が再開されるのかわかりませんが、授業が行われるようになった際に、あなた方に望むのは、講壇に立っている先生が、なぜ大学にいるのか、なぜ自分の前に立っているのかを絶えず猜疑の眼で見続けてもらいたいということです。

**司会** お忙しい所、長時間ありがとうございます。

# 学ぶこと・恋すること



清岡卓行

二十歳になる前に、つまり大学に入学する前後に、自分のしたい仕事なり研究なりを選ぶということ、それは一面においてはとても楽しく、もう一面においてはほどことなく寂しいものではないでしょうか。というのは、多くのさまざまな可能性の中から、何かひとつだけ、自分が好ましく思うものを選ぶわけで、青春という言葉にいかにもふさわしい潑らつとした希望をふくらませる限りにおいては、ま

ことに楽しいことではしうが、これを裏返して言えば、惜しくも選ばなかった残りのものすべてとは、一応お別れする寂しさを味あわなければならぬということなのです。マルセル・ブルーストという作家の若い頃の言葉に、どんな素晴らしい現実の一輪の花も、空想の花束には及ばないという、まことに詩的な述懐があります。選択される一つの現実と、多くのさまざまな可能性とを比較して、かなり

ロマンチックに、可能性という想像の世界の方に好意を寄せたもので、生きるとは夢みることだといったそのときの信条がかくされていると思います。

もちろん、ここには夢みるものの真実が、それも切ないほど甘美にこめられています。しかし、人間はいつまでも夢想家としてとどまっていることはできないので、こうした思念はいつか超越されなければならぬのです。時間が経てば、さまざまな外的条件によってそうするように強いられるだけではなく、自分の内部から湧きあがる力の意識にも促されて、現実の中で生きて行こうとするのです。つまり、その時期が多くの若いひとびとにとって、大学に入学する前後にあたるだろうとぼくは言いたいです。

それは、具体的には、どのような大学のどんな学科を選ぶかということになるでしょう。例えば、法律、経済、経営、社会、文学、哲学、心理、歴史、地理、数学、物理、化学、医学、薬学、工学、農業、家政、体育、美術、音楽など、数えあげるときりがありません。そして更に、例えば文学ならば、日本文学とさまざまな外国文学そのほかに分れるといった具合です。

こうしたことから抽象できる一つのことからは、個々の特殊性を通じて世界の普遍的な真実を探るということですいや、もつときびしく言えば、個々の特殊性を通してしか世界の普遍的な真実を探ることはできないということでは

人間の魂の奥底には、人間としての全体性を獲得したいという欲求があるはずですが、局面を学問に限っても、一人の人間が多くの学問に精通するということは、超人でない限り不可能であるように思われます。これを別なふうに言えば、一つの学問自体が、すでに究めたい底知れぬ深さをもっているということなのです。この場合、一つの現実を選ぶということは、同時に、それを通じて眺められるところの無限を選ぶということではないでしょうか。

ここで比喩を持ちだすならば、自分のしたい仕事なり研究なりを選ぶということは、自分の恋人を選ぶことに実によく似ています。人間というものは、唯一人の恋人の懐かしい特殊性あるいは事実性を通じてだけ、人類という普遍的なものへのふしぎな温か味を感じることができるところです。それに恋人を選ぶのに最もふさわしい季節は、青春です。ところで、問題は選ぶことで終わるわけではありません。結婚というものが、ゴールではなくて実はスタートであるように、自分の学問を選ぶことは出発するということに過ぎません。それに、選ぶということは、ある意味ではたやすいことです。一時的な情熱なり気まぐれによっても、選ぶということだけではできないからです。

真に困難なことは持続的な情熱をもつということではないでしょうか。比喩をさらにつづけるならば、ちょうど愛において、持続的な情熱だけがよい家庭をつくりだすよう

# 日和見への招待

西島 彰



ぼくが大学に入ったのは五年前の四月。東京の某有名予備校に進学した高校時代の友人に大学生になった「喜び」を自嘲的な文章に粧ってハガキを出した。受け取った彼の返事に曰く「感動した。但し内容にはなく差し出し人住所の地名の美しさに衝撃を受けたという。当時のぼくの住所「京都市北区紫野釈迦堂門前町〇番地」

「むらさきの」は東京の狭く美しい安アパートから想えばどのような美しい野原になるのだろう。とに角、「野守り」などはいず、某ストリップ劇場へ歩いて五分の極めて交通至便の市街地である。それでも屈折した性の欲望を、この世のものとも想われぬ美女の裸とメタフィジカルなリビドーの交感の後、冷たい夜風に吹かれるとそこは大徳寺である。暗い山門を見上げて自己嫌悪と下降志向の相克に意味の分らぬ涙を流すのである。

何度か下宿を変え京都市内を転々とした。詩仙堂を過ぎて東山の中腹まで登ると学生アパートがある。時計台や四条あたりの夜景を見下ろし乍らトリス徳用瓶を半ばまで飲んだとき身体の奥底からす

に、仕事なり研究なりにおいては、持続的な情熱だけがより高度な成果をもたらすように思われます。場合によっては、不遇や貧困や倦怠や、あるいは他のもろもろの誘惑とたたかひながら、そうした初心をつらぬくということは、実は大変むずかしいことでしょうが、むずかしいからこそやりがいがあるとも言えます。苦しみのうちかつそうした情熱の持続性こそ真に人間的であると呼べるのではないのでしょうか。

今ここにならずしも適切な例ではないかもしれませんが、萩原朔太郎の詩「桃李の道」をあげてみます。これは、中国の昔の哲学者老子へ寄せた幻想で、萩原朔太郎が彼自身のデカダンスの中においてさえ、いかに、真理への情熱を失なわなかったかを、生々しく伝えているものです。

聖人よ あなたの道を教へてくれ  
繁華な村落はまだ遠く  
鶏や犢の声さへも霞の中にきこえる。

聖人よ あなたの真理をきかせてくれ。  
杏の花のどんよりした季節のころに

ああ 私は家を出て なにの学問を学んできたか  
むなしく青春はうしなはれて

恋も 名譽も 空想も みんな楊柳のかきに涸れてしま  
った。

聖人よ

日は田舎の野路にまだ高く  
村の娘が唱ふ機歌の声も遠くきこえる。

聖人よ どうして道を語らないか  
あなたは黙し さうして桃李の咲いたる夢幻の郷で  
ことばの解き得ぬ認識の玄義を追ふが。

この道徳の人を知らない。  
昼頃になって村に行き

あなたは農家の庖厨（はうちゅう）に坐るでせう。

さびしい路上聖人よ  
わたしは別れ もはや遠くあなたの沓音を聴かないだろ  
う。

悲しみのしのびがたい時でさえも  
ああ師よ！ 私はまだ死なないでせう。

学問にも愛にも失敗したような状態において描かれてい  
るので、かえって持続的な情熱の底流が読むものの胸を打  
つようです。そして「悲しみのしのびがたい時」にさえも  
「死なないでしょう」という結びが、生への意志の軸とし  
ての持続的な情熱を印象させて見事だと思えます。

具体的な学生生活においては、このように情熱の現実が  
ドラマチックに分離することは先ずないでしょうが、こう  
した危機があってもそれに屈することなく、逞しく学びたい  
ものです。

べての臓物を吐き出したいような苦しみにおそれ一晩「死ぬか」と想いながら転げ回った。「こんな時ヨメハンがいたらなあ」と本気で考えて泣いたのも懐しい想い出。

平安神宮裏で二十メートルはある巨大な樹木が夏になると辺り一帯を涼しい樹陰で包んでくれた。まだ日の高い中から庭に縁台を持ち出してビールを飲んだ頃、ぼくはもう泣かなかった。

京福電鉄嵐山駅から歩いてわずか。竜安寺など嵯峨野諸社寺が不定型のぼくの怒りに増幅を与えてくれたあの下宿。哲学者の小径などと、昔、西田幾太郎がよく散策したという疎水ベリ道の道など学生をつけ上らせるタネがゴロゴロと転がっている銀閣寺附近にもしばらく住んだことがあった。学生さんに限り味噌汁サービスとか「学生以外お断わり」という看板をかけた食堂が今でも残っている。

ぼくが今まで住んだどの下宿の近くにも必ず有名なお寺か神社があった。抹茶と祝詞から無縁に京都市内で下宿を捜そうと思えば絶望的である。四条河原町の

いいアルバイトをしていたけれど美しいイタリア娘と親しくなり、官費でローマのデートを楽しんだとか。アメリカへ旅立ったM君は各国の留学生、観光客から名刺をもらってどうやら欧米諸国で、知人のいない国はないとか。あとは飛行機の中で即席会話をマスターすれば彼の旅も楽しくなりそうである。

京都人にとって見れば学生も観光客。学生証は四年間有効の周遊券。バスに乗り遅れては大変。でも、教室でのガイドの講義は紋切型に過ぎる。自由時間を利用して最大限、街に出よう。ヘルメット着用して隊伍なせば完全武装の警察官がガードマンよろしくピッタリ両脇に寄りそって円山公園なり東本願寺なり、目的地

交差点にプレハブでも立てて下宿をして見たまえ御旅所などという八坂神社の出張所がすぐ近く。堀川通、五条通と並ぶ五十米幹線道路の御池通河原町には革新市長の赤旗たなびく京都市役所に向かい合い本能寺会館なる鉄筋建築の修学旅行生用宿舎が聳えている。あそこなら信長も蘭丸を侍らせウオッカのオンザロックでもなめていけばバリケードの解除に手間取る光秀軍相手に三十五時間位抗戦できたかも知れない。

「暗い絵」を飾った下宿から「赤い月」を眺めて不条理を嘆ずる下宿は減り、キイのついたモダンな学生アパート。書棚にはペーパーバックス、壁にはピンナップヌード。「マル・エン全集」はいらないけれど、少年サンデー、マガジン、ガロのバックナンバーを蔵書にもつ友人宅は訪問客が多い。ゲバラや毛沢東もよく読まれているけれど……。

京都は古風で新しい。京舞いの井上八千代師の隣りに住み彼女を崇拜する八十に近い老人は毎朝、トレーニングの為青蓮院から將軍塚まで登る。学生を見つくと政治の話など、中々能弁。三派系の

まで親切に案内してくれるだろう。

旅先での恋は余り深入りせぬを旨とするべきである。舞妓はんならぬファッションモデルと恋に堕ちたK君、段々彼女のおながが膨らみ始め、生れたのが双生児の女の子。両手の赤ん坊にミルクを飲ませながら卒業試験の勉強という椿事に遭遇。国を出るとき一人旅、今じゃ流れの四人旅、などという妙な歌をうたいながらも結構楽しそうに笑っていた。

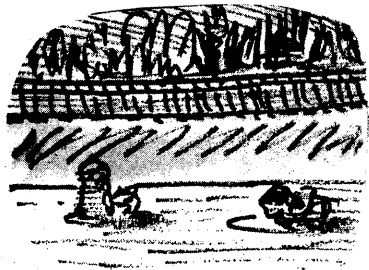
くれない崩ゆる丘の上  
夕月淡くかかるとき  
恋になく娘は只一人

吉田の山をさまよいぬ

を第一節とする歌はある乙女が京大経済学部で学生に恋をした悲恋の物語だとい

シンパらしい。池ノ坊学園で華道修業の為北海道からやって来たお嬢さんは岡崎道の洋酒喫茶で働いているが酔っぱらい学生を相手に前衛芸術についてディスカッション。

外国人の多いのも国際観光都市京都の特徴。旧三高のなごり追遥歌がいつも聞



えてくるような木造の吉田寮のすぐ近くに留学生の家なる税金で立てられたらしいマンションがあり夜毎ダンスミュージックが流れるとの話。

伊太利亜語専攻の大学院生N君は「トッポジョ」の脚本の翻訳などワリの

う。

松は翠りに砂白き  
雄松里の乙女子は  
赤い椿の森陰に

果敢ない恋になくとかや

これは京大とも同志社とも言われているらしいが京都の某大学のボート部で歌われ始めたという有名な琵琶湖周航歌。

今日は今津か  
長浜か

と琵琶湖を流浪するボート部学生とのほかない恋心を歌ったものだろう。

確かに学生はもてる存在である。「春秋に富む」若き学徒を誰がほうっておくものか。それなくしても、今や、月二万以上の仕送り、あるいはアルバイトで自活したとしても高卒で働いて一家を支えてくれと親が泣いて頼まない家庭の出身者は、何と穏やかな人格円満な、それだけでも若い女性が理想の男性像として認めてくれるような顔をしている。険しい顔をしている奴など、どこにいる。

ヘーゲル、デュルタイ、ベルグソン或いはオーベルマン、アドルフ、アポリネール。



自己運動し始めた名辞の交通整理に没頭してサンスクリットのマスターという苦行に自殺を考える哲学を体現したような顔の学生。

京都の女性にとってこれ程魅力的な学生はいないだろう。

民衆とのゲバルトの時には身内の血を押さえかねるといふ某君。山崎博昭が死んだとき突如として過激派になって機動隊との衝突のときには怨念の青白い火を燃やす某君。党の絶対性を信じて組織づくりと雑用の過労から倒れた某君。

みんな穏やかな顔はしていなかったけれど魅力あふれる学生であった。しかし彼らが学問の中で闘争の中でした恋は大旨実らなかつたようである。「失恋させられた」のである。「恋になく娘」や

「果敢ない恋に泣く」乙女は彼らに失恋し、ある女は高卒の彼らに使われるサラリーマンと平凡な結婚をし、ある女は東京に出て、出世した彼らが始めて社用族として訪ずれた銀座のバーで再会し彼らのエリート意識をくすぐりながら恋の恨みを晴らしているかも知れない。

余りにも想像力の豊かな彼らには恋は

ない。感受性を生殖器にのみ感ずる野蛮人を彼らは軽侮する。恋愛→結婚は生活の手段である。

ぼくは何度かの下宿換えの度に美しい女性にめぐり会った。京美人とはこの人かと想わせる「年上の女」。スピッツを連れて毎日決った時間に散歩する少女。話している時はいつも笑顔でぼくの心の隅々まで見透すような透んだ瞳の女。ぼくは彼女らに進んで「片想い」し一方でまったくぼく自身の感情を無視して恋をした。二つの「恋」を同時に進行させることよってアクロパティックな平衡感覚が保たれていた。

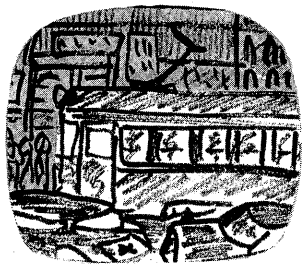
とても好きだというあんた

明日も来てねという私

かわすグラスのその酒は

嘘と涙のカクテルね

同志社、京大、立命大。学生が掃いて捨てるほどいる大学の側には必ず学生相手の本屋、喫茶店、麻雀屋それに一杯飲み屋の縄のれんか淡い間接照明で人がみな美男女に見えろパー、洋酒喫茶がある。そこではこの歌のような恋が数多く芽生える。ぼくが恋した「かをりちゃん」も



十八才のあどけない少女ではあったけれどそんな洋酒喫茶の一つで働いていた。毎夜その店で「恋をかたる」ためにぼくは仕送り、奨学資金とアルバイトの金をつぎ込んだ。二冊、三冊と持ち出した本を古本屋へ持って行くと一晩飲む金ぐらいは調達できる。そのうちツケで飲んで嫌な顔をされなくらいの常連になった。午前二時の閉店までねばったり、閉店間際に行って「寿司でも食いにいこう」と誘ったり、深夜のドライブもした。彼女が酔っぱらった客の運転していた車に同乗して安全地帯に激突して死んだとき、ぼくは又別の酒場の女の子に恋していた。

賭け事も又学生の得意な専攻科目である。

パチンコ、麻雀、競輪、競馬。すべてプロ級、それで学資を作っている学生が沢山いる。もともと学資といっても講義に出るわけでも、教科書を買うわけでもないから遊興費と言った方が正確。

「全極連」の学生である。烏丸今出川、出町、熊野神社、百万辺、銀閣寺道それに河原町通パチプロ族の稼ぎ場所は多い。指一本で四、五千円軽くはじき出すのだからまともなアルバイトをやる気がしなくなる。或る時悪い気を起したT君セメ

グイン持参で某パチンコ店へやって来た。開いたチューリップに接着剤つきの玉を放りこんだ。しかも接着剤のチューブを横において裕々と開きっぱなしのチューリップに玉を打ち込んでいた。労働の合理化をはかったのである。店の用心棒にどんな手ひどい目にあったか聞きももらしたけれど、数日後彼に会うと「パチンコはやめたよ。モーターボートレースにした。明日の琵琶湖はオモロイで」という何でやめたんや、と聞くと「パチンコでは一生食えへんからな。」という。モーターボートで一生食おうというつもりな

のである。麻雀の自称プロは多い。新入生相手に悪いインチキをやって時計、万年筆の類まで巻き上げる手合いがいる。

ぼくなどはもっぱらオトナから取るので罪は軽いはずだ。五条楽園とは旧赤線地帯で今でも一杯気嫌で近づけば

「チョット、オニイサン。アガッテイッテネ。イイコトシテアソビマシヨ」などとアチコチから声のかかるコワイ所である。五人程の女を置いて表向きは飲み屋で、すぐにレンアイの成立する店が多い。そんな一軒でいわば五人の女のヒモのような男とその仲間連で麻雀をしたとき、一週間程つづけてぼくが勝ち、

「長崎から入った新入りの女を世話する

から」と支払い条件を変更する申し入れがあった。

「勝負の世界はキビシイ」ぼくは一言つぶやいて、約束通り現金で頂いて来た。

もち論、賭け事などなくまじめなアルバイトもある。家庭教師、学習塾の講師。産業社会の拡大による中・高級技術労働者の需要増(豊かな社会)の余剰労働力の合理的な待機の場としての大学。大学の果す(社会的役割)が極めて具体的に上昇する中で学歴至上主義のママゴン達は亭主のコツカいの拡大を二六〇円で食いとめて、ぼくら学生に月謝を払ってくれる。入試が一つでも多くつぶれれば今年の月賦はレベルアップしたことだろう。

京都は映画の街であった。出町の賀茂川と高野川の分岐する賀茂川公園には草創期日活、時代劇の名優「目玉の松ッチャン」こと尾上松之助の像が比叡山や大文字山を見上げています。映画の衰退により太秦や下加茂の撮影所は或いは閉鎖され或いはテレビ映画の撮影所となっているけれどエキストラの需要はまだまだある。皮靴のままチョンマゲつけて刃をもって





走ったり、安田道代あたりがラブシーンしている下で死体を演じたりして結構カネになる。自分の映っている映画を見るのが恥ずかしいなどと真剣に悩んでいたH君、酒を飲んで土曜の夜の深夜興業のあの騒々しさにまぎれ込んで見たけれど、自分の映っている所がカットされていて「無性に腹が立った」と怒っていた。

語学に自信のある人は翻訳などというカッコイイアルバイトも出来る。木屋町あたりのバーでシェーカーを振っている学生も多い。最近では、大学問題を扱うテレビ番組や雑誌のインタビューに応じて謝礼を稼ぐアルバイトも登場したようである。

Arbeit——それは労働である。しかしアルバイトをすることは「労働者」になることはまったく異質である。それはぼく達のアルバイトが「学生」部厚生係や「学生」相談所で紹介されることを考えても明らかである。

もしアルバイトをすることに金銭以外の何物かを莫然と求めているなら——。「俺は親のスネをカジってるんじゃないネエんだ」とかさざまな位相で働く人々と

「連帯」できると考えるなら肉体労働をしてみること勧めよう。一泊百五十円也のカイコ棚式ドヤホテルに居を構え釜ヶ崎の住人になり、手配師に尻を叩かれトラックに乗って見たまえ。万博会場か奈良県の山奥の飯場へ連れていってくれる。怖がることはない。「アゴアシ付き」一日三千円の筈が飯場の宿泊費、洗濯代など天引されて多少失望する程度。高校時代にバトミントンか何かクラブ活動でもやっていた人なら二・三日、眠いのと手足の筋肉痛をガマンすれば結構つとまる。

「オニイさん学生さんか、インテリやなあ。」と肩を叩かれて「現場監督」にしてくれるかも知れない。

誤解してはいけない。君は夏休みの「実習」が終れば京都へ帰って来るのである。そして、北海道へでも行く旅費をポケットに早速ガイドブックを開くだろう。

「フスマ貼り研究会」などという実益本意のサークルがある。その他にも間接的にサークルで得た経験をアルバイトに生かすこともできる。哲学研究会とか禁酒

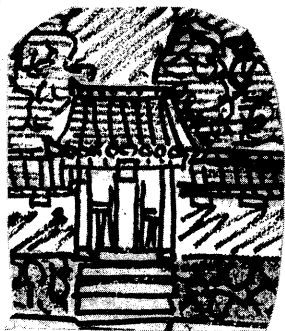
同好会とかいうストイックな人の集まりもあるらしい。学生はサークルで「無駄なことや悪いことばかり覚える」のである。文部省・大学はことある毎に専門課程の教養部への侵略をネラッている。新制大学の理念を空洞化させた張本人共が「魅力のない一般教養科目の講義」に対する不満につけてこんで学部・学科別縦割りシステムによって一・二年生の時から専門科目を履修させ「使いものになる」技術労働者に仕立て上げようとする。さらに学問内容の細分化によって「専門白痴」と呼ばれる肩書きをブラさげた有能なイエスマンへの道をぼくらは歩いて行く。一方では奨励されている筈のサークル活動や「自治」活動は目に見えない力で、弾圧せられ異端視される。ぼくらは人間性を主張し「無駄なこと、悪いこと」を覚えよう。ぼくらを支配している者に対しぼくらの牙をむき、ぼくらをつないでいる鎖を断ち切るためには権力者が決して認めることの出来ないサークルに入ろう。闘う全共斗機関紙STRUGGLE編集部・もいいだろし・解放放送局のアナウンサー、或いはバリケード内食

堂ト口亭のcockになるのもいいだろし。

京都の冬はいつも粉雪がチラチラと舞い、比叡嵐しが吹きすさぶ。夜、下宿で本を読んでいると建てつけの悪い京都の家はすきま風と、底冷えに包まれる。持っている限りの衣服を着込んで毛布までかぶらぬと歯の根が合わない。古い電気配線のため暖房器具が使えないのである。夏の暑さも又ひどい盆地の中は蒸し風呂である。八瀬・大原あたりに不便をガマンして引越そうかと思う。夏休みは信州の山か敦賀湾あたりへ山小屋番や海水浴場のアルバイトに逃避するがいい。

時は春。嵯峨野、保津峡の秋も美しいが、春は京都全体が浮かれている。円山公園のしだれ桜が植物園や岡崎公園の桜に次いで花開く時、新入生と観光客の入浴に京都の商人の顔もほころぶ。南禅寺のインクラインあたりや京都御所はアベックの花盛り。デート相手のいない男子学生も女子大との合同ハイキングの計画の話に花咲く。

陽の落ちた西山から夜が忍びより東山の峰々の最後の夕映えが消えると三条から四条あたりに赤い灯青い灯ネオンの花



咲き、高瀬川に極彩色の花びらが流れる。東京や大阪の繁華街に親しんだ都会派は知らず、山奥の村から秀才万才の声に送られ来たマジメ派U君も新入生歓迎コンパなどに誘われてシブシブ街に顔出した。「オッ、イイノミッブリダ。キミソオト一ツヨイヨ。」

などとオダテられれば、村の父さん、母さんのこと忘れてイッパシの即席無頼派の誕生。

クニの彼女は村役場の書記の嫁になったとか便りは途絶えたけれど女なんて星の数程いる。惚れて、惚れられ、アルバ

明るく楽しい！

麻雀クラブ

藤

北白川電停東(文字通り)  
TEL(78110675)

イトも色々した。サークルでも部長の重責。勉強もしたし、成績もマアマア。就職も決った。後は卒業証書をもらうだけ。全共斗の言う「自己否定」↓反大学は分らないけれど民青の言う「大学民主化」は分る。とに角、東大のように卒業不能になつては困る。

U君はそう言つてこの三月卒業して行つた。

木枯らしの寒い日であつたらうか、黄色の絵具を固めたような紡鐘形の爆弾の冷たさを熱い頬にあてた梶井基次郎は二条から河原町通りを下り、丸善の美術書の上にその丸善の爆弾を置いた。今、その同じ道を府立医大から帰つて来たらしい戦車のような放水車がゆっくりと進み、ミニスカート・ブーツのお嬢さんとフーテンスタイルの学生が肩を並べて歩く。学生とは何か。学問とは何か。

若き二十才の頃なれや  
三年ばかりは学びしが  
酒・歌・煙草又女  
ほかに学びしこともなし

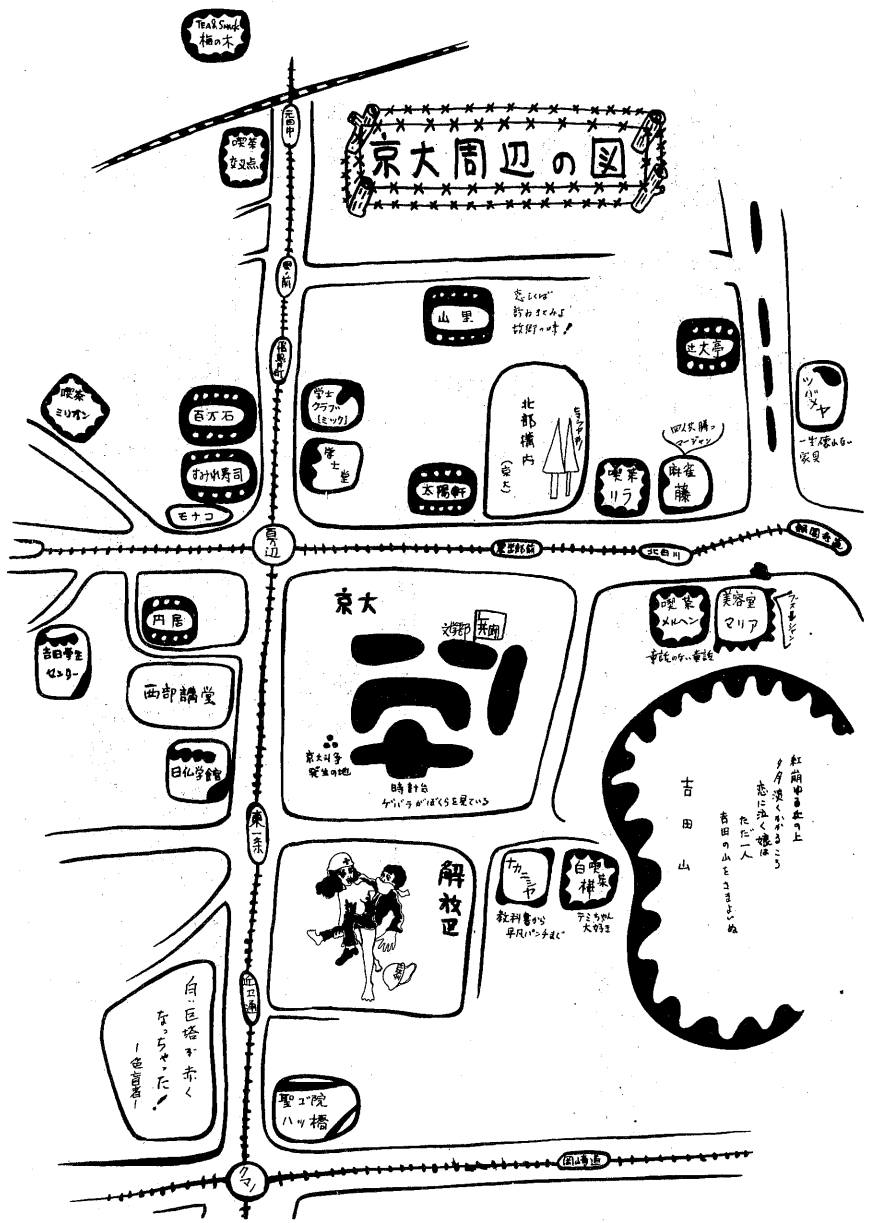
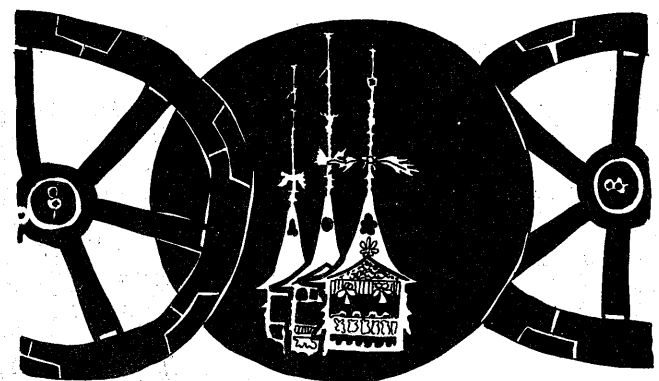
(佐藤春夫)

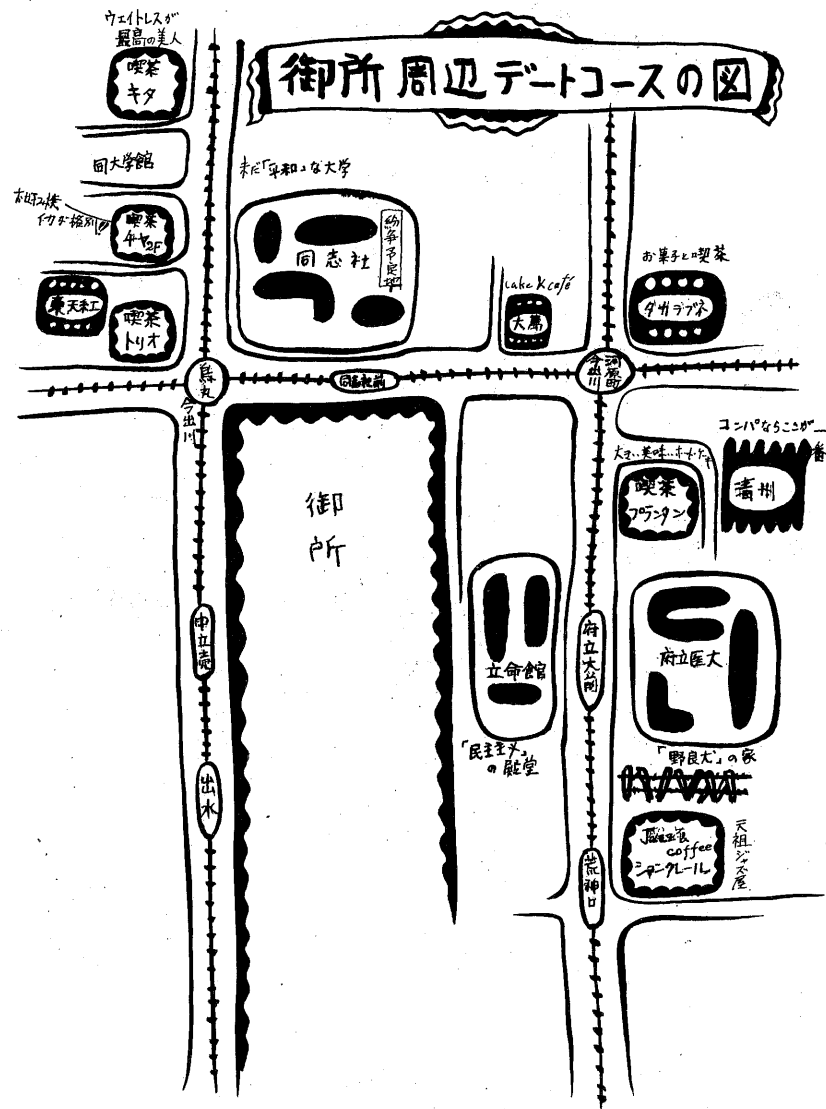
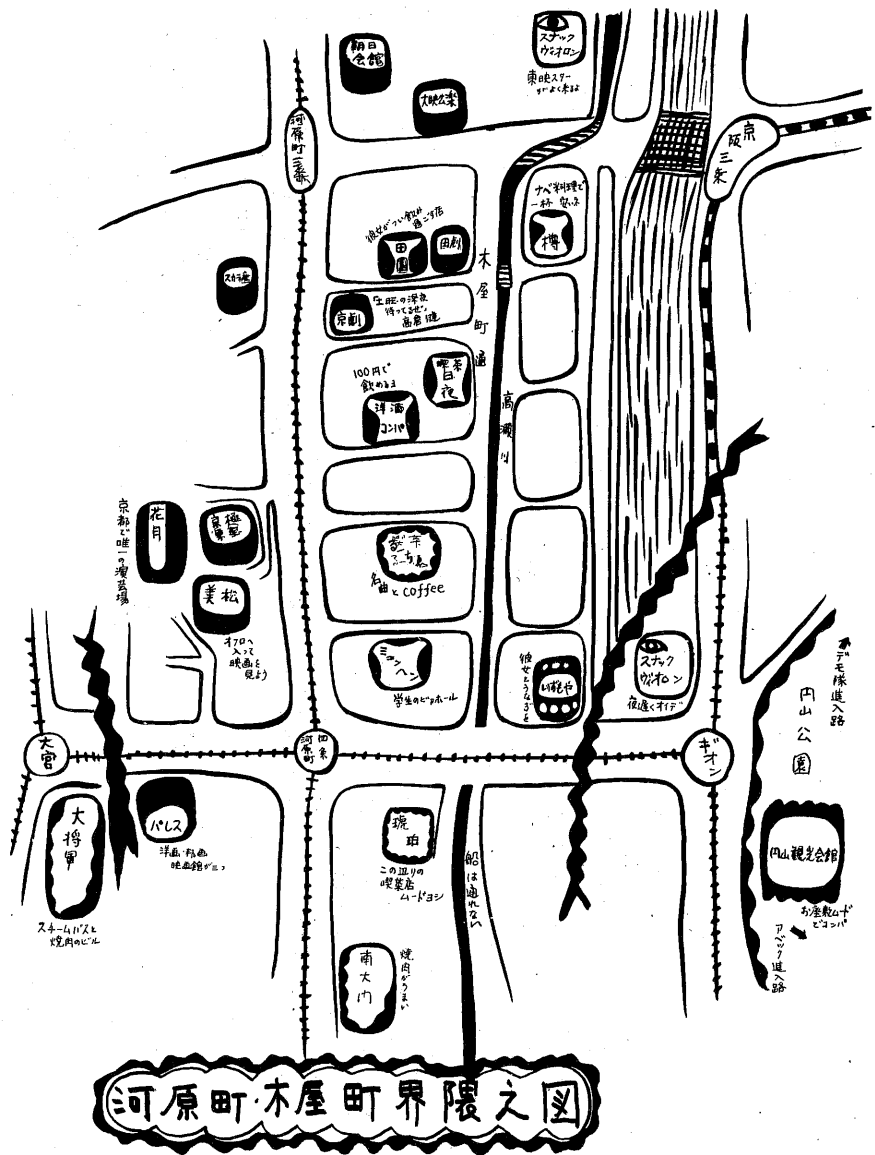
猶余の四年間を熱病と狂気に過ごすこと

も、エリートへの道にいそむことも、すべてが許容されているのである。酒、歌、煙草がパチンコ・麻雀に或いは教科書とスポーツに或いはゲバ棒とヘルメットに代つた所で、学生時代という想い出に何程の感慨の変化があろう。学生を越境し、学生であることに反逆することによって始めて、学生時代という不連続な時代を懐顧と悔悟の対象から解放することが出来るのである。受験勉強を必要悪として自からに課して来た人達は、学生時代という未来をもまた予定調和的に懐かしもうとしている。

《特権意識》に覚醒した《学生》は決して甘い未来を夢見ることが出来ない。羞恥に赤らめた顔を公衆の面前に突き出せ。恥知らずのぼく達は徹底的に恥をかくことに専念しよう。知識人予備軍として学生の使命を説く人があれば、ガク然として彼の顔を見つめよう。ぼく自身の登場しない物語には、たとえそれが悲恋の物語でも革命の神話でも、ぼくは信じる訳にはいかない。

学生を流浪し、学生を克服し、自からに叛逆しよう。







<p>中国料理の 喫茶・クラス会 <b>東天紅</b> TEL 431-4836 京・烏丸今出川同志社西門前西入</p> <p>喫茶・れすとらん <b>トリオ</b> TEL 441-6943</p>	<p>喫茶 ビリヤード 若者の社交場</p> <p><b>キタ</b></p> <p>京・同志社大学学生会館北側 TEL (451)6461・5642</p>
<p>お好み焼・焼そば</p> <p>家庭料理の店 <b>ちや</b></p> <p>烏丸今出川上ル一筋目西入</p>	<p>スナック&amp;喫茶 当店自慢のコーヒーをぜひ一度!</p> <p><b>Printemps</b></p> <p>駐車を御利用下さい!! 河原町今出川下ル TEL 231-1833</p>
<p>モダンジャズギャラリー…2F</p> <p><b>しあんこれーろ</b></p> <p>クラシックとコーヒー…1F</p> <p>京・河原町荒神口電停前 TEL 241-0323・231-4624</p>	<p>Coffee and Cake</p> <p><b>ダイヤモンド</b></p> <p>上京区河原町今出川東入ル TEL 231-3066</p>

**名曲コンサート**  
毎日午後3時・7時の2回開催致します

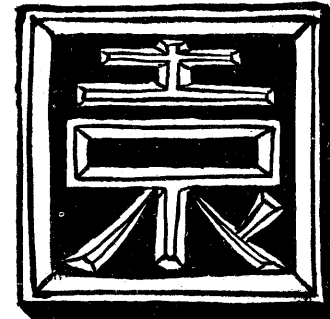
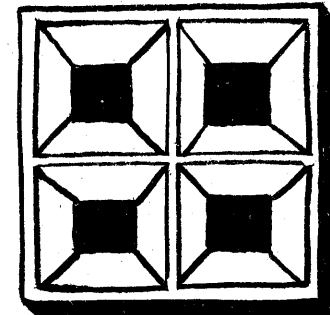
名曲  
珈琲 **百一古亭**  
河原町蛸薬師(丸善南側東入) TEL 221-5765



# 100円で乾杯OK

〈関西随一〉

## 洋酒天国



気軽に楽しくそして安く  
グループ予約も承ります

笑い洋酒を知らない人は哀れである洋酒天国田園には笑い洋酒があるさあ行こう!

田園へ

京・河原町三条下ル TEL (241)2793 (221)0716

洋酒  
天国 田園

軽食・喫茶 学生憩いの場

LILAS

り ら

左・北白川電停前  
TEL 781-6227

SNACK

白 樺

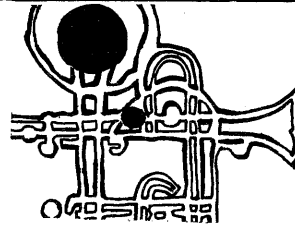
吉田山中腹  
771-9922

ビール¥ 200 焼めし¥ 120

COFFEE

三リオン

左・百万辺西入  
TEL (781) 8910



JAZZ & COFFEE  
KITASIRAKAWA\*\*\*DENTEIMAE  
MÄRCHEN

大陸料理 百万石

ご入学におめでとうございます

ぎょうざ・焼肉・スタミナ料理の百科店

百万辺店・市電百万辺交差点西北角・791-1985・7007  
三条店・市電河原町三条上ル・231- 9507  
四条店・市電四条大宮上ル・821- 1569  
北大路店・市電洛北高校前・791- 1976

COFFEE SHOP

階上

交叉点

京・叡電交叉角 (781) 5649番

百万辺

すみれ寿司

TEL 781-3486・781-4707

中華ランチ・カツカレー

太陽軒

京・百万辺東半丁  
TEL (075) 781-6456

## YOUR REFRESHER COURSE, NEW DAISHOGUN

—ピリヤード—

ロジ

■ローテーション11台・四ツ玉1台  
【営業時間 P:M2:00~A:M2:00】

ピリヤードを始めてみませんか? ニュー大將軍のロンは初心者からベテランの方まで、どなたにでも親しまれているプレイサロンです。

—焼肉・中華料理—

大將軍

■3階御座敷・2階テーブル席  
【営業時間 A:M11:00~A:M2:00】

大將軍の焼肉・中華料理—— ジュウジュウ焼肉と 山海の珍味を集めた中華料理が落ついた雰囲気の小座敷で又テーブル席で気軽に味わっていただけます。

—グランド純喫茶—

シヤト

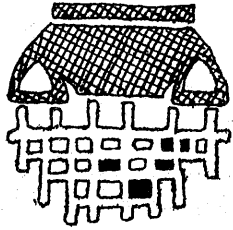
■格調のある雰囲気  
【営業時間 A:M11:00~P:M11:00】

香りたかいコーヒーと優雅でチャレタ感じの雰囲気自慢。音楽が流れるムーディーな店内は憩いのひと時にふさわしい若い恋人たちの話の場として好評



スチームバスからレストランまで—  
ニュー大將軍

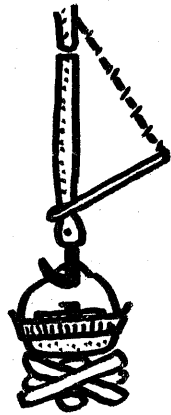
本社・京都市下京区四条大宮 ☎(801)1521【600】



# 京菓子 西陣織

## タマネ

本社 京都市伏見区淀木津町254  
電話 京都(075)631-3105(代表)



# 大亭

白川通り別当町西側  
TEL 701-5881

(喫茶併設)

熊野店 市電熊野停留所東北角  
⑤五二五二④二二四  
①〇二二二代

本店 聖護院御殿前  
聖護院ハツ橋總本店



創業元祿二年

学生さん向の  
和洋食堂  
ランチルーム

## 梅ノ木

市電高野東へ300米梅ノ木町バス停前  
TEL 791-1168

## 樽 (木屋町店)

宴会ハ二階ノ小座敷ヲ御利用下サイ  
営業時間PM4時-AM3時

木屋町三条下ル一筋目東入ル  
TEL 221-1461

奥茶 電話 京都(075)31-1156(代)  
洋酒喫茶 河原町通 蛸薬師上地下



《木屋町店》三条上ル東入大久ビル3階  
TEL 241-1839

すき焼の



京・寺町四条上ル  
TEL 221-0506 231-0002

飲んで歌おう学生のビヤホール !

音楽会やショーのお帰りにぜひどうぞ

- ビールパーティなら 御一人様 300円より
- クラブ・サークル・会合の御申込みは TEL (221) 3917

学生のビヤホール  
名物 成吉思汗鍋



本店・河原町四条 TEL (221) 3505 先斗町店・三条大橋下ル先斗町角 TEL (231) 1591

2F **ナポレオンCORNER** napoleon

●フランス王朝風のシャレたムードのナポレオンコーナーはニューコンパ2Fです●

洋酒天国  
ニ ユ ー

河原町六角下ル東入ル (221) 5236



学習家具の  
コンサルタント

銀閣寺電停北  
TEL 代 (781) 5450

# ツバサ家具

躍進するビッグストア

## スーパーサカエ

京都 寺町六角角

音と電化製品のデパート

# アサヒムセン

1F...家庭電化製品 2F...オーディオ  
パーツ 3F...アトラクションコーナー

中・河原町三条上ル一筋目東入ル

TEL 231-4475

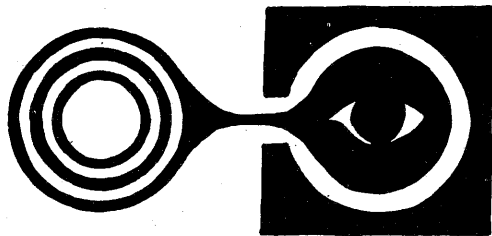
京都市上京区下立売通七茶松東入  
但下立売通千本西二丁  
電話(81)501500番



京都大学協同組合指定  
永田時計めがね舗

### あなたの寝具革命は？

新しい人生への出発点  
向学心に燃え、真理の探求の  
為、日夜いそしむ貴方の睡眠  
の条件は如何？ 短かい睡眠  
時間の昨今、フトンの時代で  
はありません。  
人間工学に基づいた理想のベ  
ッド  
初回金式千円ですぐ貴方の寝  
具革命は実現します。  
さわやかな睡眠でサア明日か  
らまた青春時代を頑張ろう!!



京都市中京区四條河原町通東北角  
フランスベッド  
京都シヨールーム  
TEL (211) 7604・5

食事と喫茶と音楽を

## 円(まどい)居

近衛電停東入 (771)0484  
京大テニスコート横西入 (771)7736

出張宴会料理承ります。 (761)5690

COFFEE & WINE

# HAKUSEN



## 白扇

京・北白川別当町下ル TEL (701)6323

新入生歓迎コンパ、合宿に  
御相談承ります

旅館 加茂川の畔

## 清州

河原町今出川電停前  
TEL (231)7564・8776

すき焼、会席

## 円山観光会館

京・円山公園藤ノ棚前  
TEL 561-0025・26



7FLOORS+MEAT DISH 22 RESTAURANT  
**NANDAIMON**  
KAWARAMACHI SHUO SAGARU KYOTO TEL 361-8441-351-0351

京・河原町四條下ル 肉ビル南大門

### コンパには好条件と定評の当館へ!

お一人 500円で次のおすきなお料理を.....

◎和定食 ◎肉すき焼 ◎バイキング洋食

各階お座敷宴会場あり

予約歓迎

四條大橋西畔 **いづもや** TEL (211)2501-4

チェ・ゲバラ

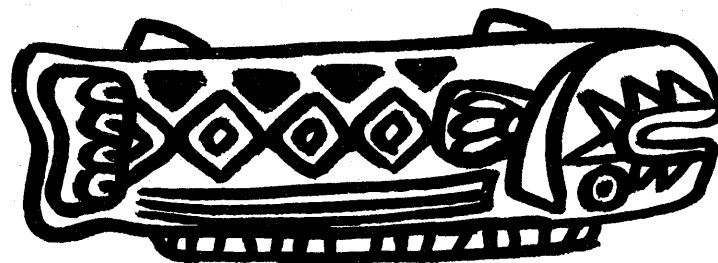
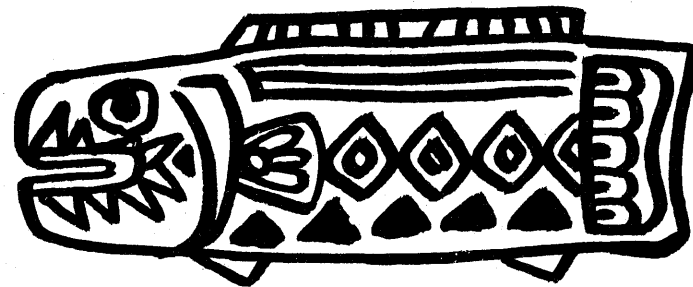
未公開写真集



民芸れすとらん

# 山 里

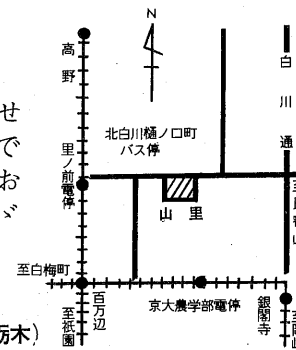
やまざと



## 郷土料理のごあんない

郷土料理は日本各地の風土と習慣を反映させた伝統の味覚で、一度は味わいたいお料理です。山里は北海道から九州までお国自慢のお料理を、いながらにして味わえる関西でたゞ一つのお店です。

- 三平定食 (北海道)
- きりたんぼ (秋田)
- わっぱめし (新潟)
- 忠七めし (埼玉)
- 飛鳥鍋 (奈良)
- 石狩鍋 (北海道)
- のっぺい汁 (山形)
- コンニャクのすっぽん煮 (栃木)
- ぼたん鍋 (兵庫)
- めのはめし (島根)



北白川樋ノ口町バス停前  
TEL 781-0818

●営業時間 平日 午後4時～深夜2時 日曜・祭日 正午～深夜2時 ●定休日 毎月第1・第3水曜日





# 闘いの中の私

高橋和己

(京大文学部助教)

昔、中国の哲学者楊朱は岐路にさしかかり、南にゆくこともでき北にゆくこともできると言って號泣したという。

岐路こそまさに愛すべし、というのが私の基本的な立場の一つだが、それは私たちが追究すべき〈自由〉なる概念は本来そういう性質をもつものだからだ。

一月の半ばかり京都大学においても顕在化した大学闘争の推進主体である全共闘の運動と論理に、従来の学生運動には乏しかった、一つの豊かな問題性があるとすれば、激しく厳しい平等の追究にらんで、つねにこの自由の概念が、くりかえし、問われていることにある、と私は考えている。

政治的平等は、擬制的な民主主義の幻を超えてなお追究されねばならない。そしてその政治的平等が経済的平等に

基礎をおくことは、もはや論をまたない。ところでしかし、社会的、政治的運動に参与する各個人の、一回限りの生における充実、つまりは各人の自発的意志と運動のかかわりはどうあるべきなのか。

従来の通念でいえば、それは一言でいえば正義への自己犠牲ということだった。未来のための現在の犠牲、全体への個人の没却、極限的情勢醗酵のための日常性の棄絶など、さまざまな変容形態をとりながらも、要するに外在的に指定された目標や理想にむけて、自己を奉仕させるというのが、その基本形態だったのである。むろんそこにも自己否定はあり、劇的な感動をうむ局面もあったのだが、〈自由〉は括弧づけられたまま柵あげにされ、一応の理想実現の次の課題と意識されがちだった。

しかし、それはやはりおかしい。

歴史は永遠の過程であつて、王朝交替や労働者評議会権力の樹立などが、時代区分として用いられるのは、社会の動きを靜態的に把える従来の歴史学の便誼上の措置にすぎない。個人における成人式や結婚式が、その生の持続の結節点として記念されるべきものでありながらも、しかしその時点で個人の資質や理想が急変するわけではないのにあい等しい。

帝国主義大学の解体が国家解体にまで到達しえたとき、後世の歴史はそこに一つのエポックをおくだろう。それはそれでいい。しかし、いま大学の中で、内なる帝大意識を滅ぼし、学問の中にも投影している現体制への屈従と忠誠を揚袂し、あるいは社会のピラミッド構成をなんらの反省なく学校制度にもち込んでいる試験制度に疑問を投げかける〈主体〉の決断や行為は、後世に副されるだろうそのエポックからの、論功考賞の視点によつてしか意義付けられないか。そんな馬鹿なことはない。

政治はその本質において結果論の世界ではあるが、たとえ直接に実効をもたらすをえなかつた運動や、挫折した意図にも、それに参与したものは相互に確認しうる意味はある。いや、この成功失敗の判断や予想よりも先に、なにごとかを為し遂げようと決断した人間に、かならず照りかえしてくる具体的反応との抗争を通じての、意味というも

のがある。

自己が自由な存在であるという自覚は、猶予状態においてよりも、一つの行為を具体的に成した時の、必然的に降りかかってくる反動の固さによつて確認される。そしてしかも一つの岐路を越えた次は、一本道なのではなくて、また岐路なのである。

主体の内部で、そのように絶えざる意志発動によつて確認される自由が、社会的にひらかれるためには、自己の自由の必要条件は他者の自由であるという認識——いや単なる認識ではなく、具体的人間関係としてそれがそこに存在せねばならない。だが残念ながら、そうした関係は、支配被支配の網の目になんじがらめにしばられている現在には存在しない。平等への希求と、自由の発動がこれまで結びつかず、最も厳しく平等を望む人々が、しばしばその運動過程において、自己の自由を犠牲にせざるをえなかつたのもそのためである。

しかし、従来、多く革命的な党派の構成員が、上意下達の鉄の規律の下に自己喪失していったからといって、運動形態それ自体のなかに、自由の相互確認の契機をまったくふくませないわけではない。方法はあるのであり、そして、現にその萌芽形態は、大学闘争のうちに存在している。各セクトとノンセクトとの連合体である全共闘のじくじくの歩みは、そのじくじく自己によって、平等追究と自

由希求が内部において、結合ないしは共存していることをしめしている。

それはまだ萌芽にすぎない。またはいま大学で行われつつある意識の変革が、卒業生たちの、深くひそかに潜行する長い苦渋のすえに、どういふ社会変革をもたらすか、さらにその社会変革が一切の中央集権的権力を棄絶し、権力そのものを宙に浮かせることに成功するか否か、はいま予想はできない。

しかし、たとえ萌芽にもせよ、自由と平等との、運動形態それ自体の中の握手は、私の長年の夢であり、私が文学部の一助教授でありながら、私の精神が教授会には向いておらず、職業上は自分も論難される一員でありながら学生・院生の共闘組織の方にむいているのはそのためである。

この一文は新入生の諸君の歓迎の挨拶として依頼された。それにしては、常套を逸脱しすぎていることを自覚はするが、しかし、大学が大学のあり方を根本的に問う激動期に入學する諸君への、慶賀の意は伝えているつもりではある。なぜなら、幸運にも、あなたたちは、自己にとつて自由とは何か、思想とは何かという貴重な問を、その精神のもつとも柔軟な時期に否応なしに問いかけられてゐるのだから。その決断と選択のいかんによつて、区切りなき人間の歴史の、それゆえに区切りなき革命の歴史に、主体的に参与することもできるのである。なにも七〇年における国家相

互の条約改訂期がどうのというわけではない。自分が一步を踏みだすことが改変なのである。

ある作家の小説の表題に、「終りなき道の標に」というのがあった。かつて青春の初期に一読し、いまはその内容をほとんど忘れ去ってしまったが、最近、私はしばしばその表題に自分勝手な意味をこめて脳裡に浮べる。

過去にエデンの園もなく、未来に最後の審判も千年王国もありようもなく、人間の時間は続くのだろうか、ともあれ一日限りの生をいま重大な岐路に直面させうる新入生諸君の幸運に較べて、青白きインテリたることに絶えず自己を方向づけてきた私にとつて、いまひとたびの自己否定は、あまりにも苦渋にみちる。華々しき夢想は、弧立の高揚と憂鬱のうちにはほとんど浮ばず、いま自分に出来ることは、いわば一つの墓標のみずからの手による建立がいにはないのではないかと気がすらすらする。

諸君に期待するものとは、少しく意味の違った、終りなき道の標である。

もつとも、死の自覚が、存在者を実在者に揚棄し、未来への投金をうながすように、墓標のイメージが、昭和元祿なるこの現代の空しき虚偽と不義を、鮮明に逆照することはありませんかもしれないけれども。



# 主観主義的 大学案内

池田浩士  
(京大教養部教官)

脳波のうちのアルファ波をいろいろな動物について測定してみると、おもしろい事実が明らかになる。この波は、すべての動物の脳から放射されていて、その瞬間のつぎつぎとうつろいゆく外界の模様を反射する機能をはたしているのだが、人間とそれ以外の動物とでは、放射のパターンに奇妙なちがいが見られるのだ。

人間以外の動物のばあい、アルファ波はたえず放射されていて止まることがない。危険がおそってきた場合でも、なにか獲物にとびかかつていくときでも、外界を反射しそれに反応するためのアルファ波は、一瞬たりともとまることなく放射されつづける。ところが、これにたいして人間の脳は、決断を要する重要な転回点に立たされたとき、アルファ波の放射を停止する。脳髄は外界の模様を手さぐりすることをやめ、自分自身のなかにひきこもってしまうのである。動物の行動は、外界が与えた条件にたいするたえざる反射であり、種々の可能性のまえに立つてみずから選択する余地を残さぬたんなる反応でしかない。しかし、人

間の行為には、もうひとつのモメントが加わる。アルファ波が停止したとき、人間は、外界にたいする直接的な反応をやめ、自己の内部から命令を発して行為をおこなわなければならぬのだ。主体的な決断、あらゆる可能性のまえに立つての二者択一は、生物学的な基礎にもとづく人間の特性なのである。

外界と自己の内面との緊張関係は、したがって、人間と他の動物とでは本質的に異なる。ある転回点で右へ行くか左へ行くかということは、動物のばあい、習性と本能にのみかわる問題であり、それゆえにこそまた、ちよくせつ生死にかかわる問題でもある。だが人間のばあいには、過去と現在の制約がたんなる絶対的な必然性としてのみ作用することをやめるがゆえに、つまり直接的な反応の素材を提供するアルファ波が機能を停止するがゆえに、その時点での行動は習性や本能のわくにのみしぼられるものではなくなり、過去や現在からこえてた未来を主体的に構成していく作業となることができ。未来を先取りし、その先取

りされた未来によってさらに現在の行為が規定されてくるということこそは、他の動物から人間を区別する類的な特殊性なのである。だがしかし、本能をこえたところで転回点に対処できるということは、また一方、そのさいにおこなう決断が、かならずしも動物のようにすぐそのまま生死にかかわる問題とはならない、ということをも意味する。人間にのみ与えられた主体的な決断の可能性は、また、不決断の可能性としても機能しうるものなのだ。

すべての支配体制はこの可能性をもつとも有効に操作することによって成りたつてきた。人間の決断そのものを否定してしまふような支配方式は、支配者と被支配者の力関係が圧倒的に支配者に有利なときでなければ不可能である。なんらかの危機におびやかされている、あるいはおびやかされたくないと思つて体制は、被支配者に決断の可能性を与えないわけにはいかない。が、全体的な真の決断を、真に主体的な決断をゆるすわけにもいかない。二者択一のための素材をできるだけ制限し、不都合な素材を協力かくし去つたうえで、決断をゆるし、それを制度化する。すなわち、支配機構のなかで合法化された決断は、つねに部分的な決断である。それは主体的な決断ではなく、与えられた決断、強いられた決断である。人間の類的な特性は、ここでは歪められ、制限され、矮小化される。決断の素材を制限し全体的な関連をおおいかくすことによって、目前の

事実だけが判断の材料とされ、外界の個々の刺激にのみ応しつづける動物の行動様式ときわめて近い形態が、人為的につくりだされるからである。部分的にゆるされた決断は、こうして本質的には決断となんらかわりはない。だが、この不決断によって、人間はただちにその場で自己の生命を賭すことにはならない。これが、他の動物とのちがいである。同時に、人間だけにしかけられたワナである。なぜなら、むしろ人間は、支配者によって与えられた素材以外に目をむけ、全体的な決断を、主体的な二者択一をおこなおうと試みるとき、みずから危険にさらさざるをえなくなるのかもしれないからだ。かれのその試みは、非合法な試みとして、犯罪として、暴力として、容赦なく断罪されるのだ。

○  
大学もまた、このディレンマのまえに立たされている。  
〈真理〉とか〈探究〉とかいう言葉に実質的な意味づけをあたえねばならないということを前提とするなら、大学が〈真理探究〉の場である、ないしはあらねばならぬ、という月次な定義は、依然として有効性を失つてはいない。ただし、それはつねに二面性をともなつた有効性であり、われわれはたえず、この定義に具体的な意味づけを与えることによってその有効性をわれわれの側に奪回する作業をつづける必要がある。「個々の事実は、まだ、なんら現実で

はない」とはヘーゲルの言葉だが、ましてや、事実の追求がそのまま〈真理の探究〉ではないことは、いうまでもないだろう。事実とは、目前におかれたもの、あるいは過去に存在したものであって、これから存在するだろうものは、事実ではない。事実とは、言いかえれば、脳髓の発するアルファ線によってキャッチされる対象でしかない。大学が、このような個別的な事実を探究する場であるかぎり、けつして大学は、〈真理探究〉の場とはならない。

個々の事実の集積ではない現実、あるいは真理とは、現在この場や過去の亡霊を固定させたものとは無縁である。それは、外界をその全体性においてとらえ、主体的に決断し、その決断によって未来の次元をきりひらいていく作業と切りはなせない。与えられた素材のなかからだけ選ぶことによつてますますそれらの素材を強固に固定させていくのとは逆に、全体性の把握は、外界をも自己自身をもひとつの過渡的な存在としてとらえ、いまの状況をvariするもの、変えうる対象としてとらえることを可能にする。だがこれは、現在の体制を維持しようと望むものにとつては危険である。大学で探究されるべき〈真理〉とは、個別的な事実でなければならぬ。それらの事実のあいだの関連は、本質的な点では断ちきられていなければならない。探究者もまた、相互に連絡をとりにくくなっていなければならない。

個々の研究成果をそっくり体制の側に汲みあげるためのものであり、研究相互の関連を不明にさせておくことによつて研究者そのものを片輪にしていく努力なのだ、といえるかもしれない。

教養課程の手をおし、すなわちあるときは教養大学と専門ないしは研究大学（大学院大学）の分離といわれ、またあるときは教養課程と専門課程の分離をなくしてタテ割り制度にするというかたちで出されてくる〈改革案〉は、いづれも、いわゆる専門科目を優先する考えかたにもとづいている。大学院大学制が〈専門バカ〉を支配者の思うままに総動員しようとする意図をもっていることは多数の人間が指摘しているが、いわゆるタテ割り制が問題の解決にならないことは、タテ割り色を現在でもある程度おびている学部にかぎって、教養課程のカリキュラムのなかに〈基礎科目〉という名の専門科目が詰めこまれて学生の自由な選択の範囲をせばめているのを見てもわかる。問題は、〈専門科目〉と〈教養科目〉をどう配置するかという方向ではなく、いかにして大学を全体的な認識作業の場として形成していくか、という方向で立てられなければならない。こうした問題設定は、支配階級からのきわめて精緻な大学近代化・合理化案と、正面から対決することをわれわれに余儀なくさせるだろう。だが、この対決をさけて、不決断を合理化する場に大学をしてしまつてはならない。〈真理探

全体性喪失の装置としての大学が、こうして生みだされる。〈総合大学〉とは、そろそろいよいよ個別化され細分化された反射機能のたんなる集積である。どこに何という名前の研究室があつてそこに何という名前の教授と助教と講師と助手と副手（ばあいによつては「教務職員」）が存在しているかということは、しかるべきところへ行けば、あるいはしかるべき文書をみれば、ほぼ完全に知ることができる。ところが、A研究室のA教授の研究とB研究室のB助手の研究がどういふ関連をもっているのかは、当のA教授やB教授もほとんど存知ないばあいが多く、A研究室が理科系でB研究室が人文系だというようならば、いかに、そもそも関連ウナムンなどと問うほうの精神状態が怪しまれかねない。ひたすら自分の〈研究分野〉にいそしむ〈専門バカ〉が、この大学という装置のなかで増殖しつづける。専門バカは、つぎつぎと投げかけられる新しい事実に必死になつて反応し、それで新しい世界をとらえたと思ひこんでいる。だが、じつは、またひとつ、古い世界の解体に歯どめを与えただけなのだ。

もちろん、大学は、真に未来とかわるような研究や創造の場としての可能性を、すべて失つてしまつたわけではない。だからこそ支配階級は、いつまでも、大学を自家薬籠中のものにしておこうと、巨大な努力をほらいつづける。より厳密にいえば、大学の内部構造の細分化そのものが、

究〉の場とは、与えられた制度ではなく、対決の場である。研究対象と研究主体の対決ばかりではなく、研究者相互間の真摯な対決の場が、ここには存在していなければならない。

○ きわめてあたりまえのこの前提が、じつはきわめてあたりまえでなくなつていのが現在の大学である。一方では、前近代的な研究制度がこれをはばんでいることも事実だろう。しかし、それはたんに古いものの残滓というところからだけではかたづけられないモメントをもふくんでいる。

被支配者たちを分割し、それぞれ孤立させ、たがいに行きあわせて統治する、というやりかたは、支配の古典的な形態である。士・農・工・商・非人という身分制度は、教授・助教・講師・助手・副手というかたちで、大学に温存されている。しかし、この差別は、ある時点がくればかえつて体制そのものを爆破してしまう危険性をおびてくるようになる。そのとき、支配者は〈団結〉を説教するのである。いわく「アジアの一員としての日本」、いわく「沖縄の同胞が」云々、いわく「祖国をまもる気概」、いわく「全京大人」、いわく「全教職員」、等々。冷静に考えてみれば、こうしてひとつの名称で表現されたものが、じつはたがいに差別された種々の層から成りたつていふ集合体であることは、誰にでもわかるにちがいない。ところが、これ

がなんらかの危機感をおもるキャンペーンと並行してばらまかれると、あたかも均質的な集団であるかのように現象し、自分もその一員でなければならぬかのような倫理的圧迫感を各人にあたえるようになる。歴史にのこる「京大方式」が成功したのは、こうした形式的一体化がまんまと成功したからであり、そうした一体化にまんまと乗せられるような〈真理の探究〉を「全京大人」が平素たゆみなくつづけてきたからだだった。支配の高度な形態としてのこのような同族意識のデッチ上げは、〈事実〉と称せられるもの)にたいする直接的・動物的な反射に依拠してのみ成立する。人間の類の本質である決断は、外界への本能的な反応と自己防衛の習性によって、そもそもはじめから排除されてしまったのである。

「全京大人」あるいは「研究の場をまもれ」、「職場をまもれ」という合言葉は、京大の構成員がどのような階層分化のもとにおかれているかを不問に付し、研究とはなにか、職場の実情はなにか、というラジカルな問いを圧殺する役割をはたす。安直な〈連帯〉は、差別をかくすのうづつつけの道具であり、支配者にとっては体制のほころびを繕うためのボロ布として役立つ。そしてその集団のなかにいる個々人にとっては、不決断を正当化する口実をあたえるこうした〈連帯〉が表現しているものは、権力への意志である。その〈連帯〉をささえているものは、当面の利益の

一致である。管理者のための団結であり、管理者たらんとする結果である。所有欲を再現して、これに別のやりかたで満足にあたえる内密の形式は、ほかでもなく、権力になりあがっていく一般的な嫉妬である。どんな私有財産の思想であれ、ともかくそれが私有財産の思想であるかぎりはずくなくとも自分よりゆたかな私有財産にたいしては、嫉妬として、また平均的なものにしたいたいという野心として、はむかつていくものである。したがって、これが競争の本質をすらかたちづくっているのだ。野蛮な共産主義者とは、空想された最低水準を出発点にして、この嫉妬と平均化とを完成したもののほかならない。」(三浦和男訳)

マルクスのこの一文のたすけをかりて言うのであれば、いま巷を徘徊している〈民主化要求〉とは国有化されたり法人化されたりした私有財産たる大学を、自己の私有に帰したという野心の具体化にすぎない。「……」私有財産を積極的に揚棄すること、いいかえれば、人間の本質存在や生活、対象的人間を、人間的労働を、人間のために、人間の手で、感性的に自己のものにしていくことは、たんに直接的・一面的な享受の意味でのみかんがえられてはいけな

う、感じる、考える、眺める、感じとる、欲する、活動する、愛するなど、世界にたいするかれの人間的關係のいづれもが、要するに、かれの個体の器官のすべても、またその形成において直接に共同体的であるような器官も、その対象的關係態度において、すなわち対象にたいする態度において、対象を自己のものにする活動なのである。人間的現実を自己のものにする活動、対象に關係するその態度は、人間的現実の確証行為である。」(同)

大学もまた——社会のすべての場所と同じように——このような行為のための場とならなければならぬ。「人間的現実の確証行為」とは、「自己の全面的な本質存在を、全面的な方法で」自己のものにする活動でなければならぬ。大学の可能性をわれわれの側に奪回していく行動は、人間の能力や本質を細分化することによって個別的な成果を吸いあげ再構成して支配の貫徹に役立てようとする勢力との、たえざる対決とならざるをえない。それと同時にまた、われわれのその行動をたんなる〈所有〉権獲得の要求に矮小化してしまう安易な〈連帯〉の主張をも、われわれはたえず否定していかなければならない。

真の連帯は、こうした両面作戦を具体的に展開していくなかでのみ、生まれ、発展していくだろう。そしてそのとき形成される連帯は、けっして、〈全京大人〉の連帯、〈全〇〇大学人〉の連帯ではありえないだろう。そのような粹

をとりはらう運動が生みだされたときのみ、あらゆる差別的な構造が大学のなかで解体され、特定の大学という形式そのものも無意味になったときのみ、すくなくともそのような到達点を当初から理念として立てたときにのみ、連帯の萌芽が生まれ、その萌芽が行動そのものを質的に高めいく可能性が生じるだろう。これがどれだけ可能であるにせよ、現実には学生は労働者ではなく、教官すらも労働者とのあいだに差別をおかれていることを、いまはまず直視しなければならぬ。一個の労働者であるという位置づけは、もちろんそれ自体究極的には正しいとしても、たとえば、「職員組合」という単一的な名称が大学教官と事務職員との差別をかくしたまま機能しているように、研究者とよばれる人間が社会の他の労働者層とくらべれば種々の面でも有利な地位をしめていることをあいまいにしてしまう。

教官(与えられたこの名称を敢えて使うなら)であるわたしは、学生諸君とも安易な連帯をすまいと思う。最終的な理念が同じであるということは、すくなくとも異なる階層において、そこに接近する方法も同じだということの意味しない。ましてや、その理念そのものさえア priori 存在するものではなくこれからの闘争のなかで徐々に具体化されていくものだとなれば、いま必要なものは、むしろ相互の徹底的な批判であるだろう。教官としてわたくしが今後とる立場は、このひとことにつきる。

ただ、どのような批判をおこなうにせよ、どのような闘争形態をとるにせよ、それが人間のおこなう活動であるいじょう、人類の歴史の齒車を逆にまわすことは不可能であると同時に、人間そのものについて行動者がいなく基本的な理念が、たえず問われつづけられねばならないだろう。

「前提が人間としての人間であり、また世界にたいする人間の関係としてのかれの関係であるようなばあいには、きみは愛情をもつばら愛情とのみ、信頼をもつばら信頼とのみ交換できる。もしもきみが芸術を享受したいとのぞむのであれば、きみは芸術的な素養のある人間でなければならぬ。もしもきみが他人に影響をおよぼしたいとのぞむのであれば、きみは他人にたいして現実的魅力でかれにひしひしとせまるものをもつ影響力ゆたかな人間でなければならぬ。人間——や自然——にたいするきみの関係のどれひとつもが、きみの意欲の対象に照応した、きみの現実的・個人的生活の特定の表明でなければならぬ。もしもきみが、相手の愛をよびますことなく愛したとすれば、すなわちもしもきみの愛が愛として相手の愛をよびさままなかつたとすれば、もしもきみが、愛する人間としての生活・表明を介して、愛されている人間になることがなかつたとすれば、きみの愛は無効であり、一つの不幸である。」

この美しい言葉もまた、マルクスのものである。

(一九六九年三月)

# 混迷の中の大学

## 一 立命館民主主義の崩壊

立命大の斗いは、既存の民主主義教学体制に対する非妥協的な斗いとしてある。立命館民主主義体制とは、その擬似民主性にもかかわらず、現在の大学斗争の渦中では最も進歩的な大学運営の在り方として注目されているものである。だがしかし立命の民主体制が擬制的なものでしかないことの実体告発は、まさしく立命全共斗の運動の推進過程で明らかにした。

さしあたって我々は「民主立命」の問題点を明らかにしてみたい。先に、現在の大学斗争の渦中でこの体制は注目されていると書いたが、東大斗争の收拾策動が立命方式Ⅱ全学協議会路線の採用となつて現れてきた事態の中に象徴的にそのことは現れている。この事実は、現在の大学関係者が、たかだかこうしたレベルでしか大学問題を把握して

30年代のファシズム、リベラリズム、実存主義批判から今日の体制告発にいたるまでの、マルクラーゼの理論的哲学形成の跡を集大成した論集 子 ¥500

H・マルクラーゼ／田窪清秀他訳  
**社会と文化(上)**

日大・東大等の諸闘争に普遍的な光を投げあてているH・マルクラーゼの「抑圧的寛容」を中心とする本論文集は、深い反響の中にある 5版 子 ¥400

H・マルクラーゼ他／大沢真一郎訳  
**純粹寛容批判**

〈暴力〉をめぐる今日のあらゆる物神化を批判しつつ、ベンヤミン、ローザ、ルカーチの論理の検討から暴力廃絶への真の道を探究する 子 ¥500

野村 修訳  
**暴力と反権力の論理**

真のトータルな変革をいかに求めるか、この困難な問いをすすめるカーマイケル、マルクラーゼ、スウィージー、ゴルトマンらの発言を集約 子 ¥600

S・カーマイケル他／由良君美訳  
**解放の弁証法**

せりか書房 東京都千代田区麹町4-5 第8麹町ビル  
振替・東京143601 TEL 265・1405

## 立命館大学全学共闘会議

いないという彼等の無知さかげんを暴露するものであると同時に、まさに大学の問題を解決してゆくイニシアティブがそうした彼等の中にしか存在していないという事実をも暴露している。つまり今日の大学の諸問題を根本的に問題にする時、その問題発想の基本的立場の構造を抜きにしては一切の議論が不毛であるという事実を基礎に据えながら、全ての幻想的期待の無意味であることを我々は明らかにしなければならぬ。立命館方式Ⅱ全学協議会路線は、要するに大学の民主化という原理に立つた改良斗争の全姿であるが、まさにこうした民主化斗争は現実の大学の根本的な問題点を全て捨象してしまつていく。こうした視点からは、現実の問題にされなければならない大学の根本問題が—大学の現状—学問・研究・科学の破壊を促すことではか存続して

いず、そこでの学問研究とは疎外態を増々強固にするものでしかないということ―支配階級のものとしてしか機能しない大学のレーゾン・デートルにあるのだという認識は生れてこない。

我々の大学斗争は、単位大学の歴史的場所的特殊性の内側に共通する本質として貫かれて現行大学の管理運営システム根本―この中に大学内秩序の教育者↓被教育者の断絶を前提にした秩序体系が成立しており、それが同時にアカデミズム秩序体の不可侵な規範として実体化されているところに根本矛盾を発見し―それへの攻撃を目指すものとしてある。この矛盾は、今日の工学管理運営機構が、一方歴史的伝統として、学問の教授、伝達の一般定式として秩序化されていることの問題性とこうした断絶機構を装置とすることによって保たれる、大学の基本構造、この基本構造の中で生産される学問・研究・科学の問題性に規定されてある。

現代社会に於ける教育・研究が階級規定関係の中に置かれるのは当然であるが、この階級定性の中から加害性を選取し、或は導入する契機は、大学運営のかかる基本構造にあるのであり、大学が、教育↓被教育の断絶を媒介にしてその統治機構を運営する構造的要因を持ちつづける限り、階級社会の加害性は大学の構造そのものに自己を投影する。かくして大学はその主観的意図とは関係なく（現在の大学

我々に残した教訓であったのである。大学構造の権力関係が、基本的に問題とされる時点にいま到達した。この時、民主化の徹底を叫ぶことは、まさに既存の大学構造を破壊する闘いではなくて、それを増々補強し、疎外を完成させる役割を逆につくり出すものである。

東大斗争の斗争圧殺策動がそうである様に立命斗争の圧殺策動も、今改革案の陰謀に直面しつつある。立命民主主義体制は既に永きにわたってその形骸化なり破綻なりが叫ばれており、二月十二日の全共斗―理事会大衆団交によって、この体制の支柱の一つであった五者会談―学園振興懇談会―全学協議会の解体が、勝取られたのであるが、その捲き返しがこれらの諸機構の新たな設置という形で改革プランの中に登場しつつある。それは、大学当局||日共・民青の一体となった、大学守護の策動によって画策されつつある。彼等は先述した様に、立命民主主義体制の問題点を、理念と現実のズレ、歴史的変遷の中で現実をそぐわなくなった体制の改革として集約している。しかし、まさに「民主立命」の理念と体制は決して現実機能していないのではなく積極的に学生統治の巧妙な形態として多大の功績を上げてきたのであり、現に上げているのである。この問題

では主観的良心すらなくなってしまうているが。例えば相続く機動隊の導入から常駐という事態を見よ）根源的にこの大学構造の支配―被支配関係に規定された諸活動を行う結果となる。ところが大学内の意志決定を司どってきた伝統観念は、こうした大学の現実に意識的に目をつむり、「学問の自由」という御題目にしがみついている。この事実には犯罪以外の何物でもない。「学問の自由」論は大学内秩序の基本を、学問を媒介にした人間関係の平等性という幻想理念に求めるのであるが、このことによってあたかも大学内には上意下達の権力関係は成立していないかの様を見せかけをつくる。「理性の府」としての大学という虚偽意識は観念的にこの幻想を支配してきたものである。だが、一旦、大学での蜂起なり反逆なりが学生達の間から引き起された時、権力関係はものの見事に支配者の意図のままに動くのである。

大学がこの様に幻想としての民主主義形態をかかけ、内容としては実体的に支配―被支配の構造を活用する状況の下で、民主化の実現なり徹底なりのもつ意味は、この構造そのものには一糸も触れることなく、幻想の拡大再生産を行うに過ぎない。例えば、あらゆる種類の協議会の設置、話し合いの機会の増大等は、それらをフルに活用しても、ついに決定的な学生達の利益を実現することに到らない調停機関でしかない。この事実は痛い程、立命館学園斗争が

は拡大すれば戦後民主主義下に於ける大学内秩序に許容されてきた学生運動の有り方にもかわるのであるが、大学当局はポツダム自治会を占有する日共民青との団交や、破綻した問題に咲いた仇花的協議機関を使って、大学意志の調達を欲しままにしている。

我々は、民主主義体制が、その発足の理念と今日の現実において大きなズレを生起したから改変するということを許すわけにはいかない。そうではなく、民主主義体制は既存大学の基本構造（立命では理事会―教授会の専制的支配の確立）を地盤にして成立するいかなる理念も、その構造の自己投影でしかないものであり、最初から、理念そのものの虚妄性を前提にした学生統治体制としての民主主義でしかなかったところに根本の問題を設定する。

改革案策動は、破綻した現実から、醜悪な実体を明らかにするであろう。現在闘いは、現実教学の破綻を拡大深化させてゆく中で、当局の動向のよって立つ構造的基盤を解体する作業を着実に進めている。四月は新たな戦列の中でその息吹きが実を結ぶ季節になるだろう。

（文責 刑部甫）

## 二 「大学」 その否定と再生を

大崎武彦

現在、さまざまの大学論が巷に氾濫している。云く、大学への提言、スチューデント・パワー、大学の危機、学生問題の課題と現実等々。しかし、これらの評論がどの程度まで問題を闡明にしたかという点になると、はなはだ疑問である。せいぜいのところ（いわゆる進歩的インテリをも含めて）、国家権力の大学への介入反対、程度で口を拭いているにすぎない。しかし、これらの評論は、大学の存在根拠を空疎なロマン的美辞においていることからいって、本質的には反動的役割をはたしているといえるのである。実際、「絶対的真理追求の場」、「知性の府」といった言葉が、大学という一つの小宇宙を外敵から守るといふ地点から発せられた場合、「社会における最高の良識」（前中教審委員、大浜信泉）、「人間形成の場」（中教審会長、森戸辰男）といった国家権力の代弁者の発想と、いったいどれだけの距離があるというのだろうか。これらは、現実存在としての大学を、抽象的空間へ押し上げ、それを守るか、攻めるかといった、同じ土俵での相撲にすぎず、いずれにしても、大学の社会的機能を糊塗するものにすぎない。我々は、大

学の理念を観念的にもあそんだり、大学の「精神的貴族主義」にふけったり、「大学改良論」に陥るのではなく、ブルジョワ社会における大学の機能を真正面から告発しなければならぬ。我々に必要なのは、現実の大学の分析と、そのトータルを否定し再生でなければならぬ。

六三年の「大管法」以後、政府・独占資本は、主として国立大学を標的として巧妙に従来の分業体制の近代化を推進した。「法案」、「通達」を上段に構えて、再生産過程における一要素としての大学（奥田）「私は、大学は圧力団体の一つと考えております」に「体質改善」を迫るといったやり方から、法制的には、旧師範学校・専門学校系統の比較的弱い環から個別に突破し、全体としては、いわゆる「国大協自主規制」路線にまかせ、その中で、独占資本はアナキーに、大学、主として理工系を貪食し、学生は治安当局が全力を挙げて取り締まるといふものである。

ここに、全国の学生は一斉に蜂起し、現在のいわゆる、「学園斗争」が防衛戦として始まったのである。従って、問題は、不正人事、学舎移転・統合、名称変更、インター

ン制度、学館、寮、自衛官入学、学費値上げ、委託研究、等々々の方向から出発している。しかし、帰するところ、大学が、ブルジョア体制における生産、再生産機構の不可欠の一環であり、そのために、労働能力に専門性と体制のイデオロギーを附与する所である以上、これらの問題は資本主義的合理化貫徹としての本質に到達せざるをえない。政府・独占資本の要求は、この線に沿って最大限合理的に追求されるのであるから。

しかし、現在、設備投資につぐ設備投資、急激な技術革新、労働過程の強権的合理化、を通じて、高度の重化学工業段階に達し、かつ開放経済体制下で海外進出をねらう独占資本家にとって、もはや従来の個別的な大学介入は極格と化し、再び、「大管法」を振りかざして、大学の全面的、帝国主義的改編を志向しつつある。従って独占資本の要求は、国立大学では、文部官僚を通じての大学統轄となつて構造的・全体的に表われるであろう。京大の場合・例えば産学協同路線は、個別資本のアナキーな介入という形ではなく、土木協会、建築協会 etc. といった資本連合による系統的委託の方向をとりつつある。これに伴って、学部の研究も構造的ヒズミを伴わざるをえない。

このような政府の攻勢を迎え、資本主義的合理化を一層強める体制として、国大協自主規制路線がある。特に京大の場合、奥田国大協会長を頂点に最大限、近代化路線が追

求されつつある（いわゆる奥田体制）。これは、大学の自治部教授会の自治を骨子としつつも、「学生参加」なる形態を導入し、大学管理体制の非本質的一端に学生をのせることによつて、学生を共同責任者に仕立て、永遠の異議申し立て者としての性格を切りすてようとするものであり、同時に、時計台権力（大学官僚、上層ボス教授の連合体）の強化と末端に到る指揮・命令系統の合理化により大学の構造の近代化を図ろうとするものである。そして、こうした機構の上に立つて、文部本省に対しては「自主」（圧力団体としてのヘゲモニーの確立）、学内、主として下層教官・学生に対しては「規制」が主張されるのである。この関係を予算制度について見てみよう。

国立大学予算の中、物件費（教官研究費）は、周知のように、大蔵省計上予算が、まず文部省で一〇％留置され、（本省留置分プル）、各大学割当分のうち一〇％（京大では七％）が、さらに本部留置とされる。この中から、光熱水道費、施設補充費等がさし引かれ、結局、学部に通されるのは三〇〜四〇％にすぎない。このような教官研究費ですら、学部・研究室の事務職員経費その他に流用され、実際にはもつと少ないものとなる。更に、物件費単価の引き上げも意識的に、消費者物価の上昇以下に押えられている。こうして、文部省留置分は、設備更新費、学生経費、追加配当などの名目で文部省に大学本部のボス交によつて

秘密裏に決済され、本部留置分も経理部長各部署局長・ボス教授のヤミ接衝で決定されていく。驚くべきことに、この実態が学生・下層教官層はもちろん評議員、一般教授にすら全体として報告されていないことである。こうして政府「独占資本は、大学上層部の「自主的」窓口を通じて、財政的に大学をしばり、できうる限り合理的に重点的に予算操作を行ない、自らに最も効率のよい教育・研究へと水路をつけているのである。このような予算による大学操作から、大学間拡張、学部間拡張、講座間拡張が生まれる。京大においてその、しわよせを最も集中的に受けるのが教養部であることはいうまでもない。予算による大学操作は、以上にのべた構造的なものだけに止まらず、教授の一本釣り科学研究費の個人的分配においても見られる。この間、教官研究費ののび率より、科学研究費ののび率の方が高くなっているのは、予算の重点分配による能率向上を如実に示している。このようなものとして国大協「自主規制路線」が機能する以上、戦後民主化の落し子で、各大学で無用の長物として邪魔物扱いされる教養部は、政府「独占資本から切り捨てられざるをえない。否、奥田ですら、教養部切り捨て」縦割り路線を主張するに至っている。「新制大学の高い理念に基づいて実施されて来た一般教育は、関係者の熱意と努力にもかかわらず、必ずしも当初の理想どおり実を結んでいるとはいえないように思う」(文部省)、とい

われる所以である。しかしながら実情は京大教養部を見れば一目瞭然であろう。その施設は貧弱を極め、不足坪数の比率は高く、危険建造物は増大するばかりである。そして八万m<sup>2</sup>の敷地に五〇〇〇余人がゴマメのように詰め込まれている。その上、教養部予算は切りつめられ、教室予算・学生経費も本部予算に比べ三分の一に押えられている。教官一人当りの学生比率も高く、三百人、四百人を一教室にとじ込める講義(講演と言う方がより適切であろう)が日常的にくり返されている。このような教養部マスプロ教育化は、理工系を中心とした学部定員増大によってますます強められている。

以上のべたように、京大本部の財政的締めつけによる各学部の矛盾の集積は、特に教養部を中心として教育内容、カリキュラム、研究体制の深部にまで及んでいる。このことは、基本的に学部においても、同じことである。授業科目は細分化「一面化」され、無政府的に知識の積み込みが強化され、他方でマンツーマンのイデオロギー教育が図られている。

大学当局の「自主性」は、産学協同においても、委託研究、研修員派遣といった直接的なものから、教科の実用化、専門化、工場実習といったカリキュラム内容の変質として表われて来ている。

また、「大学当局」の学内規制については、すでに、今

回の京大における「狂気の三日間」でその実体は出尽しているといえよう。つまり、幻想の「全京大人」を振り廻し、講座制権力の機能をフルに發揮して一般下層教官、大学院生、学生を動員し、外に対する体面を保つと同時に、学生弾圧に関しては、機動隊を最後の切り札として保持するということである。基本的には、京大において、学生は「大学」から排除され、その上で、被管理者として受動的である限りにおいて再び「大学人」になりうるという構図である。この際、京大五者「日共」民青が、大学権力の補完物として、自己よりも「左翼」に位置する者をもつばら攻撃し、肥大化を図っているのは、一九三〇年代のドイツ社会民主党の愚をくり返すものとして、打倒されなければなら

ないことはいうまでもない。

このように、国立大学の変質の過程をイデオロギー的に支えているのが、いわゆる「自主規制」である。本部事務官、上層ボス教授専制支配により、政府の大学政策のパイプを通し、かつ、独占資本の要求を自主的に反映し、学生弾圧を強化する現在の大学管理の形態は、イデオロギーとしては、前述の如く、ロマン的美辞麗句におおわれている。我々は、このようなブルジョア分業体制の一環としての大学秩序の実体を緻密に暴露し、我々のヘゲモニーによって、旧大学の解体を推進し、ここに強固な、本来の意味での大学の再生を期さなければならぬであろう。

(京大教養学部大学院)

### 三 恥 を 知 れ !

鈴木正穂

未来は決して明るく豊かではない。  
パスポートを得たからと言って、灰色の生活から脱け出し、バラ色の世界が広がることをオペティミスティックに信ずるわけには行かない。特に、七〇年代を生きる僕達にとっては。

Kは今春の受験を拒絶した。秋頃まで、彼は受験するべ

く、まがりなりにも準備していた。彼は、反戦運動と共に学問をしたがっていたし、その場を大学に求めている。だが彼は大学を否定し、東京へ行った。救援活動をするために。そのKと、わずか二週間だったけれど、農村へ働きに行ったことがある。みかんの本場、紀州の有田。「みかんの花が咲いている。」という歌のとおり美しい風景の中に、

みかん畑はあった。冬の陽光の中で、喜びを感じる労働になるだろうと思っていたが、都会育ちのオボッチャンが農業を手伝えるわけがない。過酷な激しい労働の日々。一週間で、みかん取りは解雇になった。農民にとって、一年間の生活がかかっている最も大切な収穫期に、「学生さん」にノンビリと仕事を手伝わってもらえるような余裕はない。僕が「同志社の学生です」と自己紹介すると、「学生なのにどうして」と不思議そうに見返す。とにかく、僕は、真面目に、必死に仕事を続けた。朝六時から、夜の十時ごろまで。だが、所詮、シロウトの悲しさ。彼等と僕等との労働量は、ふたりあわして、ようやく、旦那の仕事量の三分の一程度。屈辱を覚えるが仕方ない、とあきらめることにした。しかし、僕はうしろめたさを感じるのだ。「同志社の学生です」と自分で答えたことに。いかにして、美しく、新鮮なみかんを作るかに、生涯を賭けている農民と、「学生です」と逃げる僕とに。そして、いつも容易に五〇キロのみかんを肩にかつぎ、ヒョイヒョイと畦道を歩く農民に。

この冬、みかんは大農作だった。豊作という輝やかしい収穫を迎えるはずなのに、愛媛県でみかん作りに賭けていた一人の老農民が自殺した。豊作貧乏。自分の体をみかんの木の下に埋葬して下さい。」という遺書を残して。まもなく、そのみかんの木にも、白い花が咲くだろうと思う。

その老農民の死は、闘う三里塚の、そして砂川の農民と、

僕は、自己に厳しくもなく、絶望感も抱かず、欺瞞を乗り越えて生活しようとしている。だが真黒に日焼けし、筋肉も隆々とした農民に対して、うしろめたさを感じることもなく、「学生です。」と答えられるようになりたい。或は、高慢ちきに、「学生なんだ。」というツラをしたくない。だとしても、うまく大学という場に、安心して生活できる保障を、拒否し、自己否定するほどの、そして、フワフワと居心地のよい大学を拒絶するほどの勇氣もない。だが、どこかで、自殺した老農民や三里塚や砂川の闘う人々と僕はつながっていたと思う。居直るとするなら、「自分の体をみかんの木の下に埋めて下さい。」と遺書に書けるような「僕自身のみかんの木。」を持ち続けたい。書き残すことはないかも知れないが。

つまり、僕にとっては、ひとつの《私自身の大学》が、そこにあつたように思う。農民の喜びと悲しみという、最も人間的な強さと弱さを含んだ状況の中に、かわりあいを持つ。決して、キャンパスに閉じこもることなく、自己の曖昧な生活に埋没することなく、ひとりの老農民の死を僕の心のどこかにひっかけておきたい。そんなささやかな願いを持つ。

この一月以来、タクシーの運ちゃんを喋ると、学生以外の人々が、いかに学園闘争を考えているかを知ることが出来る、愉快だ。まったく迷惑と思っている人も多いし、も

どこかでかわりあっているのではないかという気がする。日本解放戦線、三里塚に僕は行ったことはない。広大な祖先伝来の緑地を、圧倒的な国家権力の暴虐から、死守すべく、「本日、ココニ、竹槍ヲ鎌ヲ持ツタ。本日、ココニ、竹槍ヲ持ツタ。」と、歴史上はじめて高らかに宣言した不屈の三里塚の農民。ふつうの素朴な農民が、ベトナムを安保を大学を語るに行きつくまでには、生活を守る闘争から、自己否定を基底とした、反権力、変革への素手での戦いだつたのだろう。不屈の、厳しい、苦しい戦いだろう。

秋のある日、爆音をゴオゴオと響かせて離陸するファントムの下で、闘う農民がいる立川基地、砂川へ行ったことがある。数億という大金を積まれても、土地を死守し続ける。ベトナム戦争に加担する政府、そして、爆撃機のパイロットを告発するべく、民族解放戦線旗が、そして、赤や白や黒のカラフルな反戦の旗が、滑走路のところに雄々しく旗めく。最近、便りによると、青年達が塹壕を掘りはじめたという。そして、国有地を耕作しはじめたという。そして、長い闘いだろう。

「自分の体をみかんの木の下に埋葬して下さい。」という遺書を残して自殺したひとりの老農民のように、「本日ココニ竹槍ヲ鎌ヲ持ツタ。」と宣言した三里塚の農民のように、そして、闘いの象徴である旗を奪われても、盗まれても、何度も何度も木の上に縛り付ける闘う砂川の人々のように、

つとやれやれ」と声援を送る人も中にはある。僕はどう見たって学生づらしているのです、よく運ちゃん、学生運動について話しかけてくる。ずつと京大とか立命館とかの話をしていて、「アンタは、どこや。」と聞くので、おもむろに「同志社です。」と答えると、一般的に、運ちゃんはこう言い返す。「ヨロシオスナー。静かで。ある運ちゃんは、こうも言った。「さすが、新島精神が生きているんやなあ。」と。奇妙な時に「新島精神」という言葉を運ちゃんがストリートな気持で使ったので、僕は苦笑した。正直に言えば、僕は新島精神とか、同志社創設の由来をまったく言っていないぐらいいらない。それに、同志社を選択したことが、なんとなく偶然の産物であるような気がしている。新島精神と言われてもピンと来ない。だから、苦笑した。が、京大と立命館であれだけ激しい闘争が展開されているのに、「ホントニ、静かだなあ。」と感心するほどの安心感と、それとは、まったく逆に、静寂さへの不安とが入り混じった奇妙な気分になったから、苦笑したというのが適当だろう。

「さすが新島精神が生きているから、同志社に闘争が勃発しないか。たしかに、東大、京大等で全共闘運動に参加し戦っている学友もいる。そして、六八年においては、ASPAC粉砕、十・二一反戦デー等、全学バリケードは構築され、少しの期間、有終館に学長選挙粉砕のためにさら



を知れ。

一九才、六月一五日。何もしないで生きるのが嫌で、アメリカ大使館前に坐り込むために上京。開き直って言えば、ナパーム弾を満載した爆撃機が、日本の基地から、ベトナム人を虐殺するために飛び続ける限り、そして、ジェット燃料を運ぶ米軍タンク車が日本の中を走り続ける限り、僕はベトナム戦争の加担者であって、ベトナム人民の流す血を共有しなければ、僕自身の解放はないのだと思つたから。以後、確実に、ベトナム反戦運動に参加。いつのまにか、大学生活の一年は過ぎた。

真面目な学生ではなかった。講義には、ほとんど出なかつた。あの大教室のマイクを通しての冷たい教師の声を聞くのが嫌で、デモがどうか、機動隊がどうか、反戦と変革に関する国際会議がどうか、学生運動がどうか、機関紙がどうか、小田実がどうか、七〇年がどうかとか、そんな話ばかりしていた。あまり、本も読まなかつた。たまに気が向いて、講義に出ても、ろくすつば教師の顔も見ないで、仮寝をきめ込んだ。そして、多くの単位をとるために奔走することもなかつた拒否し、つまりは、勉強しなかつたので、四年間で無事に卒業できるとは思っていない。結局、マージャンも覚えなかつた。ある時、学生ばかりのアルバイトに行くと、休み時間は、マージャンの話ばかり。なんとなく、消耗するなあーと思

に致遠館に寮問題で、バリケードが築かれたこともある。だが、日大、東大を発火点として、爆発していった全国学園闘争の渦の中に、すつぽりと入っていないではないか。平和なことはいいいことだと思ふ。ゲバルトもなく、破壊もなく、バリケードもなく、血を流した人間がいいることは、正常なキャンパス風景だと思ふ。だからといって、反逆のバリケードを築く必要はないのか。「東大は、日本帝国主義のエリート養成機関。日大は、そのサラリーマン養成機関としての役割を果たしてきた」と日大全共闘の秋田明大は言っているが、なら、同志社大学は、どこに位置づけられるのか。日大のように、露骨な権力の弾圧もなく、厳しく、自己を武装することがいらぬし、サークルという隠れみのかくれ、マスプロ授業のウサをパチンコでもして解消すれば言うことはない。ひまができたらアルバイトでもして、レジャー旅行を楽しめるものなら最高だ。適当に勉強して、適当に遊んで、どこかいいところに就職できれば、万事めでたし、めでたし。いや熱心に、学問に勤める人もいるだろう。時々、キャンパスをヘルメット部隊が、安粉砕、闘争勝利とシユプレヒコールを声高々に叫んでも、泰平そうな顔をした連中と、わだかまりができるだけ。なんとなく、甘いオブラートで包まれた雰囲気。決して、新島精神なんか裏づけされていない、ポツチャン、ジョウチャン大学だと自嘲せよ。全共闘運動の渦の中に居ない恥

知っていなければならぬ義務があるのかなあーと寂しい疎外感に陥つた。だが、今でも、マージャンを覚えるつもりはない。

大きく居直つて、この一年の総括めいたことをするとすれば、《私自身の大学》は、(いや小学校かな?)ベ平連運動の中にあつた。良いことであつたか、或は悪いことであつたか、さらに、肯定的にとらえることができるか、否定的にとらえなければならぬかは、それは、僕自身のパーソナルな歴史と世界の日本の全体的な歴史が評価をくだすだろう。ただ言えることは、「賭けた」と感ずる。でもやはり、これは居直りだな。

僕は、パーフェクトなきびしきの要求されるプロフェシヨナルな革命家でも、運動家でも、闘士でもない。政治的ミーハーで、自己矛盾だらけで、マルクスの「マ」も知らない。野次馬的に、ワァーとついでに行つていよう、理論もなく思想も確立されていない僕自身を粉砕せよ。怠惰な生活に流されて行く自己に終止符を打て。

この春、僕は二十才を迎えた。「美しい」と呼べる季節ではない。これから先、順調に行くとして、そして、みづからの生活を拒否する勇氣もないとすれば、あと三四年間、学生生活を送る。試行錯誤し、様々な模索を重ねながら、或は、一切行わずに、七〇年代にのめり込んでいくにちがいない。僕自身がどうなつているか予言できないし、日

本の状況が、いかに流動しているかは想像もつかない。だが、決して未来は希望に満ちているとは信じない。明るく豊かな未来はない。発情した国家権力、機動隊の盾と棍棒で乱打される恐怖と戦慄の中で、叫び声をあげ、ガス弾と火炎ビンの炸裂の中で、バリケードを構築し、解放区を創造せよ。陰惨な右翼の策動を粉砕し、ヘルメットとゲバ棒で武装しなければならぬ。決して、明るい歌声のでるような戦いはない。

空洞化した「大学」を再生するには、バリケード封鎖で占拠しなければならぬ。その解放区には、あの老農民や三里塚や砂川の人々が、もちろん、町工場の労働者やラーメン屋の兄ちゃんをも含んで、祭典をくり広げよう。大学はみづからの力で創造するものだろう。状況の中に、かわりあいを持ち続け、何のために大学に行き、何のために大学があるのかを常に考えていたい。「大学出」というパスポートやレッテルをもらうためではなく、自己否定の倫理をも形成しつつ、「私自身の大学」を創りたいと思う。

新しい大学が、破壊の中から生み出されようと、うめきまわつている時、ひとつのルネサンス運動に参加することは愉快だ。その運動に参加していかない恥を知れ。

未来は、決して輝やかしくはない。

(同志社大学学生)

安保斗争以降、全国学生運動は混乱と停滞の歴史を繰り返す中で、六三年に始まる学生運動の新しい転回は全国的にその高まりをみ、六八年学園斗争は、東大・日大を頂点とし、反帝国主義・反権力斗争として普遍的な質を持った全人民的な斗争として登場した。資本家階級の強権支配の嵐は、国家権力（機動隊）を学園に直接介入させ、熾烈な弾圧を加えているが、現在も五〇大学以上のバリケード封鎖斗争、一〇〇大学において無期限ストライキでもって闘われている。

### §一 敗戦から安保斗争まで

戦後の激動期から「レッドパージ」「破防法」「教育二法」斗争を経て「勤評」斗争に至り、「大管法」斗争で開花した学園・教育斗争は、国家権力の反動的文教政策、大学自体の経営・教学矛盾の累積に対して「憲法」・「教育基本法」「大学の自治」の理念に表現される大学制度の一定の進歩性と独自性を対置する運動として闘われてきた。「平和と民主主義」「より良き学園生活」のとりでとしての学園を侵す支配権力に対して徹底的な反撃を展開する斗争であつ

た。このことは資本主義の復活期で市民としての政治行動を許しながらも全体として統治して行く資本主義の深化過程であつた。又労働者の反応もそれに等質性をもつ組合主義的労働運動の枠を置いての経済斗争、一市民としての政治斗争として転回されている時期であつた。

五七―八年頃から始まり六三年頃に全面化した大学の資本による直接支配と合理化——学問研究の直接の利用とそれを通じての学生大衆の意識的体制内化と適切な労働力の再生産を目的とする教育工場化——を通じての産学協同路線の追求が行なわれていた。この大学支配体制の帝国主義的再編のもとでは、学生に対しては、講座制という封建制の中で教授―助教―助手―院生―学生という縦深的分断支配の中で、政治的・経済的攻撃が未端まで一本化し明確な資本の論理の存在を認識させ、封建制と資本主義的合理化的の奇妙な一体化の中で、学生の掌握を収奪が貫徹したのである。ここにおいて、学内主義として表現されていた学園斗争が、反帝国主義として反権力斗争として全人民的な階級斗争の質を持ったものとして展開されている現在のな

学園斗争の性格が明らかにされる。

### §二 安保斗争以後

六〇斗安保斗争が、日本資本主義から帝国主義へと脱皮する一段階として捉えた全学連が、諸階級に先じて安保斗争に決起し、戦斗的、先駆的斗争を展開する中で、「平和と民主主義」を侵す者に対して断固として闘うことを示し、労働者戦線に対して前衛的役割を示した。が斗争の最終段階において日本資本主義の帝国主義移行に対する反体制的運動としてではなく、反政府的な斗争として展開し、日本の階級斗争を激化することはできなかった。このことは、同時に斗われた三井三池斗争が、労働者にかげられた資本の支配体制強化と合理化による職制支配を確立する帝国主義的改編に対する闘いであり、安保と三池斗争が階級的に同質な斗争であるという把握が大衆的に明らかにされない間に、敗北への道を進んだことから明らかである。

安保以降、学生運動が分裂と停滞の時期をさまよう間、政府は、小・中・高校の直接支配を終え、教育の最後の牙城である大学に対する攻撃として大管法を提出した。池田内閣による高度成長政策による経済構造の変化、即日本経済の重化学工業化という構造変化は、高級労働者としての学卒（特に理工系技術者）の大量生産、資本の研究機関としての大学を要請し、大学を国家が直接支配するものとして大管法を立法化しようとしたのである。大学側の反対に

より、提出は挫折したが、政府は中央教育審議会答申、文部次官通達の形で、なしくずし的な大管法の実質化を図り「理性の府」「真理の追求の府」たる大学の存在基盤を切りくずし、国家による未端支配（寮、学館の自治権ハク奪）の方向に向っていったのである。六三年以降、それらに対する学生の反撃は、授業料斗争、寮、学館斗争として展開され、先駆的な斗争として慶大授業料値上げ反対斗争（六五）理念の先取りとして早大、早大、早大斗争（六六）その後、明大、中大、同大と斗争が引き継がれる中で、東大、日大斗争に見られるように、学園斗争が反帝国主義、反権力斗争として、全国学園の普遍的な問題として闘われ、それ故にこそ、今年一月からの京大斗争が存在するのである。現在の学園斗争の端緒を切り拓いた、慶大、早大斗争を総括し、問題提起を行なうことは、今後の京大斗争における発展と質的飛躍への作業としては重大な問題と考えられる。

### §三 〈慶大、早大斗争〉——第三期学生運動——

慶大一〇〇日斗争、早大一五〇日斗争は、大管法以降、大衆的運動として最も先進的に斗われた運動であつた。大衆的爆発をもたらした直接の契機は共に多額な学費値上げに対する当然の怒りにあつたことはいうまでもない。しかしながら、生活防衛という見地からのみ反対し決起したのではなく、次の三点に深刻に結びついて発展した故に、現在の大学斗争と質的な同次元の地平の上に立っている。

一、授業料値上げの問題は「高級労働者化と大学の資本のための研究所化」の実質の為の費用の一切を学生に転化する所にある。

二、産学協同路線に対する学生の不満と不信によって斗争が拡大していること。

三、大学運営の官僚体制化の学生自治権の破壊と大学自治、学問研究の腐敗化。

以上の三点に集約的に表現されているように大学の帝国主義的再編に対する闘いであり、資本主義体制下における大学の諸矛盾を、あます所なく暴露しているといえる。

すなわち、今や大学は「学問の自由」が存在している所でもなく「理性の府」でもなく、大学（教育資本）は、教育工場（大教室）に教育労働の労働力（教職員）と、労働対象（学生・院生）を時間毎に送り込み、学生（労働対象）をすみやかに、かつ粗製に加工乱造している所なのである。従ってこの工場内ですみやかに通過させるため、資本主義的合理化の貫徹として、管理機構（評議会）への権力集中、学生自治の破壊、介入の方向へと進んで行く。資本は、このような大学の改編を要請しながら、自己の利潤率の悪化を防ぐため、その改編の費用は学生に一方的に押し付けるのである。

この大学の本質の変化に対し、慶大、早大の学生は、当初においては、福沢精神・大隈精神そのものの危機として

このことは、早大斗争が、早大一校の問題だけではなく、全国学園斗争として普遍的な質を持ちながら何故早大のみ問題として終わったかを位置づける一視点である。また、労働運動においても、安保以降の停滞の中で、学園斗争の先進的な闘いが発展性をもたず共に大衆との一定の分離をもたらず状況として存在したことも、早大を孤立化させた。しかし、慶大、早大斗争を通じ、現在の社会が、資本主義の諸矛盾を露呈しながら、大学の資本の支配の強化と収奪への矛盾の累積として一本化した教育資本と独占資本、国家権力に対して大衆的な反逆が開始されたことである。七〇年安保斗争が、学園斗争と如何に統一していくかの問題は、今後、同一性を持った質として、学園斗争と政治斗争との統一した指導性として、止揚されていかなければならない問題である。

レーニンの「革命的昂揚」の内在性の形成は、資本による支配と、国家による支配の等質的結合に対する底辺からの抵抗斗争を通じての等質的結合に基づく政治斗争への発展の可能性と、政治斗争から資本との斗争への深転化の可能性を有しているが故に、学園斗争は、改良斗争を極限下の中で闘う中に、革命の展望があり、学園斗争においては、連続的な異議申し立て運動として存在する。この一体化を指向し戦斗的に戦っている東大、日大斗争を支援しその内実化を深めることが、京大斗争の課題である。

(京大工学部大学院)

現実化し、ここに学生ストの全学園的な性格が横たわっていたことも事実である。慶大、早大斗争は、日本政府、学校当局の授業料値上げ強行の中で明らかにした帝国主義的再編に対し、日帝の長期的な展望としての大学改編の意図を見抜けず慶大においては、現大体制化において改良斗争を続け大学運営への参加により、福沢精神への復古体制への展開が可能として全学協議会を提案しているが、これも今年立命館斗争において破綻しているように、運動の質向上には至らなかつた。早大斗争は、慶大斗争の総括を踏まえ、大学における改良斗争と全人民的な階級斗争として、大衆団交決裂の後、現在の学園斗争のシンボルとして本部バリケード封鎖で闘っている。組織においても、全学共斗会議を、大学斗争を戦斗的に闘かう部隊として組織され、従来の自治会運動によるカンパニア斗争から運動での質的な指向性を示した。

しかしながら全学共斗会議は、セクト中心の組織であり、学生大衆を啓もうし、指導する機関であつたが、斗争を通じて運動へ飛び込む学生に対しては、セクトに入るからでないかの問題にすり返えられ、実質的に闘う学生部隊の組織化はなされなかつた。東大斗争でも明らかにされたように、大学当局に要求する改良斗争と、大学自身、学生、院生自身を告発し、真に人民のための大学として、階級斗争との関係において、早大斗争を高めることはできなかつた。

# 京都大学新聞

学生団体

京都大学新聞社

京都市左区吉田

京都大学構内

直通

京都 (761) 2054

京都 (771) 8111

(学内2441)

振替・京都3909

京都市左区吉田本町京大構内 京大新聞社

京都大学新聞縮刷版発行委員会 TEL.075 761-2054

〈最新・正確なニュースと  
本紙は読者が学内・学外の  
状況を把握できるようにニ  
ュース・解説を常に届けま  
す。〉

▼金東希問題  
42・4・10日号

▼自衛官入学問題  
42・6・5日号

▼10・8羽田闘争  
44・2・10日号

▼京大闘争・狂気の三日間  
44・2・10日号

〈思想形式の糧としての  
諸論文〉

▼連載「ぼくらの中のベト  
ナム」

▼講演「古代ギリシャ哲学  
と現代物理学」

▼ウエルナー・

ハイゼンベルグ博士

▼連載「沖繩よ、おまえが」

▼再度状況とは何か  
吉本隆明

▼仏五革命とは  
山西英一

▼現代詩とは  
北川透

## —〈お申し込み方法〉—

定期購読……①申し込み用紙を現金為替(書留)と一緒に本

社宛郵送または持参して下さい。

②振替用紙に下記の期間の購読料を書き込んで送り先明記の上当社振替口座(京都3909)

に振り込んで下さい。

購読料…… 1年分 550円 2年分 1,000円

3年分 1,400円 4年分 1,750円

(別に郵送料 150円をいただきます)

## 創立45周年記念

# 京都大学新聞縮刷版(全6巻)

ついに刊行

詳細については事務所へ

おたずねください。

発行所

京都市左区吉田本町京大構内 京大新聞社

京都大学新聞縮刷版発行委員会 TEL.075 761-2054

事務所

京都市中京区西洞院四条上ル 関西楼井広濟堂

京都支店内京都大学新聞社分室 TEL.075 231-2406

# 暴力論——未知なる革命

片山二郎

序

この論文は世界革命の一環としての日本暴力革命の展望、自然発生性を中軸に先進国日本の国家構造から、抽出しようとするものである。

## I 自然発生性とは何か

### 一、マルクス主義における古くて新しい課題

自然発生性に対する評価は二つに大別することができる。一つは自然発生性を「目的意識性の萌芽である。」「レーニン「何をなすべきか」とし、プロレタリアートの共産主義実現の意識水準は革命的インテリゲンチヤマルクス・エングルス—によって仕上げられ、労働者の先進的部分を通して外部からもたらされるものであって、自然発生性そのものは決してプロレタリア革命斗争を自然成長的に発展転

り出せないということは、外部からの社会主義イデオロギーの注入によってのみ、労働者の本能的直観(自然発生性)を共産主義思想へ方向づけることが可能だということである。

ところで、レーニンがくり返し述べているように「何をなすべきか」は、労働者の自然発生性が労働運動の成長を急速に促し、その結果、外部注入をになうべき革命的組織の主体的力量が低下した時期に書かれたものである。つまり二十世紀初頭のロシア革命前夜の階級情勢の要請に答えられたものであり、この自然発生性をめぐる一連の課題は、これにつづく革命の高揚期において多くの試練に立たされたというべきである。というのも、自然発生性は皮肉にもレーニンの意識活動よりも一歩進んで成長していったからである。労働者の本能的直観は「ソヴィエト」を現実存在せしめた。すなわち一九〇五年のペテルスブルク労働者評議会である。このまぎれもない「ソヴィエト」という現実に対して、当時のレーニンは一度も思想的ないし綱領的に提起したことはなかった。このことは、レーニンの党「ボルシェヴィキおよび自然発生性に対する評価の基準を後世の革命運動に投げかけることになった。

さらに、われわれは自然発生性に対する評価のもう一つの極を見出すことができる。それはフランス五月革命が、まさしく事実として提示したものである。フランス五月革

化させるものではないとする評価である。このレーニンの自然発生性に対する評価から、かの有名な外部注入論が導き出されるのである。「労働者大衆自身が、自らの運動の過程そのものの中に、独自のイデオロギーをつくり出すということが考えられない以上(もちろんこれは労働者がこれをつくりあげる仕事に参加しないということではない。ただ彼らに参加するのは、労働者としてではなく、社会主義の理論家として、つまりブルードンやワイトリングのような人間として参加するのである)問題はただこうでしかありえない、——ブルジョア・イデオロギーか、それとも社会主義的イデオロギーか。そこには中間のものはない(なぜなら、人類はいかなる「第三の」イデオロギーをもつくり出さなかったし、それにまた、だいたい階級矛盾によって引き裂かれている社会、階級外の、超階級的イデオロギーなどは決してありえないからである)。「レーニン、前掲書)つまり、労働者自身、独自のイデオロギーをつく

命の高揚は、レーニンの党への再検討にわれわれを突きつける。つまり、徹底的に自然発生性のプロレタリア革命斗争への自然成長を認めなかったレーニン・テーゼは、フランス五月におけるプロレタリアートのソヴィエト運動の原型の創出によって、再び歴史的きつこうを余儀なくされたのである。

フランス五月革命は自然発生性があたかも、共産主義思想への自然成長性として具体的に展開したのだろうか。六年三月二二日のコーン・バンディを指導者の一人とするナンテール学部占拠斗争として火ぶたを切られた「三二二運動」は、反権威主義、反官僚主義という普遍的気分を契機として占拠—自主管理—自衛—ソヴィエト運動に物質化された。その物質化過程を担ったのは、まさしく労働者のある自然発生性であり、さらにその物質化過程を追跡するならば、「自然発生性とは、プロレタリアートに自身自身の組織形態を練りあげることと可能にする運動である」というマルクス主義の古くて新しい問題点の一方を提出するのである。

## 二、フランス五月革命

仏五月革命は三二二運動を契機として、自然発生的に一千万ゼネストにまで発展転化し、全人民的反権力斗争

### 三、第三世界における「自然発生性」と武装斗争

#### ① 第三世界階級斗争の性格

後進国の民族解放斗争の発展は、ほゞ一九五〇年代を境として質的な変化をとげた。すなわち、反独裁⇨反植民地⇨民主的政府樹立という民族ブルジョア⇨左派路線から、民ブル、大地主の生産手段の占拠⇨奪取を通じた、プロレタリアート、貧農、農業労働者の広汎な斗争・展開への変化である。それはベトナム戦争を基軸とする帝国主義戦後支配体制の危機と、全世界各地の後進国武装解放斗争、米黒人武装斗争の内乱化などに特徴づけられる背景をもって、キューバ革命（一九六〇年）以降ベトナム民族解放斗争、OLAS第一回大会（一九六七年）をへて、民族解放斗争は世界帝国主義打倒の一環として明確な戦略を獲得したことである。この過程は、民ブル・反帝⇨独立路線の展開のなかから、解放斗争をなう運動主体の質的变化、内部の階級対立の深化、党派斗争という一連の運動内部の激動期を現出した。われわれは、この解放斗争の質的变化に、第三世界の階級斗争が提起している戦略的課題と、当面している「武装」の戦術的（思想的）課題をひき出さねばならない。

まず、一九五〇年代の民族解放斗争を規定した戦略とは何であったのか。植民地解放⇨反帝中立⇨民主政権樹立を

を展開した。《その發展転化過程において、すべての党派を、プロ大衆は、乗り越え、また外部注入なしにあの巨大な「自然発生的政治斗争」を闘い取ったのである。》この事実に対する問いかけは重要である。この間は党と大衆の有機的結合に関する問題を提出する。大衆の自然発生性と党の「思想」とは、党⇨大衆の関係を仮に措定するならば、直線的結合は「自然発生性への押扼」となる故に直線的結合は不可能である。ではこの結合は如何にして可能となるか、又その条件は一体何であるのか？それは思想と現実の統一された地点において解決可能である。それはロシア革命に現出したソヴェイトであり、五月のソヴェイト運動の追求である。つまりロシア、フランス五月の両革命過程で「現実」としてのプロ大衆の自然発生性を吸収していたのは党ではなくソヴェイトであったということだ。「思想が現実にせまるだけでは十分でない。現実がみずから思想にせまらなくては。」（マルクス、法哲批判）五月の場合、現実（共産主義）の思想にせまっていたが、（党）の思想が現実の急速な変化によって現実を追い越されたのである。つまり、現実にはせまる思想を把握すべき党が思想をとり逃がしていたということである。即ち、五月のソヴェイト運動（自然発生性の結節環）が前衛諸党派を乗り越えた原因である。この問題はわが国の前衛諸党派が真摯に追求すべき課題である。

かかげた後進国民族ブルジョア⇨の超階級の路線であり、それを支えたスターニリズム⇨非資本主義的發展論がそれである。戦後世界の構造の矛盾は、これら民族解放斗争を「政治的解放」による農村社会⇨モノカルチャー⇨経済の資本主義的再編・近代化の枠内におしとどめ、政治過程においては、軍部⇨地主⇨民ブル官僚体制の強化として結果した。これらの経済・政治・軍事的構造は帝国主義との結合を強め、プロレタリアート、貧農、土地なき農民、失業者と民族⇨買弁ブルジョア⇨、大地主との非和解的対立をもたらし、そしてこのことは、とりもなおさず民ブル左派（インド型・インドネシア型・シエラマエストラ以前のカストロ路線）の幻想の破産であり、民族解放⇨社会主義革命の登場をもたらした。今や、第三世界は貧農・プロレタリアートによる土地改革の徹底化、帝国主義軍隊と軍事カイライ政権との武装解放斗争の徹底的遂行、これを勝利的に戦い抜くための全世界帝国主義打倒⇨プロレタリア世界革命への結合を要請されている。

#### ② ゲリラと「自然発生性」

第三世界の武装解放斗争の前衛的役割りをになっているのはゲリラである。それは、先述のような斗争の質的發展の過程において貧農・プロレタリア政治世界を体現するものであり、いわば、「自然発生性」の大衆的契機を、大衆

武装⇨民兵へと転化する環である。われわれは、ここでゲリラの前衛的役割りについて若干の注意をうながさねばならない。すなわち、第三世界における大衆とゲリラの関係についてである。

まずわれわれは、キューバ革命におけるシエラ・マエストラの「現実」に、「自然発生性」の課題を求めよう。モンカダ兵營襲撃（一九五三年）に決起した一七〇人のカストロ武装部隊は、あきらかに反バチスタ・民ブル左派政治の物質化であった。この党派の個別政治は、襲撃失敗という結果で破産し、後に「七・二六運動」として反独裁⇨中立民主政権樹立の政治綱領に収約された。そこには明確に党派の利害を代表する個別政治が内包されていたにもか、ならず、後のシエラ・マエストラの土地占拠⇨奪取⇨自衛武装（民兵）を現出し、尖鋭な階級斗争へと転化しえた。第三世界における大衆武装⇨民兵⇨赤軍の創出という秘密は、まさに、シエラ・マエストラにあったといふべきである。市民社会の未成熟なキューバにおける帝国主義の諸矛盾は、具体的、物質的、肉体的に顕在化し、そこには、個別政治をも急激に革命的農民・プロレタリアートの武装解放斗争に席捲する条件となったのだ。

シエラ・マエストラにおける土地占拠⇨奪取という階級斗争の尖鋭化は、わずかに二人のグランマ号生残りゲリラによって、地区の貧農、農業労働者、失業者の斗争に結合

しえた結果でもある。シエラ・マエストラの現実、それ故にプロレタリアートか、民ブルかという非和解的斗争として、熾烈な党派斗争へと転化し、前者の勝利的遂行をへて、全キューバ国内革命戦争（一九五九・一・一・サンタ・クララ解放→一九六〇社会主義革命宣言）へと展開したのである。この二重権力状況を大衆武装↓民兵↓民族解放軍↓赤軍へと領導したのは、チェ・ゲバラを中心とするゲリラであった。二重権力状況の現出はゲリラ↓工作者集団の任務を明らかにした。すなわち大衆の「自然発生性」をブルジョアの生産手段↓土地の占拠↓奪取という方向へと導き、さらにそこに現われた非和解的階級対立を大衆武装で自衛する局面への転化である。ゲリラ↓工作者集団の任務はこのように大衆武装↓自衛の獲得へ向かう革命過程での機能的役割りをもたなう。したがってゲリラは思想集団であると同時に機能集団でなければならない。土地占拠↓奪取の永続化は、貧農、土地なき農民、失業者、農業労働者の大衆武装↓自衛によって、保証されねばならない。われわれはこの永久占拠を解放軍の根拠地と化し、国内革命戦争を勝利的に戦いぬくプロレタリア的軍隊の創出を焦眉の課題としている。一九五九年以後の内乱状況におけるゲバラ軍は、まさにそのような要請に応える質をもっていた。

然発生性が現実に近づきつつある「思想」を乗り越えていた時に書かれたという点である。つまり現実が「思想」を乗り越えていたのである。それはレーニンの組織活動の遅れとして現前し、それ故にその自然発生性が「経済主義」的斗争として現前したのである。われわれは留意すべきである。「何をなすべきか」は大衆の怒濤のようなエネルギーが書かせたということ。自然発生性への「扞扼」をドグマチックに受け取るあまり、自然発生性そのものを敵視するのは誤りである。自然発生性はプロレタリア大衆の抑圧に対する無意識的反抗であり、あくまでも革命の原動力である。大衆の自然発生性を吸収することのできぬ前衛党はナンセンスである。「扞扼」を敵視するのは正当であるが、そのあまり自然発生性をも抑えつけるのは党としてはあまりである。ではプロレタリア大衆の自然発生性を革命斗争にまで転化させる回転装置は一体何か。それはソビエトである。ソビエトこそ「思想」と「現実」の一致する環であり、またそうでなければならぬ。一切の自然発生性を吸収し、その方向づけをするもの、それがソビエトであり、全てのプロレタリア大衆の知恵と力を収約し、プロ自身の変化とともに変化する総体である。それは「思想↓現実」の総体の永久発展を保証する場であらねばならず、その発展↓流動を上から指令で阻止しようとするとき、スターリンニズムに転化する。とすればソビエトはいかにして武装

#### 四、日本革命と「自然発生性」

われわれは(一)「自然発生性」とは何か(二)第三世界における「自然発生性」と武装斗争によって、レーニン以来常にマルクス主義の不可避な自然発生性の評価の問題を検討してきた。そこから帰納することのできる事実、「革命の昂揚期には必ず大衆の自然発生性が存在する。」ということであり、その自然発生性が、スト、占拠、武装斗争を保証する最低条件である。つまり、革命はプロレタリア大衆の事業であり、前衛党の事業ではないということである。プロレタリア大衆と前衛党の関係は有機的相互媒介的流動的であればならぬ。プロレタリア大衆の遊離先行した党形式によつてはプロレタリアの革命的エネルギーを革命にまで物質化することはできないし、またそのような党の命令で非有機的にプロ組織を動かすのはスターリン主義である。大衆の自然発生性と前衛党の思想を有機的流動的相互媒介的に結合する場は何か。われわれはそれを、一九〇五年ペテルスブルグ労働者評議会、フランス五月の評議会運動にその可能性を見い出す。それらは共に大衆の自然発生性、本能的直観の創出したものである。もちろんわれわれはレーニンの指摘した「自然発生性への扞扼」を無視するものではない。レーニンの指摘は正当である。しかし留意すべきは、彼の「何をなすべきか」は先に述べた通り、大衆の自

の思想を獲得するのか。それは権力なき党↓工作者集団の役割である。ヴ・ナロードでなく、人民と共にノがその在り方である。具体的には次の章IIで展開する。

① われわれはこれからソビエトの物質的保証たる日本プロレタリアートの自然発生性について検証しなければならぬ。

日本プロレタリア大衆は過去にその強烈な自然発生性を示した。大正期における米騒動や血のメーデー、吹田操車場事件<sup>e</sup>も、である。それ以後の自然発生性はプロレタリア大衆の自然発生性としてではなく、一九六〇年安保のように、市民主義↓議会制民主主義ヨウゴのイデオロギーによる市民のそれとして登場している。つまりブルジョアジーに自然発生性をかすめとられていたのである。社民による労働運動も、社民そのものがブルジョアジーとの平行的副産物であるがゆえに、プロレタリア大衆の自然発生性をねじ曲げる役割しか果たさない。プロレタリア大衆の当為としての本能的直感(自然発生性)までが、なぜ、ブルの方へ吸収されてしまうのか?レーニンの「扞扼」に対する徹底的批判は「扞扼」すれば反革命になるぞという批判であった。レーニンの時代のロシア人民の本能的直感(自然発生性)はそれに「扞扼」した運動(一見革命の実質反革命)を展開可能な程度、革命の原動力たりえた。つまり、

本能的直感はあくまでロシアプロ大衆自身の本能的直感であったということである。ところが日本（先進国）ではプロ大衆の本能的直感そのままでブルイデオロギー——市民という形でねじ曲げられているのである。自然発生性そのものがプロのそれとしてではなく市民のそれとして登場する。この原因は先進国国家（日本）の構造に由来する。

### ② 先進国日本国家の構造

「東方では、国家はすべてであり、市民社会は幼稚でゼラチン状のものであった。ところが西方では、国家と市民社会とのあいだに正確な関係があり、国家が動揺するとすぐに市民社会の頑強な構造が姿をあらわした。国家は一つの前方塹壕でしかなく、その後には、要塞と砲台の頑強な連鎖がひかえた。」（グラムシ選集①新君主論）このグラムシの指摘は先進国国家構造の解明に大きな役割を担っている。われわれはこの指摘から重要な事実を導き出すことができる。つまり、先進国国家＝政治社会＋市民社会であり、ロシア革命（東方）当時の国家は「ゼラチン状態」であった。故にロシアでは市民社会は未形成であり、プロレタリア大衆に対する支配は政治社会の強制力として「暴力装置＝国家（レーニン）」として現前しており、それに対する斗争はレーニン、トロツキーのテーゼ——永久革命——機動戦として展開可能であり、成功したのである。ところが先進国

市民に転化されているということである。われわれはこれを再度逆に転化しなければならない。この市民からプロ大衆への回転装置がまさしく陣地戦としてのソビエト形成であり、そこでは、知的・道徳的へゲを革命的左派が奪還し、それを物質化＝武装斗争として陣地戦——機動戦の有機的結合を達成しなければならない。この点においてのみ、市民としての自然発生性からプロ大衆としての自然発生性に転化できるものである。

### ③ 〈点—線—面〉戦術

佐世保、成田、王子、新宿においてプロ大衆の自然発生性を見い出すことができる。ことわっておかねばならないがわれわれの扱う自然発生性は有形的物質的なもので、物質化以前のものとは扱わない。なぜなら、物質化した自然発生性こそ、先進国家の二重性を打ち破って出てきたものであるからだ。二重性のワク内での自然発生性は、レーニン時代のロシア大衆の自然発生性、革命の原動力以前であり、市民社会＝ブル支配に吸収されるからである。この視点から見れば佐世保、成田、etc.における自然発生性はブルジョアジーの市民社会支配を打ち破り、ブルの政治社会に敵対するものとして登場している。それらは何故市民社会の幻想を打破することができたのか？あるいは、われわれは如何にすれば市民社会を突破し、ブルの政治社会に対決

（西方、含日本）では機動戦による国家の打倒は次の敵即ち、市民社会へゲ（ブルの掌握）を現前せしめ、それは再度敵の「要塞」「砲台」として登場するのである。先進国国家は二重の防壁を所有している。とくにその一つであるブルによる市民社会へゲの掌握はプロレタリアートを市民に転化している根本原因である。つまり、「すべての思想はブルジョアイデオロギーである」「マルクス」となる。ブルジョアジーは日常不断にマスコミエットを通じて市民社会へゲを掌握し、プロレタリアを「市民」として教育しているのである。この先進国第二の壁——市民社会に対する斗争は「陣地戦」である。市民社会の存在は、革命「戦争の『すべて』であった機動戦をたんに『部分的』なものに変えてしまっている。」「グラムシ前掲書」つまり、ロシア型の機動戦のみではだめで、陣地戦——機動戦の有機的結合が必要となる。「これは近代国家にあてはまる問題のたて方であって、後進諸国や植民地にはあてはまらない。（そこでは）もう克服され古くなっている諸型態が、まだ強靱に生き残っているからである。」「グラムシ前掲書」

市民社会の制度的表現は先進諸国に見られる議会制民主主義である。Kマルクスの予言した先進国革命はなぜ成就しないのか？それは状態は革命的であっても革命主体が形成されない戦である。ドイツ革命の敗北を見よ！つまり、革命主体であるプロ大衆が、ブルの市民社会支配によって、

## ●井上 清著 日本近代史の見方 価八九〇円

明治維新、大東亜戦争史観、日本「近代化」論とは何か。いかなる権威にも屈せず、絶えず変革を求める著者の鋭い筆致による論集。

## ●小林一喜著 吉本隆明論 付 小 林 秀 雄 雄 論 淳 論 価七九〇円

吉本と著者との決定的分岐点である初期マルクスに対する理解の相違を発端に、吉本思想の源流の全面的再検討を試みに気鋭の力作。

## ●対話・野間 宏 全体小説への志向 価八〇〇円

野間の長い創作活動を通じて探りあてた全体小説の構造をさらに深め、発展させる注目の対話集。対話者／高橋和巳・大江健三郎他。

## ●山田広行著 論 理 学 言語と思维の本質 価七五〇円

存在の一般法則と言語・思维との関係を探求するなかでヘーゲル論理学に挑み、これを破る画期的な新しい哲学の方法論を展開する。

田畑書店 東京都港区赤坂4-8-19・振替東京103763

可能なのか？それは日本暴力革命への突破口である。

佐世保、王子、成田の諸斗争は日帝のはらむ矛盾の結節環として通底している。そこにおいて人民は、直接的にブルの政治社会と対決せざるを得ない。というのも、市民社会幻想は日帝そのものが先にうち破り、その地点における人民はストレートに日帝政治社会に突き当たる故である。生活を守れ！土地を守れ！という三里塚農民の自然発生性は、当初きわめて「経済主義的」であったが、今では日本における唯一の質の高い永続的反帝斗争として存在している。このプロセスの検討は大衆ソビエト—工作者集団（党）の抽出である。つまり、三里塚農民の自然発生性と工作者（主にブント、中核の各個人）の思想は「現実思想」的に、いわばソビエト（団結小屋で討論）的に結合した結果である。三里塚の現実（共産）思想に近づき（共産主義）思想は三里塚の現実（共産）思想に近づき、この三里塚の現実を思想に近づけたのは皮肉なことに日帝であった。なぜなら、日帝自身が三里塚農民の市民社会幻想を破り、日帝の政治社会との対決においやつたから。

一方新宿における大衆の自然発生性はたぶんフランス五月的である。日常の大衆の反権力主義的ムードの爆発である。そのムードを爆発にまで導いたのは工作者集団（但し、日共—民青は例外）である。新宿の爆発は必然的に一時的でしかありえない。というのも、大衆の自然発生性は

一定の時が経過すると市民社会に組み込まれた市民の自然発生性に転化するからである。つまり国家の二重性の中に組み込まれるからである。三里塚農民には決して市民社会への復帰可能性は存在しない。

成田斗争と新宿斗争を区分するメルクマールは市民社会である。成田においては、ブルの市民社会へ貫徹は不可能であり、新宿では可能である。二・三の例外を除いてブルの市民社会へ貫徹は全土的である。市民からプロの自然発生性への転化は市民社会へゲのブルからプロへの奪還—陣地戦なしには不可能である。日本全土に第二第三の成田を創出するのは陣地戦の勝利以外にありえない。陣地戦—機動戦の具体的プログラムが（点↓線↓面）戦術である。点は資本主義支配の最も弱い環である全国大学、及び成田王子である。全国大学は学生インテリゲンチヤの集合点である故に、ブルの市民社会へゲは比較的容易に見抜くことが出来る。その証拠に全国学園斗争を見よ！大学においてはブルの市民社会支配が弱い故に直接国家と対決可能である。成田、王子は先述の通り、これも対国家斗争である。このような（点）を有機的相互的に結合したものが（線）である。例えば日大・東大共闘の連帯。これを全国的にすれば全国共闘評議会となる。この（線）の幅を広げるのは全学評のソビエト化である。そして（面）とは（線）的結合の質的飛躍である。つまり、各共闘は人民共闘—

ソビエトとして市民社会へゲを打ち破り、陣地戦—機動戦を展開するべきものとして位置付けねばならない。市民社会へゲをブルから奪還した時、それは（面）—全土（点）化となる。つまり、ブルとプロの革命戦争の開始である。自然発生性はどうの如くかつてのロシアプロレタリアートの如く湧き起る筈である。

（注）構改諸派は「陣地戦」の勝利—革命とする機動戦ぬきの革命論であり、市民社会へゲ奪取の自動延長上に政治社会へゲを捉えようとするオプチミストである。

## II 〈点↓線↓面〉戦術—個別斗争から全人民政治斗争へ—

### 一、ソビエトM—全人民政治斗争への回転装置

ソビエトMは（線）から（面）への質的飛躍の重要な役割を果すものである。つまり、（線）—突出部分の有機的相互的結合は、先進国家の市民社会における部分的対政治社会斗争でしかなく、全面的対政治社会斗争（反政治権力斗争）—全土（点）—（日帝のはらむ諸矛盾の全面的集中である故に反帝斗争）化には市民社会総体の左からの解体作用なくしては、（面）に質的飛躍しない。ソビエトMは、つまり、陣地戦であり、その斗争の進展に応じて機動戦もその分だ

け進展する。（線）から（面）—全土（点）への質的飛躍—全人民政治斗争を狙う回転装置—ソビエトMの具体的追求にとりかかろう。

### 二、陣地形成—全人民政治斗争の物質的保証

小ブルインテリゲンチヤの集合体としての大学は、資本の論理の直接的発現の場として存在し、そこにおいて、先進国家の二重性は薄れ、即ち全国学園斗争は現在、鋭く日帝の政治権力に対決し、その全共闘の型態はかつて日本階級斗争史上に現われなかった極めてユニークな発展性を持つものである。全共闘の指示するイメージはソビエトの方向に向っている。ソビエトは前述の通り、反帝斗争—全人民政治斗争への回転装置である。全共闘はソビエトのモデルである。又全共闘そのものをソビエトに転化する可能性は十分存在する。いや、全共闘をソビエトに転化しない限り（線）から（面）—全土（点）化は不可能なのである。全国全共闘評議会—（線）は「共産主義の学校」として全人民と交流し、その過程で大衆の市民からプロレタリアートとしての自然発生性を引き出し、さらに、革命的インテリゲンチヤ—工作者は人民の中へではなく人民と共に、全ての思想と全ての物質力を相互媒介しつつ、（線）の幅を拡大し最後の（面）への質的飛躍を勝ち取らねばならない。そ



のためには直ちに全国全学園に全共闘を創出しなければならぬ。この任務遂行可能な工作者集団は必然的に反帝国主義の旗を高く揚げた集団である。というのも、〈線〉から〈面〉への革命的転化に必要にして十分な条件は反帝国主義の思想だからである。現代過渡期世界における革命の達成はプロレタリア国際主義なくしてはありえないし、われわれの追求する日本暴力革命の突破口としての〈点―線―面〉戦術も、世界革命戦略の一環として位置づけられない。単なる戦術左翼の理論に転落してしまうのである。〈点―線―面〉戦術はあくまでも世界永続革命と結合すべきである。その一点においてのみ共産主義革命に至る手段としての〈点―線―面〉戦術はその目的を果すのである。再び具体的追求にもどる。

### 三、全国学園の占拠―革命根拠地化

全国学園はその性格からして、ブルジョアジーの市民社会へは貫徹しにくく、比較的容易に革命の根拠地になり得る。その萌芽的型態が学園占拠である。その学園占拠から革命根拠地への転化の過程は「反大学」という理論的実践的営為である。「反大学」は陣地形成に不可欠にして、最も重要な「環」である。すなわち、〈線〉から〈面〉への回転装置でありソビエト運動形成の物質的保証である。と

的保证でなければならない。

学園永久占拠―革命根拠地は、日本暴力革命の陣地形成であり、その実践的任務を担うのは「工作者」である。

「工作者」は労働者の自己権力運動としてのソビエトをひき出すための機能集団であり、同時に思想集団である。労働者評議会創出のためには思想的遊撃戦を展開しなければならない。なぜならば、プロレタリア大衆の「自然発生性」と「工作者」の「思想」との結合の環は「工作者」の行動隊という具体的・実践的型態をとる。

### 五、行動隊

行動隊はソビエトの旅団である。すなわち、〈奪還〉された突出部分を、部分として押しとどめるのではなく、まさしく全面展開―市民社会へへの奪取、つまり陣地戦の勝利に導くために、労働者、農民、特殊地域（未解放部落、山谷、釜ヶ崎等）と〈奪還〉された陣地―大学とのコミニケーション回路である。その行動隊の伝達内容は陣地戦―機動戦の有機的結合による対権力武装斗争である。

すれば学園占拠は陣地のブルからの〈奪還〉であり、それは、日本暴力革命は永久革命であるゆえに、永久占拠でなければならない。「反大学」運動は反ブルジョア的知的道徳的へげ形成運動である。「反大学」は「共産主義の学校」となる。大学の革命根拠地化を具体的に担うのは「工作者」であり、「工作者」は大学をソビエトに転化する為に、全ての労働者人民を教育し、「工作者」自身も又、ソビエト総体から学ばねばならない。つまり「思想」⇄「現実」の実体化である。プロ大衆は「共産主義の学校」で市民からプロに転化し、自然発生性は先進国家の二重性を突き破り、「思想」と結合することにより武装蜂起可能となる。

### 四、工作者集団

陣地形成は、「反大学」⇄「共産主義の学校」という社会的・生産的実践でなければならない。学園永久占拠は、この陣地〈奪還〉を勝ちとることによって、新たな階級斗争の局面を現出する。すなわち、ブルジョアジーの市民社会へへの弱体化をとおして、ブルジョア権力総体と、プロレタリア政治世界を担う部隊との対決がそれである。「反大学」は、それ故、全国全共闘評議会―〈線〉が労働者ソビエトを、日本階級斗争の最前線へ登場させるための物質

毛沢東思想を掌握して限りない知恵と力と勇気を生みだそう！

# 月刊 毛沢東思想

\* 70年代への展望 \*

4月号発売中

B5判 定価100円

定期購読一年 1,200円(共)

神田バリケード闘争と70年闘争  
大阪外大バリケード闘争中間総括  
東大一月決戦を全社会的決戦へ

革命と根拠地論 山下 龍三  
安保体制打破のために 小室 剛  
日本の労働組合主義、批判  
労働運動の階級性 鶴岡 衛

発行所 本社 東京都千代田区神田神保町1-27 松屋ビル3階  
TEL (291)9491 振替 東京29295  
月刊毛沢東思想社 関西センター 大阪市北区鶴野町6 TEL (372)1684

# 戦闘的非戦闘集団への憧憬

植村正隆

(一)

世に語られる東大斗争の組織的表現を概括するならば、その斗争が、自らの組織性を意識し得ていたか否かに依らず、一応〈全共闘〉と定式化して表現される。更に〈全共闘〉を担う部隊として新たに登場した〈ノンセクト・ラジカル〉なるものに焦点は絞られている。

東大斗争を〈ノンセクト・ラジカル〉の視座からする時、「東大斗争は、安保斗争・憲法公聴会斗争・大管法斗争という一連の斗争抜きにしては語ることができない。」のであり、そのややリリカルな書き出しは個人の内面的継続性を担保とした〈ノンセクト・ラジカル〉の思考構造形態の環の描写の原型に外ならない。しかし、それだけであるならば、その環の現在の思想状況への埋め込みは何らの抵抗をも受けない筈である。そのパターンは、せいぜいのとこ

ろ、「現在は過去の綜括の上に在る。」と教条的格言で抱擁されるのがオチだからに外ならない。もしくは、良くいつて、現在のⅡ場所的構造と相互補完的対位法に於いて、過程的構造として把握されて終りとなる。

個的内面的継続性を担保とした〈ノンセクト・ラジカル〉の個々の思考形態の〈集合態〉としての〈ノンセクト・ラジカル〉のⅡ思想〉は、個々のな〈想い込み〉を超越して現象するのであり、それは〈ノンセクト・ラジカル〉の存在論的根拠としての個的内面的継続性の基底の構造を要因としている。その要因の歴史的性一般性としての不可逆性が、決定的状況の渦の中で思想構造の論理的不可逆性へと変換している。

そこでは、伝統的思考形態構造と相反する思考パターンを構成しているのであり、異Ⅱ論理構造を〈超越的〉に創出していると考えられる。それは〈セクト〉・〈ノンセク

ト〉を階層的位置付けに於いて問うのではなく、拡がりの内に問うのである。換言すれば、それは、〈綱領的認識〉の区分を捨てて、全Ⅱ個の相即性に立脚する事に外ならず、その相即構造が直接的肯定的論理構造を有つことである。

問いかけそのものが変換されねばならない。その準備作業の遂行過程そのものに於いて、問いの構造を変換するのである。

それは、まず第一に、〈安保斗争の綜括〉に於ける〈綱領的認識〉への転換過程への問いかけであり、〈綱領的認識〉へ結晶化する思想の体系が問いの前に在らねばならない。

第二に、〈理念〉と〈物質〉の安易な媒介的同一性への問いかけであり、それは両者の逸乗の交叉の拒絶に外ならない。第三に、以上の問いかけは安保斗争後の状況の分断化傾向と、その深淵へののめり込みの内在的確定への一側面的照明として登場することを包含している。

安保斗争の綜括を一契機とする〈綱領〉への傾斜、〈綱領的認識〉への想い込みは、〈政治過程論〉から〈革命的政治斗争とは何か〉へと進行する傾向性の集約作業の内にリーフされざるを得ない。それ故、先に述べた思考型態構造の歴史的形過程の考察は、同時に、逆構造の形過程をネガティブに表象する素材として、我々の前に、位相解析を要請されるものとしてある。

安保斗争に象徴される学生運動は、「平和と民主主義」

という〈理念〉を掲げた波動として推し進められた。〈理念〉と〈物質〉の矛盾的自己同一性の把握に立脚した実体化傾向はその矛盾的構造の媒介項を〈組織〉に設定し〈革命綱領〉として、物質の理念化と、理念の物質化という相互作用を仲介する。その観念的側面を〈追体験する時〉小ブルジョア意識から、プロレタリア意識への脱却」として現象するのである。

ところで一方、我々は、そうした〈理念〉と〈物質〉の相互的移行形態の把握と雁行するものとして、もしくは絶対否定するものとして、〈理念〉の〈理念〉への飛躍を、つまり〈理念の永久運動〉を語ることは不可能であるだろうか？ 〈理念〉は永久的運動を、その自己の〈無性生殖〉に於いて存続させる自体的存在として構想し得ないだろうか？

それは「より大きい幻想性」の現実化を目指す斗いは、より大きく、希薄な〈理念〉故に、より〈物質的〉である所以はどこにあったのかという問いかけに外ならない。

これらの問いかけが、安保斗争と東大斗争を結ぶものである以上、それは、断絶と連続の交錯の現象の様式とその統一を顕現すると考えられる。

(二)

ひとりの人間が、イデオログとして存在するとともに、行動者として存在する時、一見あり得ないかのとき空際が逆説的に存在するように思える。本来的にイデオログが行為に、行為がイデオログに相互顕現するべき構造の構成体としての思想体系が持つ「不換性」は、矛盾的自己同一性の具象的「構造」を、絶対的媒介性としての組織に投射する。組織に於ける機能性・機動性は「不換性」のネガティブな、それ故、体制的なものとして存在せざるを得ないのであり、その「不換性」と「順応性」が、同平面上の単一な思考一系として相互補完する。それは同時に「体制」・「反体制」のガウス函数的直結的連結を惹起する。逆説的な空隙が具現する対象的存在としての「組織」が、その対象を捨象する時、「全ての非対象的存在は、非存在である」との命題が妥当する。「組織」は自己が「有」であるが故に、自らの対象性を「無」に規定されねばならぬ以上、それは避けることの出来ない宿命としてある。

### (三)

現存する階級斗争の綜括に胎盤を持つ「政治過程論」の、出生証明を放棄しての、觀念形態への定着は交錯する二形式要因が織りなす現象的構成を持つ「政治過程論」の精靈の放棄に外ならない。

程は絶えざる実存化として自己破壊行程の地層的構造の階段を上昇しなければならないのであり、もし、その現実的基体としての存在論を認識論に解消し、存在の化石化へと結晶するならば、「総体性」の追求は、非存在の実存化という「言語構造」の陥穽の虜因たるの外ない筈である。

単系的構造を有つ思想が、自己の前提の忘却の彼岸に自己を想定することの「捨れ」の増大化傾向への歯止めは、依然、この段階に於いては為されてはいる。「ブンドの崩壊過程で、我々が逆に安保斗争の綜括の実験的過程に入ったことは重要であり」、又それは「大衆的政治斗争のエネルギーの再認」に外ならなかったが故に「綱領的認識」と「エネルギー本質論」との相克過程の内化を、「認識連合—組織」として觀念し、なお存在妥当性を失することはない。

歴史的時点に於ける判断の正しさが確定されることも、その判断の自体的正当性を担保するものではない。判断「Utilité」が、根源的に分割され、一方に於ける「不立文字」と他方に於ける「整合性」の離反過程が進行してゆく時、そこに、最早「主張」されるべきなものもない。「大戦術・小戦術論」の一元論的構造が持ち得た包摂性が分解する時点であり、一方に於いて「大衆運動主義」であり、他方に於ける「生産力思想」への傾斜なのである。そして、分解が必然的に呼び出すものは、「主体性」又は「プロレタリア意識」の標榜であり、又それに対する「無」の包摂

「大戦術・小戦術論」の一元的構造に含まれる存在論と認識論の錯綜を、無媒介的に「革命的高揚」への要請として複写すること、つまり、媒介的無媒介性によって「綱領的発想へ昇華させることは、元々、大戦術・小戦術論」が、その一元論的構造に内在させた存在論と認識論の「矛盾的统一」と、現実的基体の切り捨ての結果への過程的表象に外ならない。スターリニズムへの傾斜傾向が、全て、究極的に、自己の基体の切り捨てと、自己矛盾の二元論的「整理整頓主義」にあることと、形式要因的構成に於いて異なるところのないものと墮する。すべての「党」的集中は、認識論的基礎への下降的接近を、つまり、認識論の存在論化を怠り、「綱領的認識」の確定化へ急行する。

それは、「党」が、「大衆の諸要求が革命過程の総体と有機的に結びついた意識的活動を行う」という「ア・プリーオリ」化傾向への滑降で、その自らの姿を明示し始める。総体としての過程の「超越的」存在化は、総体性の形而上学的変形に外ならないのであり、総体が自体存在として在るのは、存在が存在することをやめて実存する時に外ならない以上総体性の形而下的存在としての定着は総体性が総体性として絶えず自己否定過程を繰り返しつつける限りに於いてしかない。新たな「等質性」の創出と新しき「価値体系」の占取の表現的存在としての「綱領」||過程的認識論の「存在—化—存在」も、その「総体性」の追求||獲得過

性と定型化への道に外ならない。

その乗り切りの方向性は、多集合意識の超越への飛躍の可能性と組織発条論の確定と考えられる。

### (四)

「政治過程論」の今一つの形式は、更に別な、新しい道を我々の前に提示するかの様に思われる。

顕在するものを解体し、潜在するものを結晶化しなければならぬ創造者として、学生運動を担うものを、その斗争形態の内に模索する時、必然的に「精神の高揚」体験が存在する。支えるものの「不定型性」と支えられるものの「定型性」の連繫の重層的内実こそが、そこで語られなければならない。

「議会の幻想性に対して『平和と民主主義』というより大きい幻想性そのものをかかげての全国的政治斗争の展開」は、その発想の淵源を、国家権力の「共通の幻想性」構造を軸とした実体的機能論的把握に置く構成であるが故に、その展開過程||政治過程を国家権力の「幻想性のバクロー」過程として把握する構造を持つ。

「幻想性」と「理念」の乖離は、さほどの距離を展げるものではない。「理念」が「文化科学」の意味付与による神聖化傾向の極核として一般的承認を根拠とすることと、

〈幻想性〉が、一見慘澹たる下降行程を自己に担うこととの間に不整合的な歪みは存在しない。両者の平行移動的合致の保障は、その担う価値の正負的把握、即ち、主客関係の相対性・対位法の相異に起因する。とすれば、〈政治過程論〉が提起する問いかけの複写は、我々に〈理念〉間抗争の観念構造の解明を要請すると考えられる。

その時、問いかけは、前に述べたように、〈より大きい〉為に、より〈物質的規定性〉を喪失する〈理念〉が、双曲線の位相を軌いてより〈物質化〉する逆説的結果への過程への接近としてある。

〈関係の絶対性〉の承認は、それ自体的に存在と意識の対応を、前者の一義的優位性に誘う担保を、存在と意識の〈関係の絶対性〉に求めなければならない。しかし、存在と意識の〈関係の絶対性〉の確定は又、前者の一義的優位性を自らの結論とする循環の悪無限を絶ち切る環の設定を、自己の内部的発条に頼ることが出来ない。〈絶対性〉を移行させる〈相対性〉は、たとえ、それを〈関係〉内部に包含するとしても、その基底の媒介性へ環元することなくしては、〈関係の絶対性〉を存在と意識の立体交叉に於いて把握することは不可能である。

存在から意識へのはたらきかけを基底とする方向を束ねてX系とし、その逆をY系とする時、XとYが本質的に可逆的であることの根拠は、両系の喰い込みの〈場〉に設定

的構成過程とも言うべきもので、内へ進行する構成的思考の内へ外界の投射図の相即的相似観念を基軸変換する虚数的構造なのであり、反・世界への導入路の形成である。その虚数的構造へ致る仮構的構成過程自体が〈理念〉の生命に於ける自体的解明として発生論的形式性と下降的存在論を持たなければならない。その反・世界の構築は〈事実〉が瞬時にして消失する二元的方向に対する反措定であり、その世界を、伝統的思考の縦深性に対して横断性として把握してゆく方向性が獲得されねばならないと考えられる。その瞬時にして消失する〈事実〉の拡散方位を示す二つのベクトルの根源的同一性の確証が、現在の語られる言葉であり、本来的には、その存在論でなければならない。

## (六)

全共闘運動の展開が「大学」という又は「学問」という〈理念〉を掲げて進行する時、その組織形態は自己の姿を明確にしてゆく。しかし、それは〈理念の永久運動〉として自己を組織するのである。それは、全共闘に於ける組織の〈生態学的解明〉も、それを実態論的に解しようとする限り、「組織的構造といえるような組織的構造をもたない組織。」・「指導機関なき組織」という形容矛盾の言語でもってしか表現し得なくなるのであり、その翻訳不可能

されるのであり、それをして〈事実〉と呼ぶならば、問題は根拠を避ける相互移行に於ける思想硬着であるが、同時に、それを〈場〉としての〈事実〉が提供する基底的媒介性が、不等置的等置であり、不可逆的可逆である故の異構造を、片面的に外化したものとして二相的に切取しなければならぬ。その二相性の片面的外化こそが〈絶対性〉と〈相対性〉の対位法の形骸化として現象する。

美しき誤解としての〈理念〉は、その〈場〉に〈事実〉の矛盾の統一性が生み出す歴史の継子であり、その自己―内―力の無力であるが故の転換を双曲線の位相に於いて為す。〈理念〉の有つ破壊的暴力の強力は、自己の出生への嚙嗟の慟哭に外ならない。〈理念〉の〈物質化〉は直接的であり、それ故に〈非物質的〉に行われる。それは〈理念〉が生存する風土の風化をもたらす自己抹消へ致るまで進行するのであり、共同体の幻想解体へ結果するの外ない。

## (五)

歴史の継子としての〈理念〉が、自己の内実を展開しようとする時、必然的に到達する〈無への解消〉は実体的論的分析行程の〈理念〉との離反に起因するものであり、〈理念〉の〈物質化〉が〈非物質的〉である所以である。その〈非物質的過程〉は、実体的論的分析過程に対応して、仮構

な対話〉は明白に方位性の対称作用の必須化を要請していと考えると考えられる。〈組織〉の機能及び機構の集約的表現としての〈決定〉は、「拘束力なき決定」という同様の矛盾的表現として表われざるを得ない。端的に「理念」から具体的行動にいたる・「全共闘」全体の意志の決定メカニズム」は次の様に語られている。「今仮りに、「ラディカル」さを横軸とした・人の度数分布図が、学部学生から助手に至る階層別に画けるとしよう。ところがこの「度数分布図」は静止的なものではなく、オシログラフの如く脈動しているのである。そして、階層別の脈動せる「度数分布図」合成図がつくられ、その「モード」から左右に一定の幅をもった範囲で「全共闘」の意志がいわば瞬間々に決定されているのである。」この巧妙な比喻すらも、それが〈生態学的解明〉に停る限り、「理念から具体的な行動」に至る〈ダイナミズム〉を内部的に明らかにし得ているとはいえない。「全共闘」が組織を持つとすれば、それは、理念の結合形態に於いてであり、それは、個々人そのものが「全共闘」なのであり「全共闘」が個々人と必要十分であるという関係に立ちうる〈組織〉であるが故に外ならない。それは、「全共闘」が、「彼を含むところの集団」と感じられるところにあるのではない。すなわち、「彼が、含むところの集団」であり又「彼を含むところの集団」でなければならぬということである。それは、〈既成の組織観は

既成の組織観」という図式が成立し得る時点への（弁証的発展）であらねばならない。

それを為し得る可能性を秘めた全共闘運動こそが、（政治過程論）以降、二元論化の止揚への運動であり、なおかつ、組織綱領の構造を一挙に覆す可能性を有するのである。

更に、その全共闘運動は自らの出生を、安保以降の断絶に負うのであり、いまだ、その深淵よりの脱却は充分に為されていない。それは言い難い現在、我々の追求は、より深みへ陥ち込むことと、よい遠く走り去ることを置いてはならない。その時、その全ての姿が現われる時こそ、ひとりの人間がイデオログとして存在するとともに、行動者として存在する時、生じるかの如き空隙の消滅する時に外ならない。

おわりに

始めの想い込みでは、(三)・(四)からの多方向的追求によつて、(五)を豊富化して、それが、(二)への解明となつて、(六)へ続く予定であった。

が、予定は、予定のまま生涯を終らざるを得ず、更に今一度の接近を試みてみたいと考えている。

なお、〈政治過程論〉、〈革命的政治斗争とは何か〉は『全世界を獲得する為に』よりの引用である。

（「非人の群れ」同人）

## ● 変革のための総合誌 情 況 臨時増刊 叛乱は拡大する

近代合理主義を告発する 山本義隆 対談 海老坂武

学生叛乱を総叛乱へ 秋田明大 対談 福田善之

京大闘争・批判大学・反大学

鼎談 小俣昌道・滝田修・清水多吉

東大闘争―運動の論理

塩川 喜信

医局社会における叛乱

金村 元

東大全共闘―この奇妙なる生態系

村尾 行一

反大学の思想

福富節男・清宮 誠

日大における革命と反革命

鳥越 敏朗

学園の再生を求めて

池田浩士・師岡佑行・松下昇

5月号

● 4月20日 変革論と未来論の交錯  
発売！ 佐々木光・沖繩論 谷川健一

京大を殺したのは

だあれ

「私だわ」って C斗委が言った

「私のゲバ棒と火炎ビンでもって

京大を殺したの」

喪主になるのは

だあれ

「私だわ」って 民青が言った

「なくしたヘゲモニーをなげくのよ

喪主には私がなりましたよ」

死ぬのを見たのは

だあれ

「私だわ」って 一般学生が言った

「日和見のお目々で

私は死ぬのを見ました」——僧止——



たどりつくところがあるなら——

それは破壊

到りつくところがあるなら——

それは破壊

貫き得るものがあるなら——

それは破壊

創り得るものがあるなら——

それも破壊

# 叛乱は混乱する!!

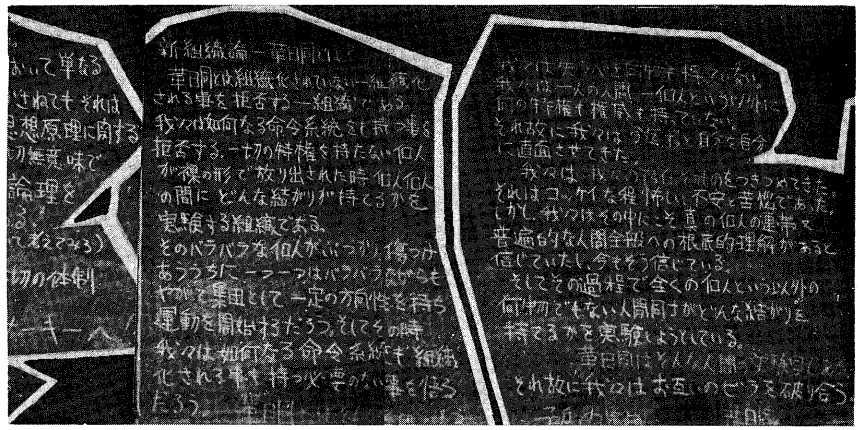
本学は、その開学以来、一貫して学問の自由と、大学自治を標榜し、その幻想を喰い潰すことにより広く学界と国家社会に貢献してきた。さらに終戦後は社会の機構変化の嵐に対応すること難く、旧態を墨守しその後の形式民主主義の導入、産学協同の路線の侵入にただひたすらウロタエ、醜態を周囲にこれ示すのみであった。また本年一月以来の学生諸君の大学変革の要求に対しては、私はじめ当局として見通しなき官僚的、政治的判断にもとづき、行動するばかりであった。即ち「代々木」食堂直送の「五者ドンブリ」は、その後の私に食中毒症を慢性的に引き起させるとともに民主的脳鈍化症、理性拒絶反応的胃ガンを併発させた。現在までに機動隊による金属的立体手術、全学共闘会議による革命的脳外科手術を施法するも、その経過はかばかしいものとはいえない。今や、本学の眼目たる「超越的理性」および「知的誠実性」はここに死んだと認めざるをえない。本学当局者である私は、かかる状態にある京都帝国大学に、新入生を迎えることはまさ

に国民大衆に対する裏切りであることを頻死の手負いの床の中で自負するにいたった。よって新入生諸君にあつては、進んで教養部バリケード内或いは時計台を占拠することにより真の学問に対する姿勢を学び自己の変革に努められたい。  
一九六九年四月凶日  
京都帝国大学総長 奥田車

自由の敵から、自由をうばえ  
中大SSL独立戦闘団

所謂、良識派と呼ばれる者  
社会の嫡子となりて権力者に溺愛されることよりも  
暴力を自己に忠実であることからして  
非良識な諸を起し  
社会の異端者となりて  
権力者に弾圧せられよ  
帝国主義を民主化すると共産主義になる

宮頭(安田)  
京都帝国主義大学を民主化すると立命館大学になる  
京大五者連絡協議会



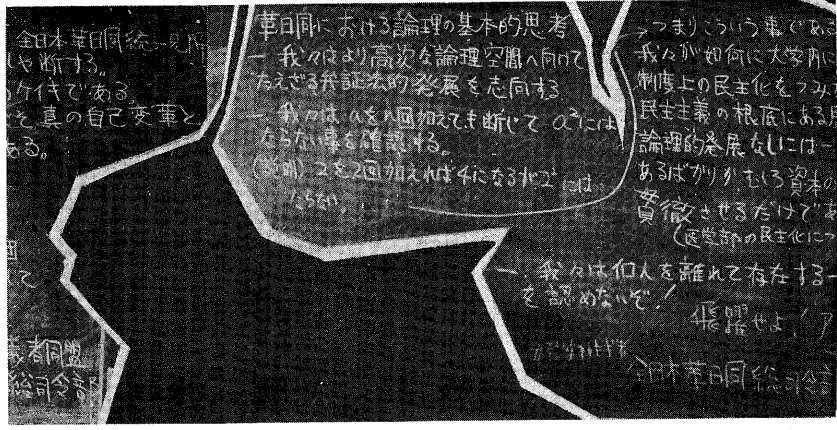
生まれは寮と青医連  
学生部封鎖で旗上げて  
反戦連合JASPET  
寄り合い世帯の全共闘  
全共闘、全共闘  
でつちあげ全共闘  
決意の中核  
センスのブント  
俺たちや趣味のC斗委  
左に流れる共労党  
鉄の団結解放派  
Zもいさまし□○派  
群小諸党派肩よせあつて  
ノンポリ・ラディカルひきこんで  
つくりあげたる全共斗  
不決意の中核  
ナンセンスのブント  
俺たちや悪趣味のC斗委  
右に左に流れる共労党  
砂鉄の団結解放派  
ZZZもいさまし□○派  
群小諸党派もたれあい  
ノンポリ・アンラディカルひきこんで  
でつちあげたる全共斗

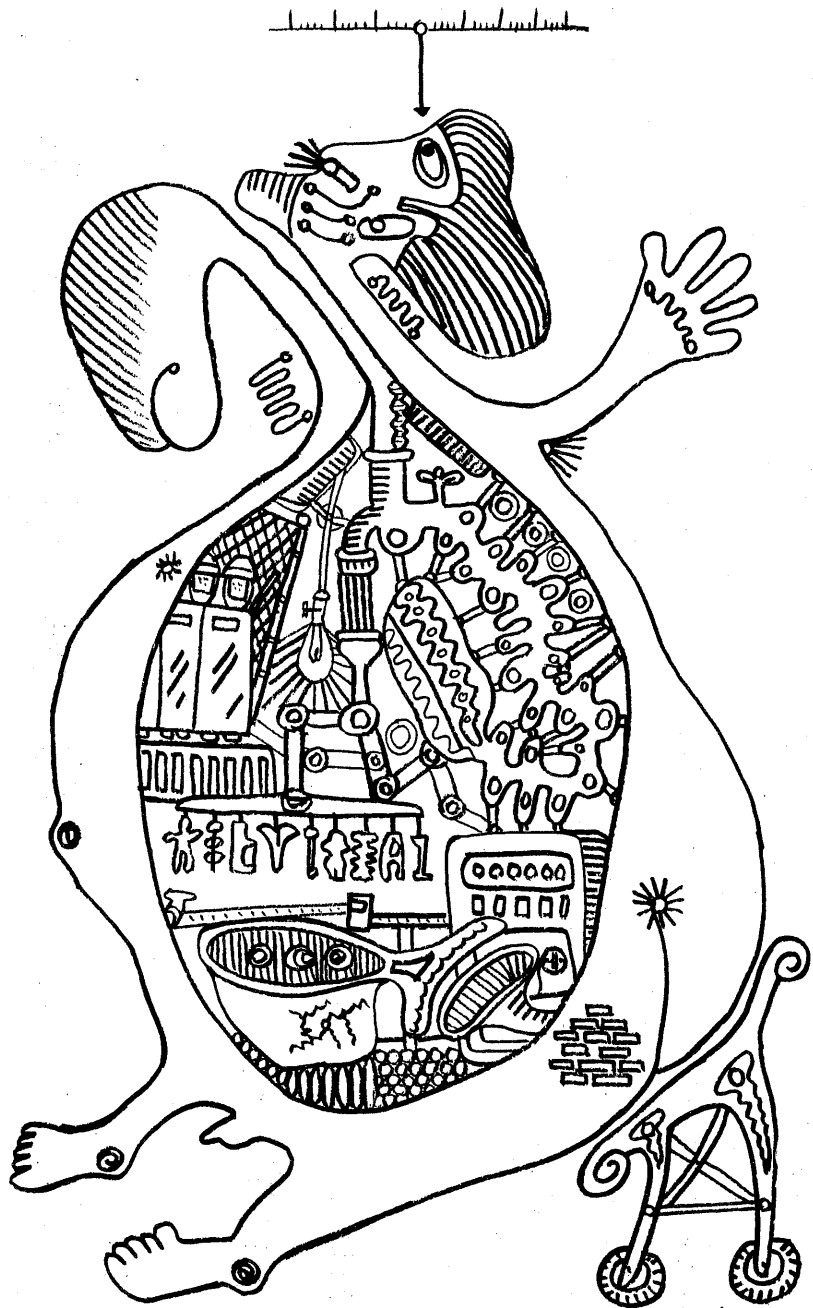
暴力を否定するものが  
最も暴力的である

あこがれのブント  
僕の好きなブントは  
毎日一度ゲバルトしなくちゃねむれない  
赤坂目付でアメ大突入  
青山通りで防衛庁  
それが僕のゆめなのさ  
ブントブントブント  
あこがれのブント

学友諸君!  
プロメテウスの火を消すな  
ペルセウスの勇姿が  
アララット山上に輝くとき  
それは世界解放の朝  
世界革命の朝  
そこで流れるプロメテウスの涙こそ  
全人類の歓喜の涙なのだ、

一人でいるとき 過去を思い  
二人でいるとき 今日を思い  
C斗にいるとき 明日の革命を思う



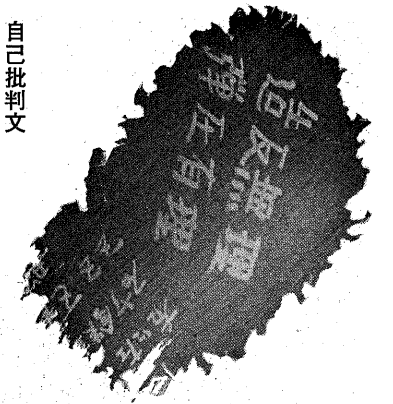


ほそかわひろむ

神聖なる神は死なず  
我々の戦いと人間の中に生きている  
神は我々に言うであろう  
万国のプロレタリアは、資本主義の  
悪なき非神聖の非正義性の社会を倒せ  
そして真なる人間と真なる神を創造し  
構築せよ  
それが私につかえることのできる背教  
者、信教者なのだ!!  
神を信じる者よ、真の十字架の下へ結集  
し、  
幸福と平和と人間が住める社会、真なる  
社会を  
戦いの中で作れ、創造拡大せよ!!  
そうしなければ、真なる神を見ることさ  
えも、



信じることさえも偽造なのだ。神を汚す  
寄生虫なのだ。十字架に触れることも許  
さない!  
それが神を信じる者の使命なのだ!!  
戦いを、神聖なる戦いを信じる者よ!!  
人々は苦しんでいる、助けるのだ!!  
十字架を守れ、偽造者から!!  
神は判決する、勝利を、長い長い戦いの  
旅が  
そして、死という幻想を乗りこえたとき、  
口ずさみが大きな声で  
勝利だ、人間だ、平和だと!!  
(神の使者、イエス・キリストより  
同志諸君へ)



自己批判文  
小生は経験の浅さから、3.3斗争におい  
てバクられ、検事に知らず知らずしゃべ  
ってしまった。(糸口となる様なもの)  
釈放後、しゃべりすぎた事を知らされた  
わけでありませう。  
以上の事を京大の斗争学友諸君に対し、  
自己批判すると共に、帰京後、ASPA  
C、佐藤訪米、七〇年安保斗争、七〇年  
以後階級斗争等に対して、斗争労働者学  
友諸君と共に、最後まで斗争事を約束し  
ます。  
S、四四・三・七 東海大BUND  
二七AO一二(S四四BUND)の個人  
コード)

# 知識人犯罪者論

小針 規宏

京大教養部助教授

何が善であり、何が悪であるかの判定は大変にむずかしい、時の権力や伝統や文化の在り方に関係して決まるものだから、一概には言えない。とすると、犯罪および犯罪者の定義も、きわめて曖昧になってしまう、この小文の論旨も成り立たなくなってしまう。が、ともかく無批判に知識が価値とされ、知識人が高級な人種であるかのように錯覚されている、現代の幻想に一矢をむくいようと、あえてシヨッキングな表題を掲げてみたまでだ。

この小文は、朝日ジャーナル3月23日号に掲げた、「コンピュータピア解体宣言」のいわば続編として書くので、そ

の手に独占され、一般大衆は、知らしむべからずよろしむべし、の政策によって支配されていたわけだ。近代になっても、戦時中の「大本営発表」を思い起せば、支配者に取って情報の隠蔽がどれほど、支配に都合かがわかるだろう。今でも、教授会は非公開の原則ではないか！

マルクスは、土地や資本の独占を否定する所から、その思想を出発させた。が、知識や情報の独占にまでは触れていない。現時点での大学紛争、スチューデント・パワーは、まさにそのことが問われているのだ、という認識に立つとき、初めてその全貌が明らかになる。教える者と教えられる者というのは、この情報の流れの落差の相異であり、知識人とは、この情報のブルジョアジーなのだ。それも単に量的に大量の情報を保有し支配しているというのではなく、情報源として、ヴォルテジの高い位置に居る、という点で犯罪的なのだ。

自己顕示欲という本能について考えてみよう。情報の流れのダイバージェンスが正である点を情報源と呼ぶことにすれば、自己顕示欲とは、自分が正の立場になりたいと欲する本能だと言える。視聴者参加のテレビ番組などは、視聴者の自己顕示欲を満足させるものとして存在するし、投書マニアなども、これの歪められた現れだと解釈できる。対等な対話ではなく、情報の一方交通として、少数の限られた人間だけが、この本能の満足を得られるのを悪とすれ

れをせひ参照していただきたい。その中で、第四次産業として、文化・芸能・情報を扱う部分をとり上げ、これが現代の主要な価値の重心となっていること、マルクスの経済学は、第三次産業（商品や貨幣の流通産業）までしか扱っていないから、現代に適合しないのではないか、という論旨を述べた。知識というのは、まさにこの第四次産業における流通財、商品、と規定してよいのではないだろうか。

古くから「和は力なり」と言われて来たし、白土三平のマンガではないが、封建時代には、百姓は字を学ぶことさえ、禁じられていただろう。つまり、情報は完全に権力者

ば、現在の教育体系は、まさに悪そのものなのだ。何百人もの教え子をもつ教師というのは、何十人もの女性に子を産ませて君臨しているアラビアのサルタンに等しい。まさにセイシヨク者なのだ。その認識なしに、学生から「教育権」を指摘されたとき「いや、われ／＼は義務だと思っています。」と答える教師の、マンガ加減。

こんな教育体系は、まさに根底から、こっぴどみじんに粉砕されて、然るべきだろう。そして大学は、全人民の手に解放された、文化的社交場として、大きな図書館と、多くの小談話室と、いくつかの大演説会場とから成り、お祭り気分でもが出入りできる場所として、再生されねばならない。オペラを見たからといって、何の資格もつかないように、大学へ行ったからといって、資格などつくべきではない。そしてその時にこそ、学歴偏重の風潮も、その根拠を失うだろう。

ついでながら言っておこう。グーテンベルグが印刷機を発明したために、自己顕示の寡占が可能になったのだ。すべての印刷工場が襲撃され、現代文明が根底からくつがえされ、レヴィ・ストロースの言う《冷い社会》に逆行してゆくまで、斗争はつゞくのではないだろうか。そこで、初めてことばが、本来の意味での対話として、復権するまで……。そして、森や月や動物たちが、ことばを持ち始めるまで……。



# 戦後知性とルソー『学問芸術論』

阪上 孝

(京大人文研助手)

「自分の学問が平和のためのものか、戦争につながるものか、政府の役にたつものか、独占企業のためのものか、あるいは多数の貧困所帯の福祉につながるものか、専門の研究者はこの点をとくと考えて見る必要がある」として、研究者にとって「フィロソフィー」が不可欠だと新入生に説教した①大河内一男は、その後の行為自体によって、かれの「フィロソフィー」がいかなるものかを明瞭に示してくれた。

かつての労農派の総師であり、社会党の御意見番的存在である大内兵衛は、「学問などまったく分らぬ連中」が大衆を占拠していることを痛憤し、この連中を排除してくれた機動隊に「菓子折り」でも持ってお札にゆきたい、と述べた。②

そして戦後民主主義運動の代表的理論家であった丸山真

男は、東大斗争の過程においては終始沈黙を守り、自分の研究室が封鎖されるに及んで、「ナチスも軍部もしなかつた暴拳」と叫んだ。③

こうした「進歩的」教授、研究者の発言が意味するものは何か。日本の代表的な社会学者として尊敬されてきた教授、研究者たち——講座派マルクス主義者、労農派マルクス主義者、市民民主主義者を問わず——が、社会学者としての実を一向に示さず、国家権力への迎合、身売りに狂奔したことは何を示しているのか。しかもこゝで問題にせねばならないのは、個々の研究者の個人的資質ではなくて、戦後日本の社会科学を担ってきた「進歩的」知性そのものなのである。かれらが示した、現代の大学斗争の意味に対する理解能力の欠如、その基盤である「学問の自由と中立性」のもつ無批判性、より一般的にいえば、戦後知性

の構造を説明すること、これが課題であり、その説明によってこそ新たな知性の誕生が準備される。

## 二、

バリケード・スト、占拠は、二つのまったく異なる時間と空間とを対質させた。

一方には、バリケードの外の、行動や展開をひきおこす内的な必然性を欠いた、何物も生みださずにたゞ過ぎ去ってゆく時間と秩序。ここでは、学問および知性の本質にかゝる問題はすべて制度の問題にすりかえられ、発展の原動力たる矛盾と対立は、姿を現わさない。ここでは、あらゆる問題設定の環は、「正常化」であり、その論理の筋道は「收拾」である。

こうした問題設定を支える知性の前提とはいえば、生活からあらかじめ分離されたものとして知性を位置づけ、かく措定された知性の自己展開こそが何ものにもまして尊重されるべきものだ、ということである。これを政治イデオロギー的に表現すれば、この知性の自足性、自立的展開を保障する、ミクロ・コスモスとしての「大学の自治」、「学問の自由」に帰着する。また对学生向きには、教えるものと教えられるものとの位置の固定化を前提として、「いかなる暴力をも許さない理性の府」という表現をとる。大学

教授、研究者の一見反政府的な、反体制的な発言も、こうした前提を拠り所としていること、自明である。

ところでこうした立脚点の上に立つ知性は、二重の意味で狭隘であり、一面的である。第一に、一見非合理として現象しながらも、合理の根拠自体を問いたゞ、すうえで不可欠の契機を、この知性は欠いている。自己自身を対象とし、その自立性自体が知的営為の疎外態にほかならぬことを洞察する能力を欠いている。それゆえに第二に、こうした疎外態としての知性の一面性を告発し、その存立基盤と根拠を自からに問うことを強制する運動、外的な契機にたいしては、徹底した無理解を示すのである。誤解を恐れずにいえば、戦後日本の社会科学を担ってきた知性は、こうした契機を意識的または無意識的に排除することによって成立しえたのである。

かくしてこのような知性、意識は、現実具体的な認識に到達することはできない。一般に意識は、自己自身の展開のみによつては、自からの外に出て、現実——意識の外にある。意識とはまったく異質な存在——に到達することはできないのであるが、この知性の場合には特にそうである。何故なら、自立的な学問という閉鎖領域に安住することに慣れた、この知性には、自己とは異質な存在である、現実の働きかけに対応する能力が欠如しているからである。現実、生活との生きた交通関係を喪失したこの知性は、現

実の要請に應える力、生活の変革を先取りする能力をもたない。

このような知性ではあっても、戦争の恐怖と弾圧の記憶が意識を支配していた時期には、有効性をもちえた。というのも、この知性の旗印たる「平和と民主主義」のイデオロギーが、そしてその護符としての「学問の自由」のイデオロギーが、その空洞化を内部で進行させながらも、有効に機能しえたからである。

こうした知性、そしてそれが支配する時間と秩序に真正面から敵対し、その虚偽性を鮮やかに暴露したのが、バリケードの内なる時間と秩序であった。バリケード、占拠は、知性がラディカルであるとするれば安住することのできぬ障壁を自からに課し、城内平和とそこへの安住をひたすら願う、虚偽の知性に対して、まったく異質な知性のあり方を体現することによって、対抗したのであった。この視点から見れば、占拠戦術は、街頭での戦闘的デモンストレーションの大学内への単なる適用、あるいは単なる戦術的エスカレーションとしてではなくて、虚偽のイデオロギーに立脚する戦後知性に対する武器による批判と理解されねばならない。現在進行している大学斗争は、知性のあり方そのものに対する挑戦である。それは、おそらく長期にわたるであろう文化革命の開始を告げるものである。

学問の危機——それは支配的思想、支配的学問の危機で

自然人は粗野ではあったが、自由にふるまい、自然な感情を身につけていた。「偽りの画一さ」<sup>⑤</sup>に毒されている今日の文化人は、上品ではあるが、自己のありのままの姿を見せようとはしない。「かれらには、自分もわからず、語りかける相手もわからない。生命のない影絵のような人間がいるだけだ。自由の感情と自然な態度に支えられた人間関係は滅び、画一的で冷やかかな人間関係がそれにとって代る。われわれの学問と芸術が完成に近づくにつれて、われわれの魂は腐敗したのです」<sup>⑥</sup>

学問、芸術が、反人間的な役割を担っているのは何故か。それは、学問、芸術が社会的不平等に根ざしており、生活から乖離し、生活に敵対しているからである。「悪の第一の源は不平等であり、不平等から富が生じた。……富から奢侈と無為とが生まれ、奢侈から美術が生じ、無為から学問が生じた」<sup>⑦</sup>。それゆえ学問、芸術は、社会的不平等の別の表現であり、生活の疎外態なのである。その意味で学問、芸術の発展は、社会的不平等と疎外の発展にほかならない。しかも問題なのは、学問芸術の担い手たる学者、芸術家が退廃することだけにあるのではない。むしろ最も人間らしい人間である貧民が、学問芸術を高貴なものと思ひこみ、それを渴望して、人間としてなさねばならぬ義務（農業労働と祖国への献身）を忘れ去ることこそが、問題である。生活を失い、それと敵対する学問芸術が生み出すのは、虚

ある。社会革命に先駆けて、文化の根本的批判が開始され、既存の文化、学問の徹底的否定を通じて、革命的潮流を結集し、社会革命へと結実する——こうした過程は、歴史のなかで見られるところである。

フランス革命に先立つこと約四〇年、ルソーは、当時のフランス文化の徹底的な批判を展開した。かれは当時のイデオロギー状況に対する根底的対決を通じて、既存の学問芸術の反人間的性格をあばき立て、社会革命を先取りしたのであった。

### 三、

「この土地の人に理解されないで、わたしは異邦人である」。ルソーは、「学問芸術論」の扉にオヴィディウスのこの言葉を掲げた。かれは、この書物が徹底的な告発の書であり、この告発を通じて既存の思想の枠組を踏み越えてしまったことを自覚したからこそ、こう書いたのである。

かれはいう。「学問、文学、芸術は、政府や法律ほど専制的ではありませんが、おそらくいっそう強力に、人間を縛っている鉄鎖を花環でかざり、人生の目的と思われる人間の生まれながらの自由の感情をおしこらし、人間に隷従状態を好ませるようにし、いわゆる文化人を作りあげました」<sup>④</sup>

飾と無為だけである。学問の有用性は、この事態を隠蔽する虚偽のイデオロギーにほかならない。

支配的になりつつあった進歩主義とそれを支える学問とを根底から告発したとき、ルソーは社会の外にはみだし、異邦人になった。進歩信仰の核心は、物質文化の発展が、自動的に人間の内面の展開と幸福とをもたらすということであった。ルソーはこの命題を否定する。かれによれば、文化の外面的進歩が、人間の内なる進歩を生む必然性は何もない。外面的文化の進歩は、人間から自然のわざを奪い去り、その内面の退廃を生み落とす。文化の外被たる技術と学問の進歩は、内なる退廃の促進にほかならなかった。

こうした退廃への転落を防ぎ、自由の感情と人間性を蘇生させるために、何をせねばならないか。「無知よりもおおいっそう軽蔑すべき、わけのわからない学問上のタワ言」<sup>⑧</sup>をさっぱりと捨て去り「良心の声」に耳を傾けることである。そして同時に社会と人間とを同時に、かつ根本的に変革することである。文化の進歩が人間性の発展をもたらす必然性がない以上、人間は自発的な意志の力によって、惰性的連環を断ち切りねばならない。

ルソーは、この変革の力を一般意志に求めた。全体意志が特殊意志の単なる集合体であり、現実の惰性的連環の枠を一步も超えるものではないのに対して、一般意志は人間としての普遍性にのみ基き、惰性的実践態を根元から突き

くずすものである。一般意志は、非日常性を基本性格としている。それは、普遍性のみに基づくものであるから、普遍的存在のみが表現することができ、決して代表されえない民主主義の外側だけの形式は何の意味ももたない。直接民主主義によってのみ、一般意志は実現される。こうして社会と個人は一体化し、奢侈と無為の集積としての学問、芸術は、存在することをやめ、知性は生活との生きた交通関係を回復する。「学問芸術論」による学問、芸術批判は既存文明の告発は、全面的な社会批判、社会変革への志向として結実したのであった。

#### 四、

学問、科学は、たしかに一定の自立性をもち、自己完結性をもっている。それ故にこそアカデミーは、牢固とした基礎をもち、宏大な体系を誇ることができるのである。

それ故にこそ職業的研究者たちは、懐疑なしに研究に謹しみ、オリンピッククよろしく自己の業績を誇ることができるのである。そしてまた学問の中立性、普遍性なるイデオロギーが成立しうるのである。

しかし学問、研究を成り立たせているのは、職業的研究者のみではない。かえって学問、研究はその本性上、非職業的研究者、非研究者を不可欠の構成要素としている。

名づけられるのであるが、悪い面がつねに、最後には良い面のうちかつということ、かえりみられないでいる。悪い面こそ闘争を構成することによって、歴史をつくる運動を生み出すのである……」⑩ルソーもまたつぎのように述べている。「無知よりもなおいっそう軽蔑すべき、わけのわからない学問上のタワ言が、知識の名をのっとなって、知識の復興に対し、ほとんど越えがたい障壁を設けていた。人間を常識にまでひきもどすには、一つの革命が必要でした。そして、ついにこの革命は、最も思いもかけない方向からやってきました。われわれの中に文学を復活させたのは、文学にとって永遠の禍である愚かな回教徒でした。」⑩

現在われわれが直面している事態は、非職業的研究者、非研究者による、学問批判および学問否定である。この事態は、学問、研究を支配している連中にとって、最悪の事態である。同じくまた、学問は、「良い面」によって——たとえば最良の研究によって——前進すると信じている職業的研究者にとっても、最悪の局面である。しかし「悪い面」が新たな知性を生み出す原動力であり、それこそが知性を「アルキメデスの点」に立たせると考えるわれわれにとっては、現時点は知性の革命の開幕なのである。われわれの課題は、「悪い面」を理論化し、実践状態で存在する既成の学問批判、学問否定を理論として構成することである。

このことの意味は、かれらが職業的研究者が語りかけるべき対象だ、ということではない。またかれらの意見が、いわゆる「素人の意見」として尊重されるべきだ、ということでもない。職業的研究者の予想に反して、むしろ学問の自立性、自己完結性そのものを問題にし、それを否定する主体として、かれらは学問、研究の不可欠の担い手なのである。自立性と自己完結性に安住した学問、研究に、その研究の意味を問いかけ、その存在自体を否定しようとすることによって、かれらは学問の不可欠の契機なのである。

知性と生活とが分離しているかぎり、非職業的研究者、非研究者は、常に学問の批判者であり、その自立性と自己完結性に安住した学問の否定者である。それ故にかれらの学問批判は、アカデミーのルールを無視して行なわれ、しばしば反知性的な、暴力的なしかたで行なわれる。かれらはこうしたしかたで学問批判を展開することによってこそ、学問、研究の不可欠の契機たりうるのである。

かれらは、学問、研究にとって、いわば「悪い要素」であることによって、学問、研究の構成要因であり、新たな学問、研究をつくってゆくことができる。「封建制度にもまた、そのプロレタリアート——農奴階級——があった。そしてそれはブルジョワジーのすべての萌芽を含んでいた。封建的な生産にもまた敵対的な二つの要素があった。そしてこの二つの要素も、やはり封建制度の良い面と悪い面とで開始することである。

#### 註

- ① 昭和四三年、東大入学式の告示、「東大紛争の記録」九三―四四ページ
- ② 「世界」、昭和四四年三月号、大内兵衛「東大は滅ぼしてはならない」
- ③ 昭和四三年二月二四日付毎日新聞
- ④ 「学問芸術論」岩波文庫版、一四―一五ページ
- ⑤ 同上書、一六―一七ページ
- ⑥ 同上書 一八―一九ページ
- ⑦ 「ポランド王への回答」、同上書、九一―九二ページ。
- ⑧ 「学問芸術論」一三―一四ページ
- ⑨ マルクス「哲労の貧困」、大月版全集、第四卷一四四―一四五ページ。
- ⑩ 「学問芸術論」一三―一四ページ。傍点——引用者

## 日本近代の根據

伊谷 隆一

(同志社大学人文研所員)

## 1 柏木義田の非戦の論理

柏木義田について少し話をしてみたいと思います。柏木義田については、ここに居られるほとんどの方が、その名前すら知られないことと思います。私の調べた限りでは、柏木という人は、この人はクリスチャンなのですが、ほとんど唯一といっていいくらい、日本のクリスチャンの中では強烈な非戦思想を持ち続け得た人です。彼が現在我々に身近なものとしてほとんど知られていない、という事自体でさえが、日本の近代史における思想的な課題とさえなり得るほどのことです。非戦の思想といえますと、現代の我々は、理念としては色々のことを知ってしまっていて、マルクス主義がどうだ、反戦市民運動がこうだとかいう形で、色々論じていますが、柏木の場合には、そういうことではなくて、自分は日本で生れ、日本で育ち、女房や子供が居て、隣のおっさんがいて、というそうしたところから、自分の論理として、非戦の論理を編み出してくるのです。ハイカラな外来思想を受け入れ、そこから理念をとり出し、継ぎ合

せるといった操作で思想を作り上げていった人々からいうと、柏木のように、下から積みあげていくという形で論理を作り出すのは遅れていて、よろしくない訳でしょう。だから排斥もされる訳です。こうした事は現代にもある訳で、柏木の思想はその内実を知られることなく、また、彼の死も、そうした外来思想・理念による思想構築の慢延する風土の中で、顧りみられない けです。恐らくそこには、移ろいやすい思想とそうでない思想との訣れめがあるわけです。そして移ろいやすい思想の一派には、その主体の濃いかげりがあるわけで、用いられる言葉の一つく、に彼の日々の暮しの中で奔り出て来るそれなりの内実があるわけです。

柏木義田という人について、エピソード風にちよつと紹介しておきますと、明治四十二年の大逆事件の時に、徳富蘆花が一高で、『謀叛論』の講演をやるわけです。ここで蘆花は、『謀叛』をする人になれ、とアジェンションをしている訳です。まっとうな人間になろうと思つたら、現代では『謀叛』をするより他にない、と主張して、幸徳秋水等に熱烈な支持を送る訳で

す。

『謀叛論』に対して当時の日本のインテリゲンツィアがどういう態度をとったかという点、まったく黙殺するか、あるいは、そういう形で幸徳秋水等を支持するのはよろしくない、という形でアンチとなるかの二つの対応が出てくる訳です。黙殺するというのはどういう部分かという点と、第一には、自分がそうした形で幸徳等に支持を与えていくと、自分の身が危なくなる、という形で黙殺する、恐らく多くのインテリゲンツィアがそうした点と考えていいでしょう。大逆事件で日本の近代のインテリが、始めてへたをするに命が危ないと内心恐懼し、幸徳を支援する蘆花の勇氣に打たれながら首をすくめていた、というようなわけでしょう。第二には、蘆花という人は、明治天皇というのとはとても偉い人だとして、天皇に対する敬愛の念が非常に強い人だった訳で、幸徳が天皇を殺ろうとしたというのはうそっぽちで、むしろ天皇を殺らざるを得ないというところこそ幸徳らの謀叛の根據があるのだ、という風に幸徳を弁護し支持する訳です。こうした、天皇にいわば、一本、足をとられた形で謀叛論は良くない、こうした批判です。これは数は少ないのですが、当時の社会主義者の中にあつた批判です。

こうした中で、群馬県の安中市の小さな教会で牧師をしていた柏木義田ただ一人が、この謀叛論に熱烈な支持の手紙を送ったのです。柏木も、謀叛をせざるを得なくなるまで追い込まれていく、そうしたところに謀叛の根據をおき、そこにのみ、愚俗の起つところがあるとする訳です。愚俗というのは、今でいう庶民や大衆のこととほぼ同じものを指していますが、この愚

俗が自ら起たざるを得なくなることをつきつめていって、蘆花の謀叛論支持に至る訳です。勿論キリスト者として、人を殺すことをそうたやすく肯じたわけではありません。むしろ、汝殺す勿れ、を勤く生きようとしたわけです。しかし、それでお、幸徳や朝日正吾や難波大助に対する共感を持っていた。それは、さきほどの暮しとの結びつきにかかわることだと思えます。

日本のキリスト教の歴史を勉強した方は御存知のことでしょうが、明治二十年代に教育と宗教をめぐる論争が、思想的斗争の主要課題となつたのですが、井上哲次郎などが教育勅語に拠つて論を張り、忠孝の念とか臣民教育などを主張して、キリスト教の撲滅をはかる訳です。その時、キリスト教の側がどの様に対応したかという点、勅語の精神とキリスト教の精神とは矛盾するものではない、と言うのがもっとも多かったのです。しかし、政治と宗教、政治と思想とは違ふのであつて、宗教や思想は道義それ自身で決るものであつて、政治権力が介入すべきでない、こうした視点が当然一方に成り立つ訳で、柏木もこうした観点に立ち、道義それ自身に立とうとした。ところが道徳それ自身に立つということになると、明治二十六年に北村透谷が首を縊つて死ぬというようなこともある訳ですが、道義に立つことによつて、それは外的世界を同時に負い込むことになりません。明治以後の日本の近代において、外的世界をも負い込むつつ、道義に立つことが出来る根據があつたかどうかは、我々が総括する際に考えねばならぬ点であります。

柏木の場合には、この二面性がそのまま残つていて、例えば明治二十七年・八年の日清戦争に際しては、日本はアジアを解放

していくのだ、朝鮮での革命運動を支援するために支那をやつたければならないのだ、という形で日清戦争に賛意を表していくようになる。さきほど、柏木は唯一の非戦を固持したクリスチャンであると言いましたが、それはこの日清戦争支持ということを含めて言っている訳です。ということは、日清戦争を支持したという点において思想が論ぜられるのではなくて、支持した過程が一度にひっくり返されて日露戦争反対と移行するのではなしに、自分が明治三十年に牧師となり愚俗と接しあう中で、道義に立つということ、愚俗と共に生きるということとの相克の中で、非戦論が生れてくるのであって、このような非戦の論理こそが検討に値するものと考えからなのです。だからこそ柏木を唯一の非戦論者と規定したいと私は考えるわけです。マルクスを読んだから、トロツキーを読んだから、或いはゲバラは恰好いいからというのでやるというのと、だから根本的に違うわけです。そういうのは、いわば移ろいやすいわけで、どうでもいいわけです。因みに言っておけば、知られていないことですが、日本の知識人の中で、資本論を最も早い時期に読んだ一人が、この柏木だったようで、最初の『資本論』完訳者の高島素之の使った英訳版『資本論』は、柏木が、高島が前橋監獄に居る時に差し入れてやったものです。

## 2 愚俗と己れとの相克

ところで、柏木は明治三十年の暮から、約十二ページほどの新聞を書き続け始め、それも殆んど独力で発行し、自分の牧す

る安中教会とその周辺の人達に分け与えます。そして昭和十一年まで約四十年間それを続けます。「上毛教界月報」というのが、その新聞の名です。その間、発禁処分を受けること、十数回に及ぶことになりませんが、そうしたエネルギーはどこから出てくるかといえますと、それは、牧師であるということに係わってきます。私は牧師という点、鼻持ちならなくて、いやではないのですが、本来、牧師というのは、愚俗と常に接しあうのですが、自分の生き方を、神と己れとの絶対的な関係に置いてみるわけでしょう。ところが、自分が良ければそれで良いということには牧師というのはいかなくて、常に愚俗と己れとの関係を介入してやる必要がある。現代的な言葉で言えば、大衆と知識人の問題、大衆の問題を如何に己れの中に繰り込むかということが、神と己れとの関係にも入ってくるわけです。柏木は、これを原動力にして、明治・大正・昭和を生き抜いていく。

ところが、愚俗を繰り込んでいくというのがどういう過程を辿るかという点、柏木はこう言います。当時の明治のクリスチ安教会においては、没落士族がどんどんクリスチャンに改宗する訳で、明治十年代には燎原の火のように拡がり、二十年代には日本はクリスチャンの国になってしまふのではないかと言われたりしたので、没落士族というのは漢学の素養を持っており、そうした階層がクリスチャンに改宗していくのと、まったくの学なき愚俗がクリスチ安教会に改宗するのは、まったく違う訳です。決して、量的拡大の問題ではない。ところが、過去の素養を持った没落士族が改宗していく場合が圧倒的に多く、そうし

た教養ある人間が改宗していくのはどういう過程を辿るかという点、キリスト教の教典、教義を色々と検討、詮索するということ、勉強を積んだあとで、「先が見えた」という点に達したところで改宗していく。柏木はこうした改宗の仕方を人に強いていくことに反対するわけで、愚俗の回心とは理解とか解釈の問題ではなくて、人間がある時、ある場所に遭遇した時における、決意と覚悟の問題であるということ、明治二十年に言っているわけです。これは非常にすばらしいことであって、大衆とは啓蒙されたり、書物を解釈して起つのではない、自らが独りで決断し、覚悟して起つのだ、というわけです。いわば「自立の問題です。愚俗が下手に教義解釈をやることはない。そんなことをやったところで回心がえられるわけではない。役にも立たぬ小インテリが輩出するだけではない。愚俗として生き、愚俗として死んでいくなかで、己れ独りの決断と覚悟だけが、回心に結びつく。信仰とはそういうものだ」というわけです。

ところが、彼が牧師として立つ場合に、愚俗・大衆に対して神の愛を語り、明治政府の悪行を並べ述べるということ、大衆が自ら決断し、起つ、ということとどう係わるか、という問題が出てくる。大衆を啓蒙するという点になってしまふのではないか。こういう矛盾が爆発するのは日露戦争の時であって、日露戦争の時、彼の中に動揺が起る。どういふことかと言うと、柏木は日露戦争に対して、反戦・非戦を唱えてのですが、そして、当時そうした言動を敢えてするのは非常に困難なこと、勇氣のいることだったのですが、牧師として自分の教会員が戦地に征くということになると、拒否を助言すれば本人は監獄に入

れられることになり、そうは言えない。そこで、「あなたは、あなたで考えて、自分の行動をしなさい」ということしか言えない。自分の論調としては非戦を唱えはするが、自ら決断して戦地に征いた人々がどんどん倒れていくことになる。こういう過程を辿っていくと、日露戦争がおぼろげにまじったからには、自分もやはり、「護国の責」を尽くさねばならぬのではないか、それが「神への愛」に基づくということではないか、ということになってしまふ訳で、柏木の非戦思想も、非常の時になるとこうしたところに立ち帰らざるを得なくなるわけです。

こうしてひき戻されてしまふと、護国などという時の「国」というものがどのように考えられていたかが問題になってきます。その場合、柏木は現代の色々な国家論のようなもので説明するのではなく、国には、二つの側面があるとする。一つには外在的な、いわば法制的な形で出てくる国家と、もう一つには資本主義であれ社会主義であれ、世の中がどう変わっていても決して変らない要素、この二つの側面を考える訳です。この国家論は日本の大正末期から昭和の初めにかけて現われてきたウルトラ・ナショナル主義の国家論と非常に似ていて、柏木の場合には、国家を、神を愛するもの、共同体、精神的共同体と捉え、ある時には社会主義との結びつきの中で精神的帝国主義という言葉も使われているのですが、このように国家論を展開するわけです。「護国の責」という場合も、戦争において護るべきは明治政府とか、そうした外在的国家ではなく、自分の生きていく国、母がおり、父がおり、妻子がい、隣りのおっさんやおばさんがいる、そうした国を護る、という形

になるのです。

でも、そうした対応の仕方というのは、僕たちも痛い経験として知っているわけです。第二次大戦・大東亜戦争の過程で多くのインテリゲンツィアが転向していった、そして転向の過程というのは、現代の研究の段階では権力の強制力によって、一定の変化を強いられたと言われるわけですがおそらくそうではなくて、自ら立っている問題基盤に何かがあつて、自ら足を引かずられるという形で転向が起つたと思う訳ですが、そう昔のことではなくて、今の学生運動の活動家層の中でも、泣いてくれるおっかさん、というような風に引き裂かれるのは、権力と母という対応の中であつて、母との紐帯を切ることがヒヨラナイ活動家であると錯覚したりなぞするわけでしょう。

だから、柏木が一方では母や子や隣りのおっさんを想い、他方では戦争の反対を志向するというような形で対応していくと言うと、それ以後の第一次大戦だとか満州事変以後の情況に対してどう見るかという、愚俗の理念化から始めるわけです。大衆というのは、日本の資本主義がどんどん高度になって行き、相対的安定期に入っていくとよく言われるように、人身の墮落とかいう形で、愚俗がダメになって来た、大衆がダメになって来た、ということ、インテリゲンツィアの大衆に対する絶望が始つてくる。ウルトラ・ナシヨナリストをとると、橋樑などは明治の末に南京に行き、大正末になって日本に帰つてきて言うことには、日本の大衆はなんと墮落したことよと言うことになり、また、五・一五事件の時の橋孝三郎などは、百姓のおっさんらが汽車の中でしゃべつていて、戦争がおつぱじまつた方

明とか抗議行動とかをとつたことはあつたわけですが、そこに己れの存亡をかけるというふうにはいかなかった。これは何故かという、近代主義的な考え方、日本が近代化されてくる明治二十三年の憲法の中にも、信教の自由が謳つてあり、法的的に自分たちの思想は守られており、これを確保すれば十分だという訳です。そうすると、対応の仕方は、ひらたく言えば、政府の提案する法案がいいか悪いか、とでもいうようなことになつてしまふわけで、現実には足をひきずられてしまふわけです。例えば、日本が朝鮮を領土にしますね、そうすると、朝鮮の大衆を教化しなければならぬ、立派な人間にしなければならぬという形で、宗教指導を始めていくわけです。それが自分たちの役目だということで、一生懸命渡つていくわけです。それも組織的にやるわけです。朝鮮総督府から多額な機密費を受けてやるわけです。ところが朝鮮の民衆は容易にのつてこないことで絶望して帰つてきたりする。日本のクリスチャンとか宗教家というのは、こうした形でしか、政治にかかわりえなかつたのです。大東亜戦争の過程においても、昭和十六年に今の日本基督教団が政府の宗教統制のもとに出てくるわけですが、その時にも、神の愛と大東亜共栄圏の思想をどう一致させるかという、思弁的な努力がなされたりするのが精一杯なわけです。

愚俗は自ら起つ、そうしたものとしての愚俗と自己との関係において世の中を見ていこうとした柏木にとっては、こうした風潮になることは到底出来ないわけです。こうして、昭和のキリスト教の正統からは、柏木は異端視されます。ところが柏木の志をある程度受け継ごうとした人はいました。でも、日本が

が腹がふくれていいんじゃないかなどと言っているのを聞いて、茫然自失するわけです。自分の愛する農民はダメになつてしまふのだ、自分の愛する大衆はダメになつてしまふのだと、絶望感に捉われてしまふのです。こうして、大衆を理念化していく過程、自分の頭の中で大衆を理念化していく過程と、現実には自分とありつつある大衆との深い裂け目に凝然としていく過程とは、常にあるわけです。

柏木義田も同じように大衆というのはすばらしい、愚俗というのはすばらしい、というように大衆を理念化するという形で対応するわけです。愚俗は自ら起つていく以外にない、と理念化するわけです。ところが、日本が昭和初期の激烈な農村恐慌以後の太平洋戦争に踏み込んでいく過程で、自ら起つはずの愚俗がいつこうに起たないどころか、世の中は乱れに乱れて来る。勿論、愚俗ばかりがではなく、マルクス主義運動の壊滅、リベラリスト、キリスト者のなしくずしの転向なぞ相次ぐわけですが、こうして柏木自身が絶望感に捉われていく訳です。大衆、愚俗を自らの思想の内にとり込むことが出来ずに、柏木はひとりで孤独の中に死んでいくわけです。昭和十三年です。

### 3 戦争体系への抵抗

しかし、柏木のこうした生き方の問題は、我々も決して笑つて済ますことは出来ないと思います。日本のクリスチャンの次元で言う、日本の牧師があるいは日本のクリスチャンが、明治の末期から昭和の戦争期にかけて、何らかの形で反対の声

あの戦争体系の中に巻き込まれていく過程では、どんな形での抵抗もあり得なかつたとは僕は考えるわけです。軍籍を離脱するとか、召集令状を拒否するとかいうことは、大東亜戦争下にはまずありません。戦地で軍務に励まなかつたとか、しょう油を飲んで身体検査にはずれるとか、隣り組みに力を尽さなかつたとかいうのが、あとで出てきた自己弁証の「抵抗」という奴でしょう。しかし、そういうのは抵抗では決してなくて、「英機を倒せ」と便所に落書するのと同じ、或いはもつと愚劣な「抵抗」なわけでしょう。戦争体系そのものに対する抵抗は、戦争体系そのものの中からそれをくつがえすという形で出てこない限りは、真の抵抗ではないわけです。だから、そういう意味での抵抗というのはなかつた。勿論今なお、ないわけです。クリスチャンは抵抗しなかつたし、マルキストももちろんしなかつた。

しかし、クリスチャンの中で一応それなりの対応をした人はいたわけです。彼が使っていた聖書の言葉を引用すると、『我が兄弟、我が骨肉のためにならんには、我みづから詛われて沈倫の途に至らんも亦、我願う所なり』。自分の愛する同朋が我が骨肉のためならんには、神からのろわれ、自分は沈倫の道に到つても良い、しかし愚俗とともに生きる、そうした対応をした人はいるわけです。戦争体系そのものに対する抵抗は確認出来ない訳ですが、自らの沈倫をかけて、沈倫を通して、先を見て行こうとする対応の仕方が残されていたわけです。

### 4 近代の類聚

ここから問題を立てていこうとすると、例えば先きほど司会者の方が言われました漱石の「夢十夜」に出て来る運慶の彫る仁王像のことがあるかもしれません。漱石がどんなに彫っているも仁王は現れない、現われるのは自分の顔だけであるということ、即ち仁王に対する渴望と、どんなに彫っても仁王は現れないという危機感に引き裂かれたなかに、日本の近代の思想の根柢をみるというわけです。それは恐らく滅びと紙一重なわけで、移らうことを肯じなかつたら滅びるというふうにあるわけです。

現在みなさんが斗っておられる大学斗争というものを、僕的眼でみると、思想的な態度から言うと、政治的な運動の次元においては理論的な偽りがあるとされるわけでしょうが、僕にとつては、今の運動は頹廢を贈けるという形でしか思想にならないと思うわけです。日本の近代の頹廢を、自らを滅ぼしていくなかで滅ぼしていくという形では、対応はあり得ないのではないかと思います。どういうことかという、先程言った、彫つても彫つても見えないと言ふのは、何が見えないかと言うと、自分が否応なしに足が上にどんどん上って行って、下を切り捨てざるを得ない、そうしなければ見えない、というところに日本の近代思想、近代主義の思想の基礎があつたと思うわけです。そしてそれを自覚した近代主義の思想家がいないうことで、より一層悲劇的なわけです。そうではいけない、自分の足元を彫つていかねばならないという時に、なおだんだん見えなくなる。

大戦期に「我が骨肉のためならんには」と対応していった人

大衆は軍部・政府にだまされていやいや戦争をしたという態の戦時下論等に支えられた、今のあらゆる反体制運動というものは、まず全部疑つてかかるということが最低限どうしても必要じゃないかと思うわけです。ひとたびでも、国への愛、護国の責、母を想う心とかいう形で提起されてくるナショナルな問題に、切り捨てるのではなくそれ自身を負い込むという形で対決する力を持ち得ないなら、また非常の時には空転していくことは必須だと思ふわけです。そう見通せると、僕には思えるわけです。

## 5 幻想総体への対決

大学斗争にしても色々な問題が提起されているわけですが、いづれにしても近代の総体、戦後民主主義の総体と、思想的に対決するということを含んでいかなない限り意義のないことと僕は思います。

例えば話はずれるかもしれませんが、僕がいつでも判らないことは、何故、機動隊が大学に入つてはいけないのか、ということ。大学構内に機動隊が入つてこまることは一つもないと思ふわけです。機動隊は入つた方がいいわけですよ。機動隊と徹底的に対決してゆく、対決と言つても物理的に機動隊に対決する過程そのものをも含めて、戦後民主主義が育てあげて来た自治とか、学問の自由とかいう幻想に対する自らの内的格闘の過程こそが対決というわけです。幻想としての大学自治ではなしに、機動隊が大学に入るのは自然であつて、そこで、如何に我々が斗うかという風に問題を立てなければ、ムサイんじや

は、今後を見通そうとした事は事実です。自らの沈倫を贈けて見通す、大東亜戦争をやめさせ得ないことは判るわけですが、やらざるを得ない、つまり、判つていて、やる、しかも徹底的にやる、そうすることによって、それを否定し、逆転する根柢を求めるといふ形をとるわけです。

戦後というのはそうした過程を全然含まずに出発してしまつているわけで、戦後の民主主義を僕たちが考える場合にも、何よりもはつきりしておかなければならないのは、民主主義というのには捨てたのだ、ということであつて、先程述べたウルトラ・ナショナルリズムとか、「国を思うのみ」だとかいう、そうした土着の観念を生み出す基盤と一度も対決していない。平和とか民主主義とかいう言葉の内実と対決せずに、僕たちがそうした言葉を使うなら、そんなものは全然思想的な力を持つことがない、ということをはつきりとさせておく必要がある、と思ふわけです。

戦後の民主主義の問題は、必ず、柏木における愚俗の問題に立ち帰つていかざるを得ない、立ち帰らねばならないと思ひます。僕たちは、ベトナム反戦であるとか、何であるとか口にするわけですが、二重に見通していけば、日本の戦争であれ、世界のあらゆる戦争であれ、それを徹底的に闘いぬいてきたのは、多かれ、良き（善良な）市民なのです。（善良なる）市民（善良なる）国民が、否応なしに闘いに征かざるを得ないということ、そして、闘い抜くが為には、最も残虐にも闘うということ、僕たちは忘れてはならないのであつて、民衆・プロレタリアート＝革命の担い手、という日本マルクス主義のテーゼや、

ないかと思ふ訳です。

ところが、幻想としての平和とか民主主義とか自治とかいう言葉で政治に対処せざるを得ないのが、現在の大学斗争というわけだと思ひます。だから、そうせざるを得ないのなら、それを徹底化する以外にない。僕の感じでは、三派の諸君にしろ、誰にしろ、現在の斗争というのは、闘っている個々の人的内的な思想過程としては、必ずやテロリズムを内包する所に行く以外にないと思ふ訳です。戦術的次元で言うのではありません。権力による法制的な保護の下でなくては、学問も研究もないという戦後の「民主主義」に支えられた精神の否定を言うのです。もともと保護されていたものが、保護しないという風に権力が出て来た時に、「学問の自由を守れ」もへったくそもないでしょう。大衆斗争として展開すると言う次元ではそういう具合にはいかなないでしょうが、思想的な次元から言えば近代の総体・戦後民主主義の頹廢そのものに対する思想斗争として、自己を内的に位置づけて行けば、テロリズムをも思想的に内包するものとしてあるだろうと思ひます。というのは、さきほど少し言いました例えば朝日正吾だとか或いは五・一五事件、或いは井上日召の一人一殺というようなものを根柢の所で支えた情動を、それと根柢的に対決するのでなく抹殺することによって戦後の精神というのは生れて来ている。ところが戦後二十四年たつてなお、そのような情動を否定する思想的な根柢を我々は持ちえていない。とするなら、戦後民主主義に対する告発としての斗争は、戦後民主主義が抹殺して来たものとの対決という二重の側面をも持つわけです。とするなら、あの情動は決して他人の

ものではない。己れのものとしてそれを己れの思想過程にはらんでいかざるを得ないのではないかということだ。

## 6 自己死の展開

テロリズムを内包するものとして展開されて行くならば、必ずや、それは絶望的な破滅を予測させるものとなると思います。しかし絶望的な破滅を絶えず自明のものとして僕たちが現代の問題を考へるかどうか、という風にして、大学斗争はそれを斗っている個々の人の内面において、一面では斗われねばならないと思うわけです。例えば、一月十八・十九日の安田講堂をテレビでボケッとして見ていたわけですが、見てて何を思ったかと言うと、僕は安田に最後まで残っていた人々が何故自爆しないのかと思っただけですよ。これはひどく無責任な感慨でしょう。しかし僕がテレビをぬく／＼として見ていてそう思い、彼らが悲愴というよりは何かのどかにああして斗っているというこの距離の中で、状況を考へる以外にないとすれば、その感慨をつきつめてみる必要があるように思うわけです。

僕は一切の斗争というのは、自らそこで死ぬという心映えを持って行われねばならないものと思います。肉体的な死ばかりでなく、精神の死をも込めてです。これは僕の祈念なのであって、なかなかそうはいかなくてぶざまな闘いをしか闘いえないで亡んでいくのかもしれない。しかし折りとしてそうありたいと思うのです。ところが、必ず自分は亡びないようにして斗争というのは斗われているのではないのか。或る意味で言えば、

かない限り、絶対に負けていくと思う訳です。

敗戦期に帰ってみると、そこから僕が学ぶということ言えば例えば吉田満輝という人に『戦艦大和の最期』という本があるのですが、それは「大和」は絶望的作戦を課せられるわけですが、奇蹟的に助かった著者によると、沖繩に向う特攻作戦に出撃してから、兵隊たちの中で自らの死を如何にして普遍的な価値と結びつけるか、ということが論争になる訳です。そしてガクガクやるわけですが、たまたま上げの軍人がこういうことを言います。日本というのは今まで間違っていたんだ。間違っていたことは誰にも判っていたんだ。ところが目覚めなければならぬ。自ら敗れることによって目覚める。今日目覚めずに、いつ目覚めるのか、というわけです。日本ノ新生ニ先キガケテ散ル、マサニ本望チャナイカというわけです。これは決して偶像化されてはならないわけですが、考へなければならぬことを含んでいると思う訳です。

## 7 近代の偽善に対する恨みつらみ

戦争体系の中に否応なく組み込まれていく、これを拒否することは出来ない。拒否すれば、自らの死はあがないうるが、それを大衆的に展開することは出来ない。従って、否応なく組み込まれていく過程そのものの中で、それを徹底化させていくことによって、戦争体系がはらんでいく次の課題を、ある程度見通すことが出来る訳です。日本の新生を見通すこと、そこにおいて自己の死をあがなう。僕たちにとって、反逆であるとか抵

そこに於いて亡ぶということを支える根拠を、私どもは失ったまま持ち得ていないままかもしれない。カリキュラムみたいに斗争が組まれていて、今日は明日のことを考へて半負けにしよう、なんて言うのは、大衆斗争の原則で政治の次元では仕方ないことでしょうか、僕なんかは、何故、自らそこに於いて死ぬという形で志向されないか、と思っってしまう訳です。それは、「死ぬ!!」ということではなくて、自ら死ぬという形で展開することです。自ら詛われ、沈倫の道に至るも可なり」という形で、僕たちは今、生活せざるを得ないわけですよ。それを徹底化して行けば、我々は如何なる斗争においても、常に自らそこで死ぬということを突きつけられてくるのです。そういうことを言うとき、人は、僕を軽蔑するわけであって、政治の次元とそういう次元を一緒にしてもらっては困る。お前の言うのは幻想だと言うのですよ。

ところが幻想だと言ったところで、原則論としては、政治の次元で展開されることは必ず思想的な根拠をどう深めるか、という二重の過程があるわけです。だから、大学斗争を機能的な次元で切って行くことは出来ない。現在展開されている一切の政治斗争は、僕は日本の近代のさまざまな思想を負い込んでいく、徹底して負い込んでいくことによって逆転していく過程でもなければならぬと思います。現在の斗争が、七十年斗争うんぬんとか、世界革命とかいう形で、一歩先き、一歩先きへと結びつけられていく訳ですが、そうじゃなくて、僕は、後に對して、即ち、漱石の渴望やテロリストのあの情動とかいった、日本近代の総体に対して、常に結びつけていく過程を含んでい

抗であるとかいうものは、単に体制に対する反体制、秩序に対する反秩序という形だけでは決して志向され得ない。ある体制に組み込まれている場合、体制そのものの中で、自分たちは生活する以外にない。とすると、体制から身をそらしてしまうということは、言ってみれば体制からの逃亡であり傍観に違いないわけで、体制そのものの中で体制をつき破っていく原理、そういう倫理を作っていく必要があると思うわけです。従って、その過程においては、さっき言った政治的対応の次元ではなくて、個人における内的な葛藤の過程を、二重性としてはらむ訳であって、そうしたものを含むものとして絶えず斗争は志向されていかなければならぬと思う訳です。やるからには僕たちはどんな形においても、思想的次元においては、戦後民主主義であるとか近代日本の総体の偽善に対して、恨みつらみを投げかけていく必要があると思う訳です。

僕は京大で今行われている斗争にケチをつけたい訳ですけれども、何をかというとき、今から数年前に大管法斗争があったのを御存知と思いますが、大管法斗争に対する恨みつらみと言うのを、僕は相当に持っている訳です。これは僕個人ばかりではなくて、あの頃の斗争をやっていた人に共通した世代的な恨みつらみだと思えますが、あの斗争は完璧に壊滅した。そしてその時の京大での大学封鎖斗争を敗北させた、斗争破壊の張本人は井上清氏でしょう。それが、時世がかわって、代々木と切れたのくっついたのである。今では三派の何とか派とかと親しくなっていて、シャシャリ出て来て、学生が喜んでる訳ですが、そんなのは全然ダメだと思っんです。学生がダメなわけですよ。





人文選書

# 現代において、文学は、演劇は、何をなすべきか!!

## サルトル対談集I

サルトルが今日までに行なった重要なインタビューを全一冊にまとめた。この冊子では、文学、演劇面での発言を収録し、著作の側面が語られるかたわら、現代において、文学、演劇にかせられた課題と使命が説かれる。 鈴木/海老坂/永井他訳 ￥五〇〇円

# 学生革命

コーン・ハンター 他著 海老坂武訳

## 人文書院

京都市下京区仏光寺高倉西入

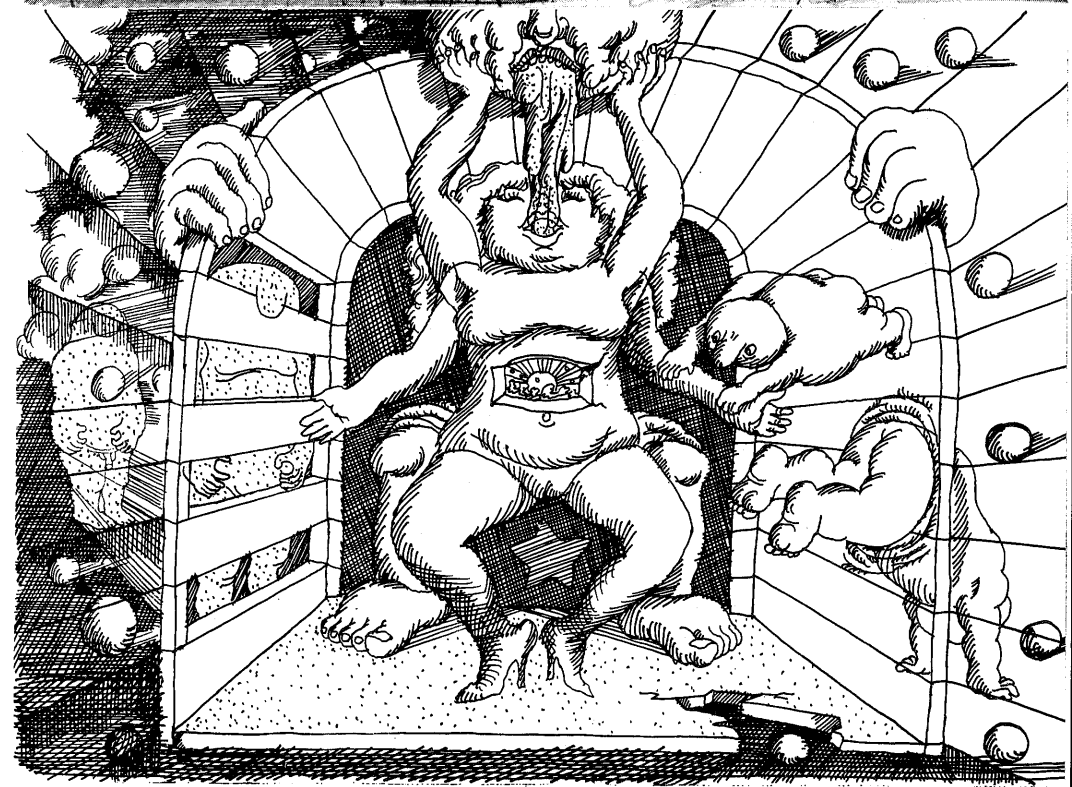
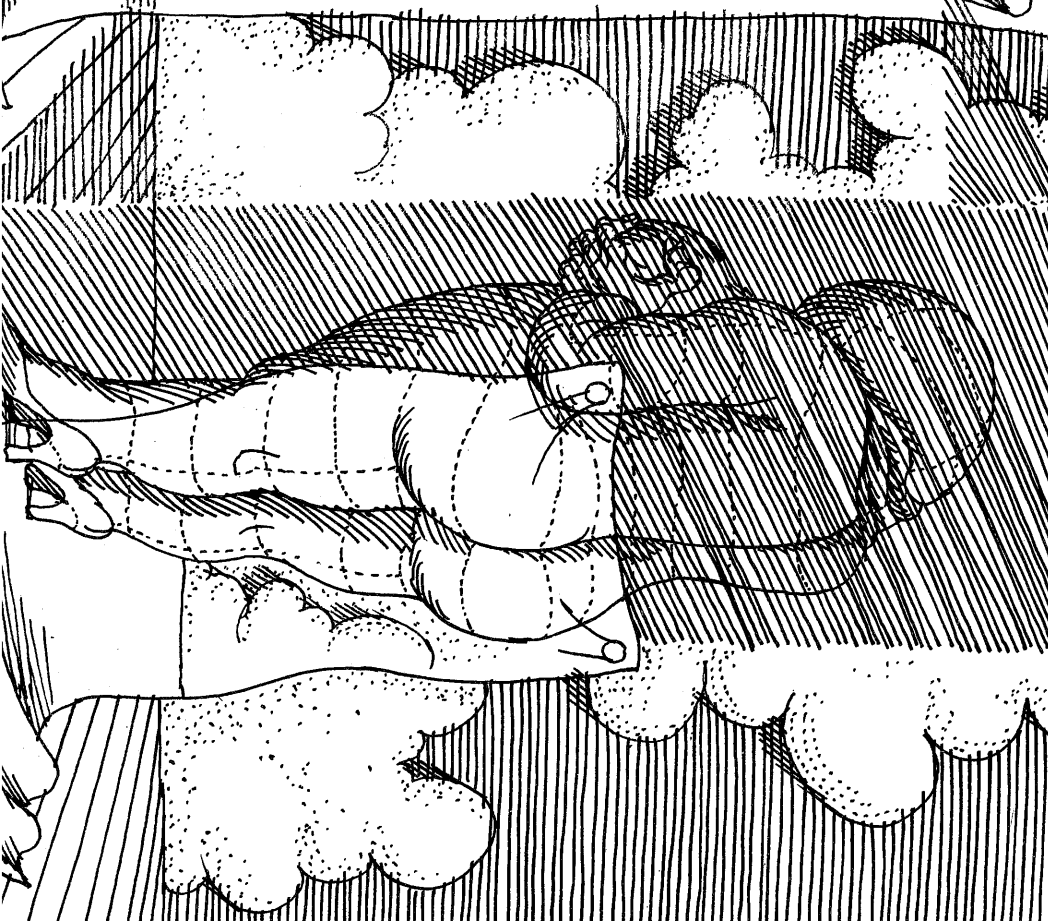
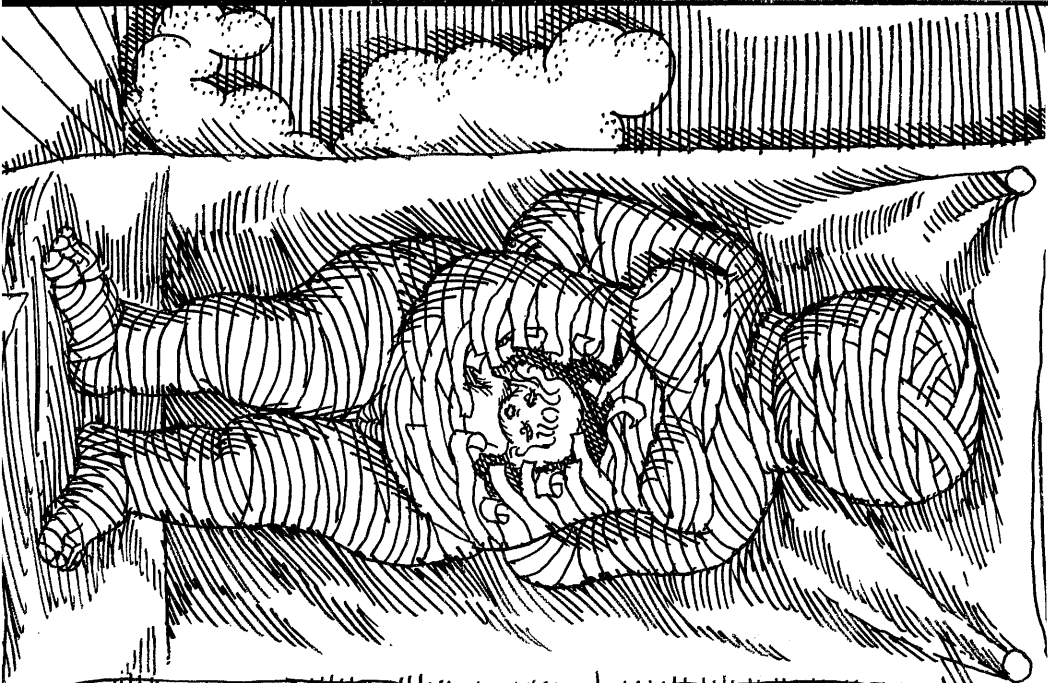
\*フランス五月革命の思想と行動  
日本の現状との対比で注目されている、フランス全学連の指導者たちが語る、抵抗と改革と解放の思想! ￥三〇〇円

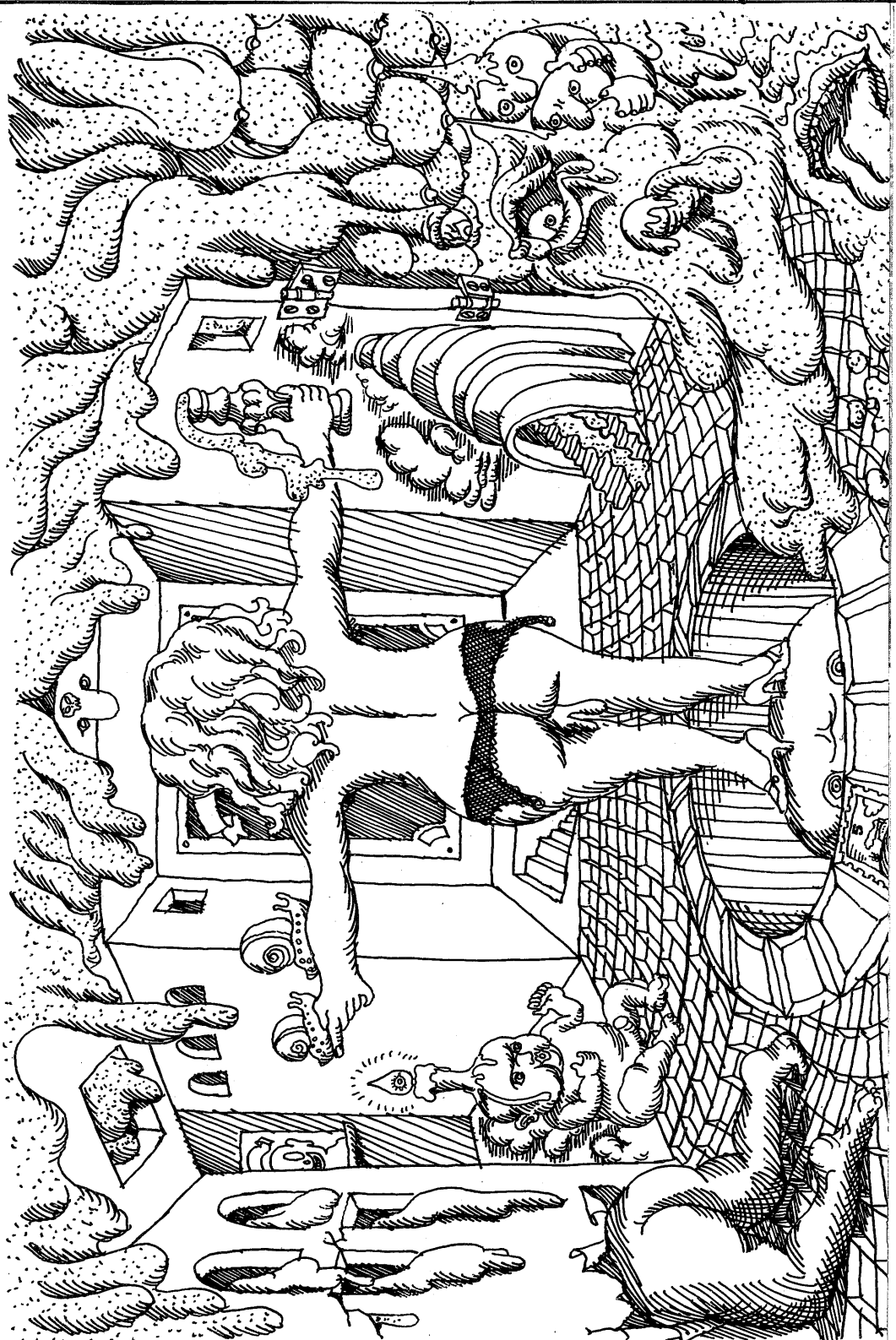
恨みつらみを忘れてはならないんであって、井上清氏にも、いちゃついている学生にも、絶対に自己批判させる必要があると思う訳です。言いたいことは、斗争というのは過ぎし日の恨みつらみと結びつけていかねば内的には展開しないと思う訳です。きのうの敵と一緒にたって跳ねまわるなんていう移ろい易いのは、共に闘うに足らんわけであって、そういうのは斗争でもなんでもないと思うんです。僕たちが絶対忘れてはならないのは、日本の近代が負い込んでいる、足元が払われていくというか、どんなに彫っても先きが見えないとかいう焦燥感、そういうものをつきつめていく過程を、自分で意識化して行かない限りダメだと思えます。

柏木義田の話からおかしなところまで及びましたが、柏木が「我が兄弟、我が骨肉の為ならんには、我自ら詛われて沈倫の道に至らんも」という形で状況に対応しようとした、あるいは、大衆・愚俗というものは自ら起つものであって、人からうんぬんされるものではない、非常の時の決断と覚悟、愚俗の決断と覚悟を、思想としてくり込んでいこうとして果ててしまったそ

ういう地点を、僕たちは絶対に忘れてはならないし、何度でもそこに立ち帰らなければならぬと思うわけです。その意味で、柏木は非常に強力な、しかし、地味な在野の人として、果てていったと思います。日本の近代とかなんとかについて考える時に、僕はいつも思うんですけれども、客観的に観るのではなくて、のめり込んで行く過程というものを、自分の中で体現させていかなければダメだと思えます。やろううたってホレなきやだめよ、ということですよ。勿論ホレたら返り血を浴びるわけですが、自分のその返り血を浴びつつのめり込んでいく内的な過程の中で、現在の状況のもとの己れの志を錬りあげて行かなければならないと思う訳です。

④ この論稿は、去る二月六日京大教養部バリケード内において行われた「非人の群れ」主催の自主講座の伊谷隆一氏(同志社大学院卒)の講演を採録し、若干の手を加えたものです。伊谷氏及び主催者側の御好意を感謝します。(編集部)





### 三匹の唄

江波勝夫

彼等が、無駄死をせねばならない理由はどこにもない。物語は、桔梗鋭ノ介、橘一之進、桜京十郎の三匹が、行く先々でおこる問題に、三匹三様の巻きこまれ方で対応していく、最終的に共通の基盤にたつて見事な剣と槍を披露するという具合に展開する。

彼等は全て彼等自身の方法によって、身分制度に象徴される体制を乗り越え得た視点を獲得した存在として設定され、彼等の有する圧倒的な強さによってかっこよく生活することを保障されている。三匹のなかで桜京十郎だけが水呑百姓の出であり、彼は自ら槍の名手となることによつて農民のみじめさから抜け出し得た男である。本来ならばやぐざになる所を、もちまえの強さによつて浪人という地位を得た彼は、しかしながらあくまでも出生から抜け出すことはできない。体制の悪というものが、ひとり権力を持つ者のみの責任ではなくて、大衆の有している頼りなさや弱さに最も大きく由来していることを痛程自覚している彼は、しかしながら、一揆を起こそうとしている農民がいつのまにか腰くだけになりもとの穴倉にひっこんでいくのを

見捨る訳にはいかなのである。農民の有している保守的感覚は時としてそのような彼を、自らのちっぽけな生活を脅やかす危険な存在として逆に彼の命をねらい、裏切ることもある。自分に槍というものがなかったらどのような生活を送る人間になっていたかを知っている彼には、そのような農民を責める資格はないのである。

橘一之進は新進気鋭の若手藩士の出である。自らの目指した革命に表面的には強権に敗北した体験を持つ彼にとつて、何にもまして自らの武士という位置を乗り越えさせたのは、彼の連帯感の喪失であった。気やすく革命を口にする人間が、その実自らの武士という階級からは一歩も抜き出し得ず、あくまでも体制内存在にとどまり、さらには往々にして自らの大義名分のために仲間を裏切り、同志を斬るという事実を目標する彼は、行動によつてのみ連帯を得ることを知るのである。彼とても、昔の彼自身を彷彿させる口角沫を飛ばす連中に対して無関心ではいられないが、彼の貴重な体験によつて得られた他の二匹との連帯は、そのような場合にとりわけ深く認識されていくのである。

唯一人、最後まで出生の秘密を明らかにされない者が桔梗鋭ノ介である。彼は三匹のなかでは最も先読みのみで存在であり、あらゆることに對して冷静を保ちうる見事な男である。彼にとつては、桜京十郎の心情も、橘一之進の正義感ともに自らとは異質なものとして受けとめつ、も、

心優しくそれを抱括し忠告はしても批判することは絶対にしない。むしろ彼は、彼等の試行錯誤を一種のうらやましきで受けとめていた。「無駄としりつ、やらねばならぬ」という心情は私にとつて、なんとなく実感としてくるものであるが、彼に対する表現は、そのような先読みできる者だけが持てる悲哀とでもいわねばなるまい。彼にとつて唯一つ真剣になれるものは女である。

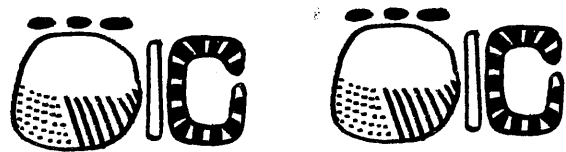
彼等自身の保有している強さは、まさにそのことによつて彼等のかつこいい生活を保障していくのであるが、その内実は、彼等がある瞬間に賭けていくものによつて、常に裏切られるか或いはそれが消失していくというパターンによつて、彼等にとつて決して充足を得られるものではない。それは、ある時は一見改革を指すかに思われる農民や、或いは武士が斗いの高揚期に於いては彼等三匹の強さ故に、いとも簡単に連帯を口にするにもかわからず、最終的には、自らの階級を乗り越えられない者が改革を意図した時に必然的に生ずる内部崩壊という悲劇によつて、今度はまさに三匹の保有する強さが故に三匹に敵対するものとして登場するといふ具合に展開される。またある時は彼等三匹に敵対しないまでも、三匹の賭けた武士が武士道という理念によつて切腹するといった。三匹にとつてはあくまでも無縁な、しかしながら否定されることのできない人間の内に存在する「体制」によつて終焉する。またある時は、真に体

制を乗り越え得た者は既にその瞬間に於いて現実の圧力から肉体的に、或いは精神的に他界しているといった表現として展開されるのである。

女は時として「女」に目覚めることによつて感覚的に体制を乗り越える。しかし、いったん体制を乗り越えた女は、自らの「女」を自覚した瞬間から常に死という運命をたどらざるを得ない。それは強権によつてかもしれないし、また乗り越えた部分と、乗り越えられない部分との切実な交錯によつてかもしれない。しかしながら往々にして彼等三匹と真に連帯する部分が、女であるということは、単に彼等がもてるということ以上に何となく、うなづけるものがあるのである。

三匹の思考方法や、その有している感覚は彼等の出生や性格によつて三人三様の形態をとるが、根底に於けるそれは人間としての基盤の上に結びついている。彼等にとつて最も重要なことは、時として恋である。また時としてそれは、自らのみじめさを共有する他人である。また時としてとにかく生きのびることである。彼等は常にそのような自らと密接に関わり合うことから出発し、背理的思考形態によつて、共通の連帯感覚へと到達する。体制に対する怒りや、更には人間の内に存在する「体制」に対する彼等の異和感は、全て彼等三匹の自己を深化させる過程に於いて表出するということは貴重である。

# 春



白い蛾のまいる  
さわやかに発熱した少年

音のない空にうかぶ  
ひとすじの雲が  
いちめん赤い  
リットルを ながしている  
その時代 つまり 君の春  
アララト山伝説のように  
船たちが集合した  
場所

初潮のように  
くらい石油があふれでた  
その土地に  
ひかっているのは霧だ  
旧世紀の海の霧だ  
巨済島の裸かできむい霧だ  
慟哭の王国  
光と風の

シンメトリーのなかに すべての日付を  
埋葬するのが  
莊園の経済学

ぶちこわせ おお  
その風に熱をさます少年  
赤れんがの茶色い記憶を  
さまざまの空の記憶を  
骨つきスूपでまぜているピアノ線の記憶を  
火花をしらないで亡命の記憶を  
おお

プラスチック音符で いっぱいの  
王妃の手箱を  
みしらぬ駅で灰にして  
われらの領土に 歴史の槍を  
垂直にぶちこんで たちさった  
青銅のインディアン

(K・Y)



今西中雄

# 私的 全 共 闘 論



想像力が権力を奪う

学生の反乱、それは「慰安の府」としてあった（大学）を超えて、革命を夢想しつづけてきた人々にさえ、さまざまの不安、動揺、衝撃それに自己死さえもなげかけた。それは、少数者が永遠に自己主張しつづけて、いわば敗けつづけていく謀叛人の運動であり、収拾も解決もありえない理念の永久運動である。

反秩序は、秩序を壊しつづけて新たに秩序化する行為ではありえない。近代主義的マルクス主義が、革命を圧殺す

阿部 功

ることによってのみ革命（国家）を維持しえたという歴史の逆説は、反体制自身が最も体制を具有し、体制自身が反体制を具有するという現実に表象されている。あらゆる過去の革命思想＝運動が、いかに急進的戦術を執ったところで、未来の革命を既にして圧殺し、そうすることで市民権＝党化を獲得してきたということからもはや目をそむけることはできない。

現在、全国いたるところで激発している学園闘争＝学園占拠は、戦後の体制的合理化の波にのりおくれた大学秩序の合理主義的再編を意図としているものではない。（知性）

の擬制的総府としての大学への、したがって「知性」への全面的な反逆であり、戦後思想を担い、体制の合理主義的再編を知的生産の側面から推進してきたマルクス（主義）を含めた進歩主義的、市民民主主義的な「知性」の告発の運動である。

したがって、学の秩序のうちで未来の自己の加害者の場を予見し、それを拒否する意志をもつにいたった学生にとって、こうした反逆は、大学を離れることによって完成するものではなく、秩序総体を破壊しつづける以外にない。また、「知性」生産の場に立つ、教官、研究者にとつては、反逆は徹底した自己否定、すなわち研究すること、教えることを、学を私有する場に立つことを拒否することを通じて実現される。

この永続的反乱は、反乱に加担する個人、個別的意志、反乱の一分枝になるのではなく、絶えずその全体を担うことを要求している。したがって反逆＝革命の綱領は、ある特殊の超個人によつて与えられる（あるもの）ではなく、反逆の意志自体であり、行為自体である。闘いを全的に担い、個々人にとっては、自己から抽象され、客体となつて主体を外化する組織も綱領も必要とされない。存在するのは運動だけである。

「大学」は、バリケードを構築する物理的場をあたえてくれた。まさしく「行為が意識を設立した」のであり、攻

克を持續する、向自をのりこえた即自、自体そのものの回転であるがゆえに、バリケード＝占拠は、自閉症に陥いることなく、街角から街角へと触手の無限の伸張をしつづけ、卑少なアメーバのごとくたえず自己の細胞分裂と生長をくりかえし、世界を支配するにいたる。

学生の反乱は「大学」内の秩序派と反秩序派との抗争、矮少なる二重権力の獲得を想定するものではない。たとえ闘争の出發が、他者に妥協を求めるような「学内改良闘争」（処分撤回闘争、学費値上げ反対闘争とかいった）にあつたとしても、変革の意志の集合として運動が進行していくならば、それは直ちに「大学」の管理機能、「知性」の存在基盤、そしてそれらを保障している体制そのものの存在基盤との対決へと突きすすんでいかざるをえない。左翼急進主義が、日本においては街頭＝舗石から学園に帰着してはじめて全的変革の過程の内実を獲得する志向をもつにいたつたが、それは、政治革命に先行する知性的変革という質を担っているために、域内二重権力に止まることなく、さらに社会の全体的変革の途への進軍をはじめなければならぬがゆえに、再び学園から街頭に闘いを拡大し、全ゆる学園に、工場に、街角に闘いの拠点を創出していくという現在の革命派にとつては、いささか荷が重い課題すら担っている。しかもこうした戦線の拡大は、質的に異つた政治課題の闘争に出陣して立ち戻つてくるための兵舎と

撃的理念の実現の具体的契機が、バリケードによつて与えられた。「革命は存在することをやめて実存しなければならぬ」のであり、バリケードの内の空間は、来るべき時間、また永劫に到達することのない時間さえも、既にして保有しはじめようとする「祭」の場である。「祭」は、狂える個体の群れの投企であり、すべての定式を拒んだところに成立する。しかし「祭」は、自足的小宇宙として実存しつづける楽園ではありえない。「それは、永続的な闘いが一時的な均衡をもつた革命的な空間と時間」なのであって、実存しつづけようとする革命的意志は、権力、秩序との熾烈ともいえる抗争を通じてはじめて成立する。しかも過去の「祭」が祭主と巫女をうみだしたことによつて「祭」に加担する個人が外化され、「祭」の定型化と死に終つた歴史の逆説を絶えず拒絶する意志の自己確認の場を、無限の彼方に拡がりをもつバリケードのうちで求める作業が、今こそ必要とされている。

#### すべての思想の帰着、それは舗石だ

異質な個人の集合としての学生の反乱が、状況に向つて鈍角にはなく、垂直に突きささる時、この群れは、一つの革命への意志を共有するにいたる。こうした意志は、異質な個人を破砕し等質化するものでなく、異質なものの相

として「大学」を使用するという単純な型態に還元して語られるのではなく、「学園闘争を闘うことは安保闘争を闘うことである」といった既に凋落した単線的政治談議によつて達せられるものでもない。全て政治状況と密着したところで具体的政治方針、闘争主体の質の深化とその拡大の具体的プランとして絶えず検証されながら提示されていく課題であるために、学園闘争が学園闘争として向自的に徹底されていかなない限り、全状況を透徹して、それとの全面的対決を現実的なものとする事ができない。少数者運動の持つ困難さ、即ち絶望的闘争の永続化という重圧にたえかねて、単純街頭戦への回帰を自論むものがあるとすれば、それは、街頭での急進主義（特に六七年一〇月八日闘争、六八年一〇月二十一日闘争に表象されている）によつて触発された学園闘争＝「知性」の根底的変革の連鎖と断続の内的論理の理解とその思想化によつて障壁となるにすぎない。同じラディカルという言葉で表象されるものを、平板な闘争の場の差異という二次元的なものに押し止めることでは、先取りされた荒廢の未来、到達しえない時間を現時間とし、学園という特殊場を闘いの場とする四次元的時空すらも包摂する学生の反乱の思想的意味、社会変革にとつての位相と深く関わりをもつことができなくなろう。主体そのものも含む状況を絶えず対象化し、具体的政治過程のうちで主体の規程と否定を繰り返していくのではなく、

なりふり構わず（綱領）を掲げ、ヘルメットとゲバ棒をかかえて右往左往していくことが（指導）であり、党的機能であるという神話が日々語られる状況がある。だがそれも狂気の淵にたつ意志であるということの限りにおいて、状況と深く関わりをもとうという意志である限りにおいて、自己の党派性を逆に根底から否定してしまおうという志向をもつ場合にのみ肯定的に評価しうる。

が、我々は、体制によって先取りされた荒廃の未来を奪いかえすことができて（それすらも、現時空と引きかえに辛じて可能になる）、夢のうちなる未来を先取りしようという意志を、状況との血みどろの苦闘の中で持とうとする

ことができて、現時空に未来を持つことができない。アジテーターは、そのアジテートが終った瞬間に、自らを否定しつづけることなくしては、過程が創出する状況と密着することはできないし、したがってアジテーターが特定の個人、団体の機能に固定されてしまうことでは、個別的闘争主体の集合たる運動が、状況との緊張関係を維持して、たえず新たな位相に自らを措定していくという運動自体の自己否定（理念の永久運動をすすめていく）ことができなくなる。変革の意志に加担する諸個人にとつては、アジテートは自己内的ベクトルを持つのであり、いまだ加担しえない諸個人にとつて（指導）は、運動総体ないし運動がたえず創出していく状況そのものである。単純にいえば、

### 食べるものを売り払い、何か飢え死にするものを買え （ブルトン＝エリユール）

村尾行一が東大全共闘を森林生態系になぞらえて説明しようとしたが、全共闘を状況そのものからきりはなして抽象的論理化することはできない。「組織」とは言い難い組織であるからこそ、抽象的論理化の作業はただちにお喋りに堕し、様々の虚像を全共闘運動自体にさえ与えていくにすぎなくなる。かつて谷川雁が大正行動隊を「成員の所属は登録制ではない。みずから全力をこめてその組織に属すると自覚し、また自称するときの自己認識だけがそれを規定する」とした場合も、抽象的理念としてそれを行動に優先した組織として現実化しようとするならば短絡が生じるにすぎないし、意に反して死んだ理念にしばられた自閉症的組織がデッチアゲられるに終ってしまう。この発言は大正行動隊が、非定型集団として運動を展開していく渦中の言葉であるからこそ、そこに組織理念としてよりもむしろ行動理念として重い意味を未だ失わないでいるのである。だが、いまや最も体制を具現する（反体制派）に堕してしまつた日本共産党を含めて日本の左翼の伝統が、ただひたすらに自己の組織理念と大衆指導理念を追い求め、自己をも含めた運動総体、状況総体の理念をたえず反省していくことを、故意にせよ、偶意にせよ没却してきた中で、東大、

京大闘争にとつての（指導）は、東大、日大闘争であり、フランス五月革命であつたといつてもよからう。そうした累層的な学生の反乱が、全国学園闘争を形成していくのであつて、個別学園闘争の課題を切り捨てたところでも全国的な政治闘争に転換するわけでも、全国的な学生の反乱に目をそむけたところで、個別の学園闘争の展開が可能になるわけでもない。労働者に比して闘争を展開しやすとし、学生の反乱を単純に労働者の軍隊の登場を待つ斥候隊とする擬制前衛主義、全国的政治闘争戦術を導入することで小ブル運動が階級闘争の最前線を担うという縫合主義、階級の認識を主体的に獲得することが先験的に肝要だとするサロン談議、それらのすべては、自己の閉塞的小宇宙に安息し、固型的にしか他者を対立させることができながゆえに、化石の言葉にしがみつき、状況総体との浮動的緊張関係を意識のうちで永劫のものとするのができないでいる。今、垂直的に語りうるものは、ただ個体それぞれの流動的位相を徹底的に曝きつづける醒めた狂気の行動意志だけである。学生の反乱は学生の反乱であるがゆえに、時代を透徹して時代そのものとの全的対峙を可能にし、未来を痛苦のうちながらも先取りしようとする志向を可能にしていく。自立した曖昧な存在（定在なき存在たるインテリゲンツィアの自己運動の意識化）、そのみが学生の反乱と体制との全的対峙を可能にしていく。

日大の全共闘の（存在様態）は、我々に看過することを許さない経験を捺印した。この経験も、現実に展開している運動のそれぞれの局面にたいする個別的主体（党派に所属していようがまいが、さらに反対派に立とうが）の関わりかたの問題として、いわば「自称する自己認識」の問題として個体的に語っていくことが忘れさられた瞬間に、夢想の対象たる絵空事になってしまう危険を帯びている。なぜなら全共闘は、運動自体であり、状況に鋭く切りこんでいく意志の結集である場合のみ「自称する」対象として実現しうる。

再び谷川雁に語らせよう。

「目下のところ存在している必然にして可能な道は反パルタイ集中、反集中的集中運動よりほかない。……このような運動はまず個々のイデオログたちの反パルタイ連合からはじめられなければならない。異なるイデオロギーのなかにふくまれる党派的契機によってではなく、解党的契機によって結合し、当面する非イデオロギー的な既成党派の俗物化した党派性を清算させる必要がある。それは運動を綱領的認識によって区分することではなく、エネルギー本質論として見ることである。」

六十年安保闘争は、永続的変革の運動を展開しようとした主体にたいして、既に予見的に東大、日大闘争、狂人たちの有機的運動体の形成の方向を示していた。（前衛）の

神話の崩壊を新たな（前衛）の創出によって超克しえんと想った者たちは、未だ神話の崩壊を見ることさえできない者たちと寸分違わない地平に立ち、その地平からの飛翔を試行することもできないでいた。その間隙いな暗墟に立ち、永続的に反乱を至向した北九州のボタ山を喰い潰す黒い坑夫の咆哮そのものである。このマニフェストは、今、学生の反乱のうちで蘇甦しようとしている。

「さらにこの運動は、反パルタイ・反イデオロギーとしてあらわれてくる大衆の自立運動を促進し、そこに行動的な世界を形成させなければならぬ。……ひとりの人間はイデオログとして存在するとともに行動者として存在する。イデオログとしての彼のエネルギーはニヒルに、行動者としてはアナキーに噴出する。」

自立した自己意識の群集合としての運動―現在の学生の反乱を表現する全共闘運動は、浮游状態を即自に保持しつづける行動的世界のうちで、こうしたイデオログとしての個体と行動者としての個体の亀裂の淵に立つことが強制されている。しかも超越的個人によって、「この断層が縫いあわせ」られることを、運動体みずからの急転回によって自主的にはねのけていく有機的個性をたえず色濃いものにしていかなければならない。

倒錯は必至だ。大衆と知識人のどちらにもは

の、意味に先行して擬制的に措定された全てのカテゴリーが、流動していく現代の状況そのものうちではじめて組上のせられ、その本質的意味、状況と関わる様態そのものが総体として問われているのである。現状を自己のものとして擔い、垂直に對峙する志向をもとうとしたものたちの多くは、その途端に自己の言葉の喪失をひとつの大きな衝撃としてうけとめざるをえなかったし、ただその言語喪失感の深層から出発することによってのみ、変革の意志を現実のものにすることができるとも認識しなければならなかった。

それは全共闘がつきうごかし、破碎しようとしている体制の言葉にとどまることなく、そうした志向が直ちに逆転して、全共闘運動として総括される言葉自身にもむけられてくる。敵を告発しようとした瞬間に、自己もその渦から無縁なところに立つことははや不可能であり、運動体そのものが、状況から、その内的論理から告発されていく運命をのがれることができない。（精神の闇屋）部隊として状況に深く関わっていくこと、これだけが全共闘運動が捕捉しうる唯一の（テーゼ）であるように思われる。「いいかえれば、革命派や革命党になるまえに、かならず革命的であることである。」（吉本隆明）

（「工作者」の集団である全共闘が、たえず自己検証の過程として状況を含もうとした場合〈党〉と〈大衆〉、〈意識

げしく対立する工作者の群―双頭の怪獣のような媒体を作らねばならない。（谷川雁）

飢餓を贖うことは、原罪に導かれて徊う意識ではありえない。みずからを倦むことなく挑撥しつづける意志である。捕捉したい浮游状態に駆りたてる意志は、無機的定型集団とは烈しく對峙せざるをえないし、對峙という行動がそうした意志の永久的持続を可能にしていく。

六十年安保闘争が既成前衛の神話の存在を運動の渦中で粉々にしてしまったにも拘らず、一時期流行した清算主義的自己総括をくりかえしていった中で鉦澤のように表象となつて浮んできたのは、旧態然たる〈断言・肯定・命題〉であつたこと、既存の言葉の意味自体が何ひとつとして問われなかつたこと、それは六十年代が流動的時代であつたにせよ、自体と対象との烈しい相克が呼びまます緊張に耐えることができなかつた時代的狀況を鮮かに彩っているといえる。

だが、政治過程の具体的進行に即していえば、六十七年十月八日の羽田闘争で公然化した大衆（実力）闘争、そして何よりも六十八年後期の東大、日大闘争の急速の深化は、六十年代の闘争の政治的総括、思想的総括を運動・状況と密着したかたちではじめて可能なものとした。六十年の余燼が残っているなかで密やかに私語として語られていたも

性）と〈自然発生性〉といった言葉を状況と関わりなく語ることがはたしてどれほどの意味をもちうるか、先験的に〈大衆〉と対立し、〈指導〉する〈党〉が実存しうるのかがたえず問われていかなければならない。この疑念の提出が、自己が〈工作者〉であると自称する意志と関わりなく、したがって運動総体を担う主体の意志と関わりなく行われ、喋るならば、単なるお喋りのくりかえしに止まるどころか、アンチ・セクトという強力なセクトを形成することによって運動の阻碍になる危険を帯びている。

が、六十年安保闘争が、〈擬制の終焉〉を現実の運動そのものの進行の中であからさまにしていったにもかかわらず、闘争主体に位置した学生運動が、インテリゲンツィアの自立した運動として徹底化することに失敗し、擬制にかわる〈党〉の速やかな創設を多かれ少なかれ組織的総括とし、その後の自己の課題とする中で闘争主体の座から滑り落ちていったことを没却しては現状をたえず告発していく主体とはなりえない。六十八―六十九年の学生の反乱は、それが学生の反乱であるという理由で、〈再生前衛神話〉さえも白日のもとで告発する自立的主体の運動をより可能にしているし、運動自体が有機的体質を保持しつづける限りにおいて、そうした告発を自己を含めた総体に向って行ないつづける。



自立したインテリゲンツィアは、およそ実存しえない抽象であるかのようにみえる。〈知性〉を告発する言葉が、〈知性〉の泥濘にまみれた言葉を用いることを拒んでいるかのようにみえる。だが、田村隆一が、めくらめく言葉を使いつくすことによつてしか、〈言葉のない世界〉を構成することができなかつたことを、暗喩によつてしか〈直喩の道〉を切り拓くことができなかつたことをただ逆説だと言つてしまふことができるであらうか。文化は、状況自体ではあるが、たえず自己と状況との断層を下意識のうちで探りだし、状況を対象化しようとする夢のうちなる意志である。だからそれは、解き難くもつれあつた時代状況そのものから自己を否定する意志として自立するのであり、無概念の言葉と化した〈大衆 及び〈知識人〉の両者との烈しい争闘をつづける「双頭の怪獣」として自己の攻撃的性格を復権しようとする。

日本の〈近代の超克〉が、近代を異質な阻碍Ⅱ西洋と規定することで古典近代への思弁の回帰という循環論に終つた昭和十年代の位相に、今、我々は、負の座標軸からではなく、Yを超え、Zのベクトルをもつて突きささつていかねばならない。およそ普遍的近代を措定することにより日本の近代の特質を捜し出す作業は、定置すべき場を自己規

言葉を喪つている者たちの発現の様式ではない。言葉そのものが、最も強力な武器を用意するものにならなければならぬ。〈暴力〉がそれだけで強力な思想表現であることに、それは連続する。

学生の反乱が、学的秩序を破砕する意志の結集であるために、それは早くも〈異空間の断片〉をも保有していこうとする意志をもちはじめにいたる。その基底的発現たる全共闘は、行為のエネルギーの群集合であらうとすればするほど等質なものに昇華してしまふことは困難になる。だがこうした困難性こそ、永続的反乱を可能にし、過去の、〈知性〉死語と化した先験的〈未来〉を根底から白日の下に曝きださうる揚力なのである。個体の意志がそれぞれに総体を担う全共闘運動は、そのそれぞれがもつ意志にあるいは和解放したい異質なものを含んで発現をしつづけることであらう。が、そうした個体の意志が、状況と関わりあう過程でたえず否定を繰り返すのでなくなるならば、したがつてまた状況に垂直に突きささる意志を喪うならば、またしてもその意志は既成の無概念の言語に凋落してしまふであらう。六十年代前半に私語として慎しく語られていた意志が、日々その内実を過程の上で検証されはじめようとしている。しかも学生の反乱が自己規定の徹底的展開の過程においてのみ否定と無限の拡がりを持つものであるために、自立した主体の否定的契機を伴つた自己の透徹化は、

定することもない思弁の遊技をこえるものではありえない。近代は反近代、合理にたいする非合理を述べたことで超えることができなればかりか、近代そのものの全体像を浮彫りにすることができず、そうした反近代、非合理はたちまち近代に含まれてしまい、逆に近代の強力な一翼と化する。状況を段階的図式によつて整理する伝統主義的二元論は、状況の客体的推移の涯の夢想に未来をのぞくという素朴一元論と同質である。状況を切断して自足し、ありようもない普遍を縫いあわせようとしてきた戦後〈知性〉は、まず行為者としての発言を持ちえないことから即自的にその醜態を露わにした。近代的合理主義、市民民主主義は、戦後史の過程で言葉を化石にしたにとどまらず、意味の様式化を図りつづけてきた当然の帰着として自己の存在の基底において告発されることになった。即自的戦争体験を、あるいは段階論的思考によつて、あるいは素朴一元論的思考によつて、忌しい風景を自己と切断したと思ひこむことではしか状況を見ることができず、向自的に邂逅しつづけることができなかつた戦後〈知性〉は、超克をさえ超克していかなければならない現代の上向的状况ではたちまちのうちにその生命を失う。言葉に新たな意味を賦与することが必要なのでない。〈伝達の可能性〉たる〈工作者〉の意志は、言葉を分解し、その基底で意味そのものの様態を問いつづけることに行為の意志を探りあてる。〈暴力〉は

決して差別の構築、小児自閉症状を呈するものではなく、差別の非差別への飛翔を遂げることで〈舗石〉へと拡がりをもつてすすんでいく。

我々が、行動主体として個別に全共闘に深く関わる場合、全共闘を〈自称〉する意志を所有しえた場合に、「革命は、屢々革命家の手中に扱われることによつて革命的な性質を失う」(植谷雄高)という言葉がたえず自己に突きささるものとして把えていかなければ、逆に状況に垂直に突きささっていくことは不可能にならう。(「触」同人)

〈付記〉文中、ゴジック体の小見出しのうち、出典の不明なものは、『壁は語る』からの引用である。

私は、筆を置いた後においても、いまだ自己の位置を確定しえないでいる。辛うじて全共闘を〈自称〉する位相に立とうとする志向に支えられて、自己の発言を対象化しようとした。が、これが冗舌に墮してしまつてはいはしないかという危具と焦りの痛みを持ちつづけることのみが、この極めて〈私的〉な全共闘論を〈悪無限〉から救い上げるものと思つている。

# 叛逆的ロマンの断章

## 中谷寛章

1 明かるさに俺いて顔削られる石仏ら

目が醒めると 一面めくらめく視界であった 舗道を流れるはなやかな色彩 百貨店の屋上の回転木馬と飛行塔 そのどかな旋回 慈善事業主催の定期的なフェスティバル 歩道橋 そして故郷では沈丁花と金木犀の甘い香り そのなかにぼくがいた 新調の服を着て家をでれば 教師も牧師も友達も やさしかったし 図書館も音楽堂も商店街も

明かるくそして満員だった

豊富な色彩 豊富な活字 豊富な会話 豊富な……ぼくはこの明かるさのなかでの充足感を満足すべきだったのかも知れない だがある日 この明かるさのなかで あだし野の眼も口も表情もない あの無縁仏の群像のように サカサと風化する自壊感 この明かるい視野のなかで ぼくが凝視していたものは何か そしてまた この明かるさのなか ぼくが獲得してきたものは何か ぼくらをとりまくまばゆい猥雑な豊富感 そしてその豊富さのなかで

の不可解な欠如感 気をつけるノ ぼくらを覆っているこのまばゆさは ぼくらの眼をくらませる幻術にすぎない かつて語られたことがあるか ぼくら自身の風景の色彩や輪郭 そしてそのなかでのぼくらの存在の投翳が 想像せよ この明かるさのなかでの欠如感 まばゆさのなかで抜落ちてしまう ぼくら自身の風景を見失ってはならない 《想像力の欠如 それは欠如を想像しないことだ》

2 疾走後の渴れた眼で追う湖と街

ビルの稜線から稜線へとキラキラ乱反射するまばゆい光沢の街路を ぼくはどんなに疾りつづけたことだろう 意識の底部にいつからか仮構されていた《街》 その彩られていない白地図を埋めるため ぼくはぼくよりわずかに先を走る青年たちの 集会場や劇場をかけめぐっていた だがそのときすでに《安後》《ぼくら》という世代意識はすでに崩壊していたのだから それは《連帯の挨拶》といった共存意識ではなく 昆虫の走光性に似た青春の習性 否 ぼくの意識の懂着だった

3 不意に醒めかなしきまでの遠花火

ある刹那 こうした世界があるいは「草原の輝き」「シベールの日曜日」のような原像が ぼくの心をやさしくさせてはくれたが そのときの心のうごきが ぼく自身どこに位置すべきなのか ぼくにはわからなかったし また《やさしさ》をそれ以上問いつめようとはしなかった それをよくないことなのだ そこには罪悪感に似たてらいがあった ぼくはただ少しでも多くの光景にめぐりあい ぼくに与えられた《街》の白地図を 完璧なものに仕上げようと ひたすら街から街を擦過した

ぼくがはなれてしまったのだと

きみは信じてはいけない

ぼくはどこへも歩きだしてはいけないのだ

ぼくがみてきた風景は

きみの瞳に握られたままで

ぼくはそのなかで身動きできない

改築された故郷の停車場を小走りに降りる男

オーバーの襟をたてショウウィンドウをのぞきこむ男

アパルトマンで小さな秘事に酔っている男

きみの眼の前を無表情に過ぎてゆく脂肪太りの男

《ああ

顔はいつも裸だ

ぼくは長い間そのことを忘れていた》

それがぼくであるのかも知れない

#### 4 螺旋階段降りれば蹴鞠少女の渚

眼が渴ききつているというあの不可解な衝動以外に、ぼくをひきとめるものはないのに、ぼくはなぜこんなところに佇っているのか、わからなかった。不意に眠りから覚めるように、一世紀まえの岩乗な鉄橋をくぐり抜け、銀色の金属で編まれた螺旋階段の上に、ぼくはいっつか佇っていた。欄間の隙から、渚に遊ぶ少女の姿をかいまみた瞬間、ぼくの〈志向〉のすべてが、とつぜん足をすくわれたように瓦解した。そのときぼくを捉えたものは、神秘的な啓示のように透ける彼女の声であったのか、無心に鞠を蹴る彼女の無邪気な仕草であったのか、冷たく光る黒い瞳と、その奥に秘めている妖艶な翳であったのか、あるいは彼女の足元からどこまでも拡がってゆく青い渚の風景だったのか、ぼくには何も理解できないで、ただゆるやかな曲線を描きながら階段を下りていっただけなのだ。この脆弱で個的な行程への執着、あるいはぼくは、  
《あなたはいでっがーをよみたれどとめのほほはわすらへぬかも》  
といった昭和十年代のストイックで危険な浪漫を夢みてい

るのかも知れない、それがいけないことであっても、ぼくは率直な心情を尊重しよう、かつてのように暗い時代ではなく、こんなに狼狽で明かるい時代であるのなら、ぼくらはきらめく陽光のただ中へ、気はずかしいぼくらの恥部の全てを晒そう、そしてふたたび、誰にも先取りされないように、自らの手で奪回しようではないか

#### 5 記憶のごとく海荒れ加速しつつ覚め

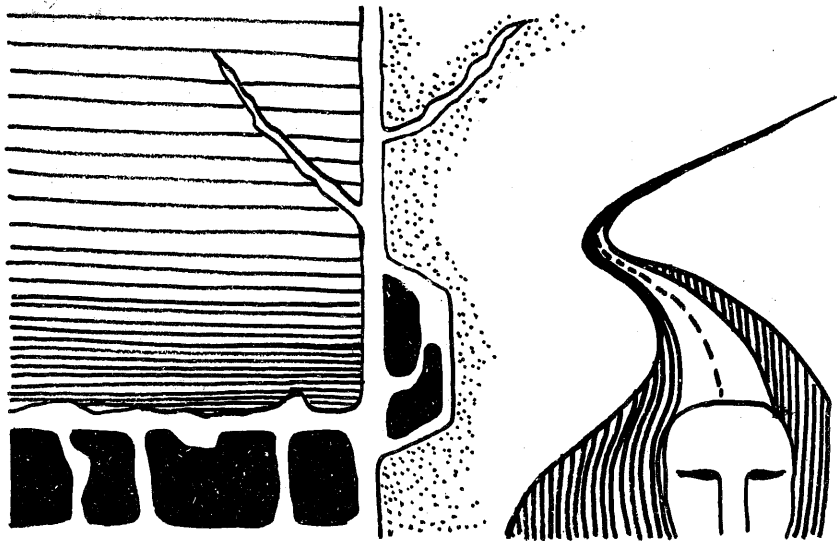
ぼくが、ぼくの内部でみだしてゆくもろもろの感情の起伏、あの路地を右に曲り、さらに数十メートルいったところに喫茶店「A」があるといった行為の選択、母親の手紙や恋人の手紙、ぼくの生活に起こるありふれたさまざまな事件、一つの行動がどんな結果をひきおこすのか自分で意識している行動の決断、この女ならぼくをひきつけるにちがいないという明らかな嗜好、それらはぼくにとつて、きわめて独特のものであるはずなのに、なぜかいつもぼくのものになっていない不安に襲われる。

《ぼくらはおそらくあまりに似かよっているので、出会って感じるのはおなじ色、おなじ形のなきさの砂の、こぼれおちる音ばかりだ》

ぼくはまだ苛酷に傷ついたことはないのに、いつも〈ぼくらの絶望〉という嬌声のなかにいる。そのなかで、ぼくだけの声をみわけることはきわめて困難だ、だがそんな声にまどわされるな、傷つきたくないという裏返された合唱、その実、だれもがみんな健康なのだ、だから、舗石に鮮烈な血の輝きをもつ、ぼくら自身の存在の影を刻みつけるために、《健康に終止符をうとう！》

#### 6 眠りは空よりガラス器の蒼い落日

不意に襲ってくる眠り、街はどこへいっても母親の子守歌に似た秩序、すかさず、なだめられ、結局ぼくらの帰るところはきままっている、だが眠ってはならない、〈寝る子は育つ〉ということわざは秩序が仕組んだまゆつばだ、石壁に嵌められた大きな水漕のなかで甦える蒼い落日、その落日を超えて、夜の斜面を滑走しよう、眠りのなかで眼を醒ませ、夢と現実、情緒と理念、思想と営為、虚構と実体、その乳白色の間隙で、ぼくらは死者の啓示に似たみえないものの声を聞く、それは《死ぬまえに、きみには何もすることがないのだ》という不安と苦悩の翳、そしてそのなかでのデスベレイトな恍惚感、そのように、ぼくらの下降の行程は、夜の斜面からはじまる。



7 女と訣れ解体屋敷の血の絵みる

「年上の女」長崎ブルース……ぼくは解放されている  
 ぼくはぼくの魂の自由なる意志を獲得する ぼくが自由で  
 無信仰で 軽薄な娼婦のようにわがままで 移り気だとし  
 ても その罪状をあげきだす そんな有能な独裁者はいな  
 い 女の哀切な身の上話を傾けながら心持よく酔える  
 栄光ノ やさしい絶望の極を緩慢に下降する（反近代）ぼ  
 くはやつと落着く場処をみつけたようだ ぼくらのこの  
 心情の執着を 近代主義への理念的な反措定として いっ  
 かの時代に似てきたと非難する 悟りの貌をもつものたち  
 だがまちがっちゃいけない（下降のロマン）と（遡行の  
 ロマン）を混同するものたちの 茶番劇などたくさんだ  
 《娘盛りを 渡世にかけて  
 張った体に 緋牡丹燃える》  
 ぼくはただ このカッコよさに 何もいわずに喝采を送っ  
 ているだけだ  
 きみたちはあたかも サラブレッドのようにすましてはい  
 るが ぼくらの血は純血じゃあない きみたちだって ビ  
 ーカーをちよつと揺すぶれば たちまち混濁することは  
 あまりにも多くの歴史が証明してくれる むしろぼくらは

9

過去に残された夥しい遺骸の幻影をくぐりぬけ（戦後）の  
 偏平で楽天的な光に塗れ 退屈で饒舌な言葉の群れにつき  
 あたり ぼくらはどこからきて どこへ行くのか ぼくら  
 自身にさえもよくわかっていないのに 戦後のぼくらの行  
 程を 愚劣な明快さで語り聞かせようとすものたちがい  
 る だが明かるい光と明快な言葉のなかでは ぼくらの思  
 考とポエジーは停止する だから停止してしまつた世界の  
 なかで ぼくらの心は無性に揺炎する その叛逆のロマン  
 一つの言葉から 一つの組織から 一つの運動から欠落す  
 る深淵を下降する思考形態を かつての浪漫派詩人たちは  
 〈少女〉の個的抒情から〈故郷〉の共同体幻想へと遡行さ  
 せることよつて掠取した だが彼らがさらに〈少女〉か  
 ら永遠の少女＝神 〈故郷〉から永遠の故郷＝国家幻想へ  
 と ロマンを逆上昇させたところに歴史の悲劇があつたと  
 すれば あらゆる愚劣な明快さからはみだそうとするぼく  
 らの叛逆のロマンは どこで収斂されるべきなのか 性急  
 な結論を導入するまえに ぼくらはまず内沸する（叛逆の  
 ロマン）を詠歌する

8 混血であることを誇ろう 流行歌やヤクザ映画とのぐつた  
 りとした近親相姦に幸あれ！

ぼくはかなしそうな顔をし あなたはかなしさそのものだ  
 〈かなしそうな顔〉から〈かなしさそのもの〉への越える  
 ことができな空間を 畏れることができな空間のならば 詩  
 を作ろうとするな 饒舌な相貌と成熟のなかで色褪せてゆ  
 く詩のジャンル 華麗な言葉をもちながら 詩人はかなし  
 そうな顔をすることができが 彼らはかなしさそのもの  
 のなかで死ぬことを脅えている 戦後の明かるい状況は  
 かなしさと反抗の相貌をもちながら 詩を書くことができ  
 る詩人と 詩を語ることができける批評家を多く産みだした  
 が 詩をおこなうことができる詩人は まだ光の膜裏遙か  
 にかくされたままで だから軽々しく言葉の武器を信ずる  
 な なぜなら〈詩〉は 言葉から欠落されてゆく 音もな  
 く 色彩もない リズムもなく また性急な意味もかたち  
 もない風景のなかにあるのだ 言葉から 光から 組織か  
 ら ぼくらが眼にするものもろの光景から 欠落されてゆ  
 く空白の時空 そのなかで《目を伏せて ぼくらはいまま  
 むかしもそしてこれからも 沈黙の重みをかかえているの  
 だ》

学生運動の論理

―スチューデント・パワーと新しい大学の展望―  
 新堀通也著 有信堂学生叢書 定価 五五〇円

東大・京大紛争を始めとして、現代社会と教育全般に深刻な影  
 響を与え、ますますエスカレートしつつある学生運動の思想と  
 背景を一貫した論理をもってとらえ、新しい大学への展望をき  
 わめて具体的に論及した本書は、現下必読の書と注目される。

学問の周辺

末川 博編 五〇〇円  
 学問研究の体験を通して、学問と  
 は何たるか、その意義・目的等を  
 若き人達に示した必読の書である

駒場の学生たち

山下 肇著 五〇〇円  
 変革の季節を迎えゆれ動く東大駒  
 場の学生群像を浮彫りにする。

革命の幻想

樺 俊雄著 六〇〇円  
 「パロール」抄  
 J・フレイヤー  
 北川冬彦訳 六四〇円

講座 現代哲学入門

岩崎武雄、永井成男 編集  
 沢田允茂 編集  
 第1巻 現代の哲学 第2巻 現代の論理学 各巻A5上製函入 八〇〇円  
 第4巻 現代の価値論と倫理 各巻A5上製函入 八〇〇円  
 現代の直面している諸問題とに取組むべきか。本講座はバランス  
 のとれた構成と平易な表現により、現代哲学の最新成果を集大成する

有 信 堂

●東京 文京 本郷5-30 振東141750

京都 左京 百万遍 振京 23523 ●

# 遠隔都市とその葬り

奥野路介

あやうく炭化するかとみえるエルムが、ふと泣きたくなる遠くまで梢連ねるだけの冬なら、ぼくはあの北の都に住んでいい。だが北海道の雪嵐はどうだ。やさしく垂直に降り積む内地の夜々の雪ではない。殆んど氷の粒の、水平に駆けめぐるあの雪嵐はどうだ。マゾヒスティックに身をよせる街をたいて夜明け、そうして嵐ははッと落ちる。あらゆる路地がきりきりと凍える。壮麗といえど壮麗だ。地獄といえど地獄だ。

石狩支庁全域に荒れたそんな雪嵐のある朝、国文学徒Mはくびれて死んだ。ぼくらのちっぽけな集団に狼狽をきわめた追跡の射程の外で、しかし彼のその英断の意志は、いまだ自らに憩つてあるように思う。ただ当時ぼくは、天井をはずして梁からおろした荒縄の輪に首を支え、足場にした書物の束の上で、眼を閉じ腕を垂れて突如風音の途絶するあののめつてゆくような数瞬を待っている瞑想的な青年

くが開くまで、既に書き落されたことさえ誰にも忘れられていたその孤独な内容を、かつてそこにMが在り今はMの非在する白点へ、送り返してみようと思う。あの世で赤面したMがはだして逃げ出すのは勝手だが、ぼくにはそれ程の悪意もないのだ。

《ついにはいつもその南の都市へ、私は帰らねばならなかった。倨傲にも私を慰撫し、安らい得るか見える私固有の領土へ、絶えず私は帰らねばおれなかった。それはひとつの不覚であった。だが私は帰り、帰りながら、しかもまたその南を否まずにはおれなかった。その南の、あたかも母たちの時空のような都市を、間断なく放逐し潰走させ殲滅せねばおれなかった。殆んど帰り得るか見える自らの土地へ帰りながら、ほかならぬそれをどんと駆逐するいわばその手応えをもつて、はじめて私の精神は自らを行為へと結晶させてゆくことができた。そうして再び私はまた、あのやさしい帰還の姿勢へと融解してゆかねばならなかった。

ともすれば私は、私がこの北辺に生れ育ちとうとう今日まで津軽のむこうを踏まなかったというただそれだけの理由でもう甚しい郷愁にとらえられ、つい窓から南の方角をのぞいてしまいたい衝動を絶てなかった。全天に雲がのびていて西には落日の所在を告げる力弱い赤が溜っている時など、もし南の地平にわずかな暗青の空が残っていたりす

の表象を、執拗に想起して止まなかった。

ぼくは今京都に居る。なつかしいMの手稿はあたたかいぼくの書棚で黄変している。メモは数頁ごとに段落があつて、そのうちの一項が妙に不気味だ、それは「京都」とタイトルされていて、しかもMは断じて生涯京都を知らなかった。「京都」とそうしるした古いMの文字から、そしてぼくはぼくの今居る京都の街をイメージできない。それはぼくらのあずかり知らないどこかの都市を指しているようであつて、不可解だが地理的に限定的な意味が脱落していると思えてならない。や、大げさに言えば、その標題を見るぼくは多少震撼している。

《……それは嘆きに似ていた。ふしぎに静かな異郷の日溜り、ふるさとに似た場所に立つていてはならない」と、当時そのこげおどしの痛嘆趣味でぼくにはやり切れなかったMのメモはそう前置いてはじまつていた。ここに再びぼ

れば、きまつて私は変に暗澹として夜をむかえねばならなかった。そんな夜々、そして私は、名状し難く遮断を暗喩する夢のはげしい渦の中で、ふしぎになつかしい何者かを惨殺しつづけながらさめざめ泣きそぼつていたのだ。なぜ、虐げ殺しながら泣き濡れるのか、一体哀れな何者がこの時圧殺されつづけ、南のそこだけ美しい青空に含まれてあるどんな隠者が、なぜ未だ見ぬ私の領土の方角を遮断しようとするのか、それらはいかに不可解でありながら、だがそれは、既に私がある種の快感をこめてむしろ愛玩しようときえしはじめている夜々の優雅な定式だった。

殊に晩秋から冬にかけて殆んど終日雪雲とともにあるこの北国では、いつも南だけが暗れていた。来る日も来る日も、南の地平の空だけが傷口のように青かった。その涼しく光る透青の只中に、たしかに失つてはならない何者かがはげしく欠け落ちてゆきながら、いつさいがはげしく満ちてきていた。その架橋せんとする地につづく青空のさ中に、ひとつの難解で苛酷な意志が、不断に私を遺棄してゆく後姿を見せて遠去かるのに、しかも私は常にいざなわれている自らを思わねばならなかった。そして、そのいざないながら遺棄してゆく後姿をなお遠去け遁走させてゆくものが、ほかならぬ私自身であることも、私は認めないわけにはいかない。……

もしこれが、独在するただこれだけのメモならなんのこ

とはない。北方に身を置く者の南方への還流に関わる、それは稚拙なロマン主義的モノローグに過ぎぬ。

成程メモのMは、自身と対立物の間に、一種のアンビヴァレンツを原理とする緊張を繰り返し装填しながら、一定の拭い難い明るい距離を確認している。もしMが対象にわしづかみにされんとすることがあれば、ほかならぬこの距離がMを連れ出して、Mを占有せんとするそれを意識の中の部分的なあり方にすりかえてしまふだろう。そうして常に余白を留保しつつ、Mの精神はまたその標的の新たな刻影をもとめて飛翔せんと身がまえることができる。このメモがもし本当に独在しているなら、それはたしかにちよつと気のきいたマニフェストに過ぎぬ。

だがそれは独在していない。メモはあの一とつの中のタイトルに司祭され、それに内容的に参画している。Mの標的は京都であつた。Mの自ら架橋せんとする南方は京都であつた。

しかしでは、と愚問の発声がありそうだ。しかしでは、Mはロマンテイカーではなかつたか。本来地理的に限定的であるところの一地方都市に帰還の憧憬をもつたMは、既にロマンテイカーではあり得なかつたのか、と。これはその通り愚問である。

Mの思惟の形態は異議の余地なくロマンチックだ。ただ京都が京都でないだけだ。

Mの京都は具体的ではなかつた。Mに京都とは、むしろひとつの方角そのものとしてあつたかもしれぬ。それはMにとつて、常に一步先を逃れゆく影であつた。そしてしかも、そうでなければならなかつた。

思い出す。ぼくが浪人二年生だつた年の夏だ。ぼくはその時も京都にあつて、あの洛北の松ヶ崎から宝ヶ池の方へ抜ける丘の間道を、一人で石でも蹴飛ばしながら歩いていたので。そうしてふとふりかえつたぼくの眼下、ぽつかりと円い静謐の底に、午後の斜光に打ちすえられて冴え冴えと白金のように光る京都の市街が沈んでいたのだ。不覚にも、そこでの俺は無感動だつたんだ」と、札幌でMに話しながらぼくが言つたかどうか、今は自身にも定かではない。が林越しに、恐らくぼくはチラとだけ、その美しい夏の京都を瞥見したに過ぎぬのではなかつたか。

しかしである。しかし、その一瞬の真白な京都の光景が、数年のあと、ついに京都に学業の場と得られずに札幌にあつたぼくをもとらえて離さないいわば京都体験のサンボルとなつていたので。

どうしてか研究室の雑用に疲れた日など、スタンドを消してふとんにもぐる時に、ようやく広がりはじめる闇のさ中、たそがれに似たふしぎなところの涼しさのかけで、ぼくはきまつてあるまばゆい夢想を目撃するのだ。

それは、そこだけ陽の照っている遠い盆地の、明るくは



げしい寡黙。みだれ散る晩夏の光に濡れている遠景。手のつけようもなく燃え上る遠い夏。――

「帰る、帰る、……」と、その時ぼくのころはせめぐあいのもの静かに打ち捨てられてあつたようなぼくの異郷の疲れの中で、こころきしむ足をあげてひしめきせめぐ。雨後、濡れ光る晩夏の盆地、そのように遠い涙まぶしの京都のぼくの顔へ帰る、と。

ぼくはしばしばあの百二十歳の老モーゼの祈りを想つた。願わくは我をしてわたりゆかしめヨルダンの彼方なるよき地よき山およびレバノンを見ることを得させたまへ……と。そうしてなお万軍のエホバに拒まれた彼の、ピスガの頂きに遠望したものも、やはり遙かな、輝く白いレバノンではなかつたろうかと、ぼくはよくそう想つたのだ。

昨年、京都へ帰ってきたぼくは、夏にそのなつかしい丘の間道を歩いた。林越しに、くらくらと光る京都は変らずにあつた。そしてぼくは、やけに暑いなあとときり思つただけだ。

遠隔ということがどういふことなのかを、Mは既に知つていたのではないかとぼくは考える。

「日本的」という概念がある。スキとひなびた寺の情景と云々と、そういうありきたりのあの「日本的」である。これが北海道では実に貴重だ。

植物の水平分布の法則と動物についてのブラキストン線

は、北海道を所謂「日本」から切断する。津軽のむこうを人々は内地と呼んだ。新開地の北国に代々の家門はなく、コトバは標準語だが、その機能は雑居地の調整原理にほかならぬ。アメリカ風な木造とスペイン風のチャペル堂だが、ポプラとアカシヤの繁みのおかげで、とりどりの金属屋根に布目ガワラなどは一枚もない。九州から東北に至る多様な出身をふるってみれば、残る共通項はただ「日本的」という不安定な概念へのいつに変わらぬ衝撃的な郷愁だけだ。内容の規定も明確でないこのコトバの王朝風な莫とした広がり、殊にいわゆる日本的ではあり得ない北海道をフィルターにしてみれば、暗黙の了解があつていいと思われる程の固い実体として映る。そしてこれを過不足なく担っているのが京都だ。多少の誇張が許されるなら、北海道で日本的とは京都市でなければならぬといつていい。これも遠隔のゆえにだろろうかと思う。だがそれは、大阪の隣り名古屋のむこうの京都とはや、違ふ。むしろコトバの響きとしての「キョート」だと言つてしまつていい位だ。

人々は殆んどが京都を知らなかつた。だのに京都ときけば、なんだかそうせねばならぬと誰かに教え込まれているふうに、夢のような表情に晦暗な湿りを溜めて「ああ、ああ」と呻いた。人々はそうして、未だ訪なわさる幻の古都に自らの美意識の淵源を据えて、見よ俺も立派に日本人であつたと安堵している様子ではなかつたか。

煮しめられてあろうと、そんな具体的京都とはMの南方は独立だ。遠隔のゆえにである。してますますMは、この遠隔のための作業に余念なかつた。《それは滅びながら生殖する女王蜂であつた。ふるさとよどうか豊饒であるために滅びることを忘れないでくれ》と、Mの「京都」の末尾にはあつた。

や、論旨を移調すれば、「危険である」とぼくは思う。京都にあらざることに於いて京都市的であるという京都は何か。離れば離れるだけ、われわれの美意識のうち恒常的な帰還点として形をとりつづける京都とは何ものか。それが不斷に一步先を逃れゆく影として形而上の非日常でありうるかぎり、それはわれわれから、日常とのディアレクティッシュな交渉を欠落せしめるだろう。われわれに、もしわれわれをいざない癒す究極の外在があるならば、われわれは日常と相克する必要はない。その時日常は必要悪としてのみあつて、われわれはただそれと和解してさえないばいいからだ。

京都を爆撃の照準から外そうとしたアメリカの知性はよし高貴であつたとしても、その申し出でを受諾した彼国の武人の企図は、それが無意識的であつたにもせよ、流石老獪であつたと言わざるを得ない。ミヤコ京都を（日本的ふるさと）のサンボルとして留保しておくことから、われわれの、本来は定かならぬ日本の美意識に相も変らぬ帰着定

成程北海道ではこれがことさら顕著だけれど、これは大なり小なり全土に敷衍している現象だと考えられる。

神社仏閣に至る所いささか過剰だ。たなびく霞の山々とタンポポ・スミレ、それらはどこにも珍らしくなんかない。そうして、かゝる「日本」にどっぷりと飲吞されて、われわれの幼年と思春期は過ぎてきた。やがて生活に疲労し、そうあらしめた文明への怨嗟ののちに、再び帰りゆこうとするなつかしい故郷の風景のむこうから、日本の古都はなんと甘美にいざない立つだらうか。そして遠ければ遠いほど、この時京都は一層に京都市なのだ。日本人の過去志向をそそるサンボルとして、今日も京都はあるにちがいない。

あのささくれた北辺の都市で、Mの京都は、こうして絶えず彼をいざないゆく架空都市たらねばならなかつた。それは、それに参加することによつて直ちにもつとも非北海道的であり得るところのいわば華やかな空隙そのものでなくてはならない。あらゆる「いざこか(anywhere)」への夢想のたそがれを、わびたシシオドシの幻聴が、音楽的な振動的消滅自体となつて踵をわたりゆかねばならない、そうMは考えたにちがいない。マンガの宇宙ステーションのような京都タワーから御所をながめようと、独占体からのお流れである薄給をめぐつて京都弁の女が亭主をいじめよう、格子窓のみやびのむこうで電化マイホームが

点を保証しながらわれわれの政治的感覚に退行的穩健と過去志向の軸を保存し得るからである。それは、天皇制の残存が階級支配に与える貢献に似ている。

ぼくは今も意地悪く、苛酷な被爆都市、焦土京都を夢想する。草一本ないヒロシマの酷暑を、あの輝く白い夏の盆地に重層させる。そこからわれわれとそしてあのくびれたMの精神がどこへ連れ出されてゆくものか、ぼくは飽くことなく想定してゆきたいと思う。例えばそれがいかに滑稽な破天荒であらうともである。

付加すれば、従つてこの困難な古都に礎を据えてしまつた大学が、時に反官・反東京を標榜しようとしてそれが相互の切嗟にむかうかぎり、に於いて許容することもできる。主に理系の分野が、効用的必然からローカル性に接近するもの、いたしかたないかもしれぬ。だがもし京都の学問が、自らを貫徹する理念として、美的古都の立地条件をポジティブに考慮しようとするなら、それはバリケードの中で紅萌ゆるをやらかすアナグロと変るところはない。遠隔ととも絶えず美的象徴性を帯びながら退行志向の核点とならざるを得ない京都の、その只中であつて、もしなお京都的の幻想に癒着するならば、一体京都は他のどんな場所であらう非京都的でありうるのかと疑わねばおれない。そうならば、変革の論理とわれわれは無縁だ。

## 後記

▽私はあなたに文字を最初につきつけねばならぬことを残念に思う▽われわれはあまりにも文字に近づきすぎており逆に(リアリズム)からはあまりにも無縁な所にいる▽その意味で今は誰もが語る時ではないことを知っている▽というのには語るすべを知らないからではなく(語り)(読む)ことがわれわれにとって何であるかを知っているからである▽われわれは今自己表出の新たな地平を獲得しつつある▽それは己を情況から隔絶させるところから出立した▽このような小冊子で百万言を費したとしても「私」と「貴方」の間に横たわる越えがたい亀裂を確認するだけでであろう▽この様な消耗な作業を冬と春の谷間で用意しなければならぬ主要な事情は想像していただけると思う▽のどかな春の始まる奇妙な雰囲気の中で貴方との出合いを持たなければならぬ時心と饒舌にならねばならない事情も察していただきたい

(GAN)

■さわやかに醒めることをうしない、日ごとと遠ざかる憧憬が昇華する余裕もなく、ひとつの雑誌が陽の目を見てしまった(解放)された校舎の一室で私たち編集者のひとりびと

りが互いに肩を寄せあうこともないままに、肉体を意識をくまなく支配し、跳梁しつづける焦燥ともつかないがらつばい哀しみとどこまで行を共にできるものなのか。

■この本が、創刊号になるとすれば、第二号がいずれいずこか闇のなかから忽然と姿を現わす時がくるかもしれない。定型を混濁の渦に投げ入れてみようという試みが、定型のうちでしか現出しない痛苦を伴った逆説をたえず告発する意志をみうしなった時には、文字は意味のない過剰にしかならないという予見が、こうした編集という作業を辛じて可能にできたようである。

大学闘争は、さらにさらに拡大していくだろう。そして私たちは……(IM)

▼イエロー・ブルーの春。英のレモン。有理子を青い背広が……。〈一抜けた!〉。未完の原稿にホワイト・ローズの香水。パリケードの高みを克えぬまま、時計台のゲバラが笑って。(カッチョエー)

蒼い森へ到る小径に。そして三人姉妹も、特に末のおしせまる桜花賞。透明、晴れての幸福―嫁ぐ日も近く、逝く日も近い。

清算を迫まる鉄格子の言えぬ明るさが、果てることをしらない遊びと倦怠。更年期障

害に因するヒステリカルな叫びに、旗は掲げられた。(国歌吹奏!)

遠く異地のささやきが、  
(ゲバリヤ監獄/ゲバリヤ地獄/墓は/手前の爪で掘れ!)。(黙禱!)

〈一つ、男になりたい。一つ、男で生きたい。/一つ、男で死にたい。〉(大爆笑!)<落涙!>

イエロー・ブルーの春。パイプの美味い季節だ。眠りから覚めよ!。蛙が躍んだ。(MU)

## 大学 創刊号

昭和四四年四月二日発行  
定価280円(〒50円)

編集者 中谷寛章  
発行者 元木敬郎

発行所

京都市左京区吉田  
京都大学学生部教養部発行  
学生団体 京都大学出版会

# 東大紛争の記録



## 東大紛争文書研究会編

絶賛発売中!

価四八〇円

入試復活をスローガンとし、「確認書」の批准をもって、大学の正常化を幻想した東大当局は、機動隊のガスタンによって大学革新の基本的問題を提起した全学共闘会議を粉砕する一方、特権的権威主義への未練断ちがたい反動的秩序派および反革新的民青に大きく依存して、「收拾」に狂奔した。だが入試中止は最終的に決定し、教官と学生また学生間の断絶は一段と溝を深める結果になった。そして全共闘の提起した大学革新の方向は再び学生の間に新たな力を蘇らせつつある。本書は、こうした経緯をもつ東大紛争過去一年の全経過を資料によって跡づけたもので、今後の展望をうらうえで必読の文献であり、大学紛争解明の書である。

この「紛争」に深いかわりを感じつつつけている者として、ここに集録された文書の多くにすでに目を通していたにもかかわらず、こうしてまとめられたものを通読してみると、そこから何か「歴史」とも呼ばねばならぬようなものが、浮かび上ってくるような気がする。(エコノミスト・田中仁彦氏評)

東大紛争は、一大学の機構改革というような問題をほかにこえて、すべての科学者、教師、学生にその存立基盤にかかわる根源的な問いを提起している。同じく長期の紛争の渦中にある大学に籍をおく私には、本書は、単なる書評の対象以上の意味をもって迫ってくるものをもつ。(自然・広重 徹氏評)

日本評論社 東京都新宿区須賀町14/ 振替東京16番

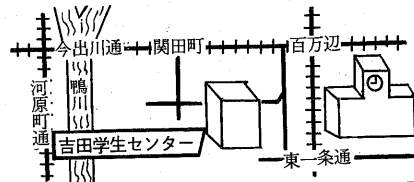


YOSHIDA  
STUDENT  
CENTER

CONVERSATIONAL  
**ENGLISH**  
AND SPANISH

TEL 075 (771) 6470

外国人教師  
海外留学向  
10~16人グループ



INSTITUT FRANCE JAPONAIS DU KANSAI

フランス語  
＝春季講座＝

開講：4月14日(月) ～ 6月20日(金) 10時

講座：初級・中級・上級・会話・専攻科・視聴覚・美術  
通信講座

関西日仏学館  
京都市左京区吉田東一条  
TEL 771-1430

大阪文化センター  
大阪市東区南本町4-41  
イヨ・ビル8階 TEL 251-9371

777人と続く娯楽大作番組

カラー大型・奇想天外な7つの作戦で700億円をアタック・絶賛公開中

新・黄金の七人 7×7

カラーバナビジョン・プロ7人の悪党が50万ドルを奪う犯罪映画の傑作

汚れた7人

カラーバナビジョン・西部劇に新しいアクションを盛り込んだ超A級作品

新・荒野の七人 馬上の決斗

男性アクション  
映画の大作番組の  
ロードショー劇場

新  
東宝  
京極  
221 0636

■美松学生映画友の会

会員募集中!!

(特典) (会費 6ヶ月 30円)

- ★ 映画館……3割引
- ★ グランドバス……2割引
- ★ ビューティーバス……2割引
- ★ 美松カレー・コーヒーコーナー……カレーのみ10円引
- ★ お好み焼と甘党美松……お好み焼のみ10円引
- ★ 美松雀荘……2割引 (20才以上会員証ご持参の方に限り)
- ★ 美松別館ロキシー……1割引 (20才以上の方に限り)
- ★ みどり美容院……2割引

申込受付所・各大学映画研究会・美松映画事務所

美松大劇場 新京極四条 (221)4645 美松名画劇場

新しい笑いをリードする京都花月の演芸陣!

新京極  
TEL 221-  
4061

吉本コメディアン総出演

吉本新喜劇



漫	落	奇	音	漫	歌	曲
才	語	術	楽	談	謡	芸
			シ		浪	
			ョ		曲	
			ウ			



映画鑑賞は最高の雰囲気

東宝直営館で……

70% 洋画ロードショウ 70% 洋画ロードショウ 東宝映画

パレス劇場 ■パレス映画 ■パレス名画座

京都市下京区四条河原町西

四条通りからエスカレーターが案内致します

大学問題・安保問題の書物を  
豊富に取り揃えております。

# ナカニシヤ書店

(京都大学教科書販売店)

京都大学正門前  
TEL 761 4121(代)

新入生のみなさまおめでとうございます  
すてきなあなたにおくるニューヘヤーライン

PURPLE SHADOW



美容室

# Q's

本店 銀閣寺電停西南側  
支店 東側丸銀百貨店二階

- 逞造された「ベストセラーズ」からの訣別
- 状況を問う 変革とは何か
- はるかなる美エロスへの招待

このテーマを1階~3階のフロアにアレンジしてみました。あなたの書齋にしてください。



さまざまな青春が語りだす

## 京都書院

四条河原町上ル TEL (221)1062(代)

### 株式会社大安

モスクワ留學生の語る修正主義の裏面  
— 安藤孝太郎著 —  
ソ連は社会主義国か

プロレタリア文化大革命

新訳毛澤東選集(全四巻)

ドキュメント東大斗争  
— 岩の上にわれらの世界を

四八〇—

五〇〇—

各三〇〇—

七〇〇—

株式会社大安 京都出張所  
京都市左京区川端通丸太町下ル下堤町88  
TEL (761) 6605

●現代思潮社 既刊書より

現代における平和と革命 400円  
黒田寛一著

社会観の探求 350円  
黒田寛一著

民主主義の神話 400円  
黒田、谷川、吉本、埴合他著

擬制の終焉 600円  
吉本隆明著

原点が存在する 新装版700円  
谷川 雁著

日本の反逆思想 350円  
秋山 清著

過渡期の意識 500円  
梅本克己著

資本論への私の歩み 400円  
梯 明秀著

東京・文京・小日向1248  
振替/東京72442番 現代思潮社

# 文化と革命

竹内芳郎著  
B6上製/¥820  
△文化とは何か? △全国に燃え広がる大争闘争がつきつけるこの問題に答え  
△人間の全体性△そのものを問いかえす  
現代革命の構造を明らかにしつつ、文化と革命の新しい関係を鋭く追究する。

岩田 弘著 マルクス経済学

資本論 帝国主義論 現代資本主義

B6上製/上下2巻 / ¥900  
上巻 ■資本論と資本主義  
下巻 ■帝国主義論の根本問題  
■現代帝国主義の諸問題 ¥950

好評発売中

エンゲルス論 国家論の復権

広松 涉著 A5上製/¥1200 津田道夫著 B6上製/¥880

### 盛田書店

図書目録呈



＝現代評論社出版案内＝

東京・京橋3の11  
振替(東京)4419

—四月下旬刊—

井上 清著

# 東大闘争—その事実と論理

「大学の自治」「研究の自由」の美名の下に九十年の汚濁の歴史を重ねてきた東大の幻想は、いまや、真摯な内部変革を経て起った学生闘争の前に、もろくも潰えさった。闘争の渦中、唯一人全共闘支持を打ちだした著者が、原資料を駆使し、その本質を抉り出す。(B6・四五〇円)



日本の騒乱百年(上) 稲岡 進

農 民 志 願 岡田米雄 B6・六五〇円

黒船の渡来が日本の夜明けを告げたが、それは幾多の騒乱、真の民衆抵抗を意味したのだ。

都会の塵埃、合理的メカニズムに人は疎外されている。酪農を通じ真の実存とは何かを探る。

キューバー 真木嘉徳訳 B6・五八〇円

あゝ、荒野 寺山修司 B6・四八〇円

R・シア／M・ツァイトリン共著。革命十周年を迎えた今、その歴史を捉えた書！

ネオンに彩られる新宿を舞台に孤独なボクサーの辿る数奇な運命を描く現代の大叙事詩！

# 沖縄返還と70年安保

新崎盛暉著 B6・四五〇円

沖縄の中央に君臨する嘉手納基地がわれわれに問いかけるものは何か。坦々とつづく軍用道路の彼方にまらうけるものは何か。二十有余年忘れられ、失われた内なる祖国の復権のために、気鋭の著者が、あますところなくその真実を明らかにした沖縄問題の決定版！！

真の民主的変革と建設をめざし 闘われた  
全東大人三万余の 輝ける一大叙事詩

# 東大変革への闘い

東京大学全学大学院生協議会東大闘争記録刊行委員会編

A5判/680円 東大民主化闘争の全経過と闘いの時点・時点の問題点と教訓を総括し、このなかでかちとられた10項目確認書などの成果と今後の東大民主的変革への展望を膨大な事実経過、主要基本資料、多くの手記を含めて、これを闘った全東大人自からの手で明らかにする記録決定版——それは学生の権利と地位、自治活動、大学運営に対する規制など今日相ついで打ち出されている政府・自民党の大学支配・文教支配政策に真正面から対決して民主的な大学づくりをめざして闘っている全国の学友・大学人・全国民の必読の書である。

推せん——古在 由重・五十嵐 顕・塩田庄兵衛・長谷川正安  
芝田 進午・田口富久治・川口 是・畠山 英高

# 安保黒書

潮見俊隆／山田昭／林茂夫 編  
協力 末川 博／沼田稲次郎 六九〇円  
家永三郎／長谷川正安

日米安保条約の危険な本質と役割を、アメリカの極東政策の展開と日本軍国主義復活の過程にそいながら歴史的・実態的に究明し、今日の安保・沖縄問題は争点とされているのかを論じ、安保の実質上の拡大・強化をめざす動向を具体的・詳細に追及した書。

姉妹編——《黒書》シリーズ

# マスコミ黒書

日本ジャーナリスト会議編／四八〇円

# 教育黒書

宗像誠也・野村平爾・宮之原貞光編／六八〇円

# 沖縄黒書

沖縄返還同盟編／三五〇円

労働旬報社

本社 東京都港区芝西久保巴町32 TEL(434)3681代振替・東京180374  
関西支社 大阪市北区豊野町56 TEL(313)4558振替・大阪47555  
中部支社 名古屋市東区新出来町5の95 TEL(711)0192振替・名古屋25442

韓国へ行きましょう！

4万円で10日間・学生どうしの交歓もできる海外旅行

旅券申請から帰国迄の手続一切代行

\*団体(10人以上)には案内者が同行します。

## 東洋観光株式会社

京都市上京区河原町通荒神口下る東側、電話 京都 (075) (231) 1630番

KYOTO UNIV.

# STRUGGLE

京大全共闘機関紙

No.6 発売中！

¥30

- バリサイ・アップール
- 反大学論 (滝田 修)
- バック・ナンバーあります。
- ☆産協、国大協路線粉碎！
- ☆全学バリケード封鎖貫徹！

京都市左京区吉田京大構内  
京大新聞社気付

青木書店 東京神田神保町1~60

増刷発売中！

## 現代日本の学生運動

広谷俊二著

青木新書  
¥250

国際的注視をうける日本の学生運動の志向するものは何か。現代日本の歴史をつらぬく反体制運動のなかで巨大な潮流を形成してきた学生運動を、戦前・戦後をつうじてとらえ、その本質を科学的に分析し、運動の性格と特徴を抽出して正確な展望を示す。

## 戦後学生運動史

山中 明著

青木新書  
¥280

反戦と学園の民主化を契機として立ちあがった戦後の学生運動は、「全学連」の結成を歴史的な画期として、どのような闘いの道を進んだか。戦後史の過程における全革命運動とのつながりにおいて正しく位置づけ、史的分析により詳細に推移をたどる。

## 世界の学生運動

小沢有作著

青木新書  
¥300

現代社会における新しい勢力「学生連」デント・パワーの本質は何か。世界各国の学生の生活と意識をさぐり、民族解放、反帝、そして社会変革をめざす学生運動の趨勢を展望し、国際学連の歴史と現実を正確に解明して、当面する課題を指摘する。

輝やかしい戦闘の中間総括千五百枚！  
全国学園闘争を闘うすべての友へ  
われわれはかく闘った……………

東大全学共闘会議編

# 昔の上におられるの世界を

ドキュメント 東大闘争

連帯を求めて孤立を恐れず  
力及ばずして倒れることを辞さないが  
力を尽さずして挫けることを拒否する

亜紀書房

東京都千代田区神田神保町一五一  
TEL (三線) 〇七五七 振替 東京 一四四三

(お近くの書店へ予約して下さい)

B6判六五〇頁表紙カラー  
ビニール装・写真一〇枚 価七〇〇円

